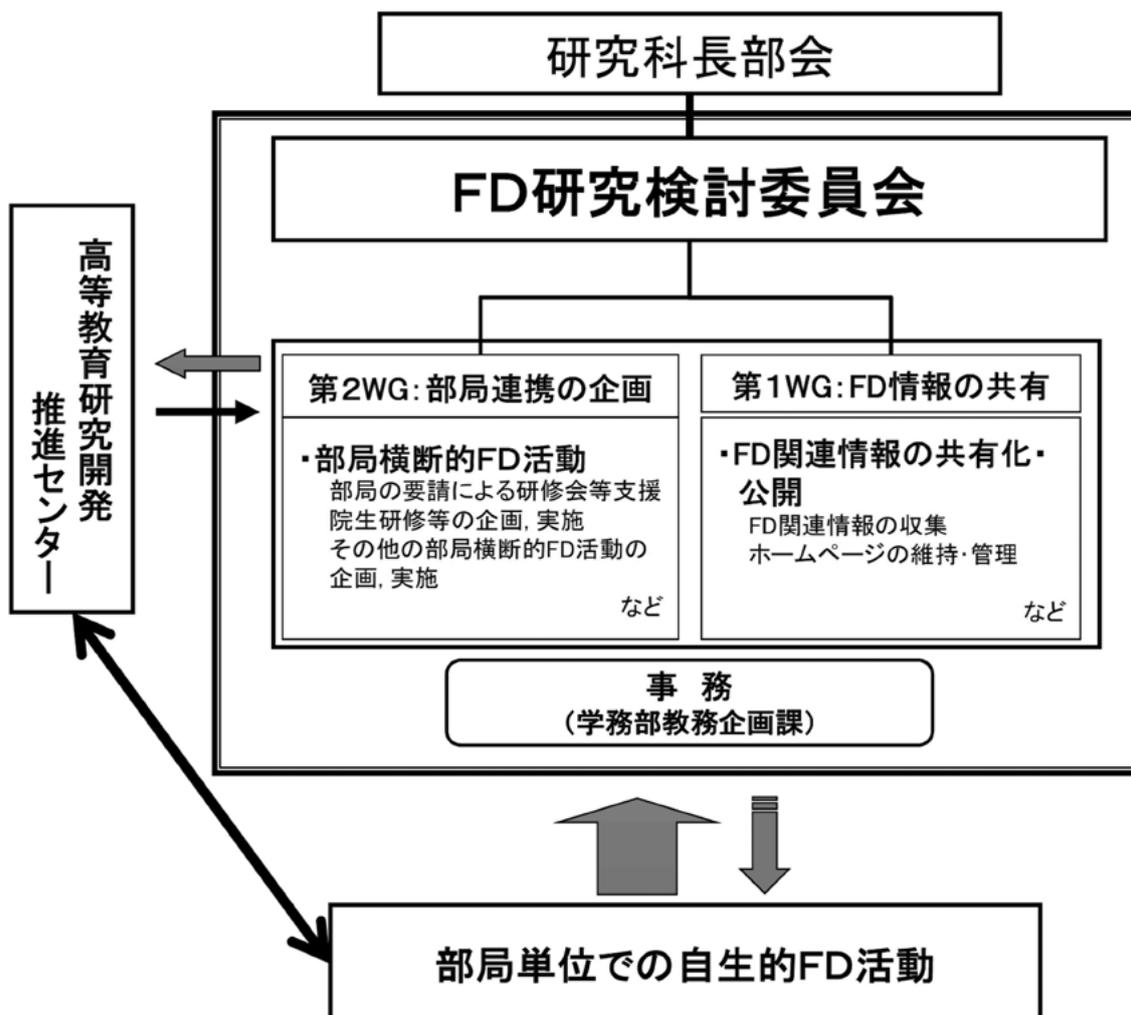


II. 学内連携

II-1. FD 研究検討委員会

1. FD 研究検討委員会の概要

FD 研究検討委員会は、FD に関わる大学設置基準の改正（2008 年度）に先立ち、2006 年 12 月に発足した。本委員会の設置は、高等教育研究開発推進センターが 2006 年 7 月に、学部をもつ 10 の研究科を対象として、FD や教育改善に関わる活動状況やそれに対する支援の要望等についてヒアリング調査を実施したことがきっかけとなっている。そこでは、各研究科がそれぞれ実質的な教育改善活動に取り組んでおり、それらの取組に関する情報をお互いに共有することが有用であり、また、その場を通して、本学としてそれらの取組を組織化することが重要であるとの認識が共有された。従って、本委員会は、FD 活動を各研究科に対してトップダウンで強要することはせずに、FD に関わる情報収集・共有の場と位置づけることが望ましいとされ、そのことから、「FD 研究検討」という委員会名が付けられたものである。また、各部署が FD を実施する際に何らかの支援を必要とする場合、あるいは、研究科横断的な FD 活動などのニーズが生じた際などに、高等教育研究開発推進センターが適宜支えていく体制をとっている。



委員会の当面の課題としては、当初、1) 各部局で実施されている FD 活動に関連する情報の集約、2) 他大学（外国の大学を含む）等で実施されている FD 活動等の情報提供、3) 公開研究会、勉強会等の開催、4) 各部局が企画する FD 活動への全学的支援体制の組織化、5) FD 関連情報のホームページ化、6) 「大学院生のための教育実践講座（プレ FD）」の開催、7) 本委員会の自己点検・評価の実施、以上 7 項目が取り上げられ、これらの課題を実行するため、ワーキンググループ（以下、WG）を発足させ各種課題に取り組んできた。WG は、FD 研究検討委員会委員と高等教育研究開発推進センターのスタッフで構成される少人数のグループから成り、情報の収集と提供、とりわけ、ホームページの維持管理をミッションとする第 1WG、および、部局の FD 活動や部局横断型 FD 活動の支援をミッションとする第 2WG の二つで構成された。なお、2012 年度より、委員長は宮川恒農学研究科長が選任されている。また、委員会の活動全般は、学務部教務企画課によって所掌されている。

2. FD 研究検討委員会の 2013 年度の活動概要

FD 研究検討委員会の活動は、二つの WG を中心とした活動の他、委員会としての活動の三つのレベルで活動が行われてきている。

第 1WG では、FD 研究検討委員会のホームページを開設 (<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/>) し、委員会の活動に関わる資料や記録、また、各部局の FD や教育改善関係の資料等を収集し、それらはホームページ上で参照・共有することができる。

第 2WG では、高等教育研究開発推進センターとの共催、協力の形をとりながら、プレ FD、公開授業・検討会、部局 FD 活動支援、『京都大学の FD』の刊行などを行っている。

委員会全体では、2010 年度より開始された、新任教員教育セミナー、FD 研究検討委員自身を対象とする勉強会などが行われている。

2013 年度に関しては、以下のような活動が行われている。

① 第 1WG の活動

◇ホームページの充実

FD 研究検討委員会主催、あるいは、部局等との共催の FD 活動が、ホームページに公開され、情報共有が図られている。ホームページ (<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/>) に掲げられている項目は、「委員会について（委員会概要、委員長挨拶、規程、活動日誌）」、「委員会の活動（主催、共催・協賛）」、「勉強会（勉強会、授業評価ワークショップ）」、「教育・学習実態調査（自学自習等実態調査）」、「リソース（委員会刊行物、部局の FD、教員の取り組み、全学の教育改善、部局の FD リソース、おすすめ授業）」となっている。

「委員会の活動」のサイトには、FD 研究検討委員会主催、あるいは、共催・協賛などの活動（プレ FD、新任教員教育セミナー、公開授業・検討会、勉強会など）の案内と実施記録が掲載されている。また、「自学自習等実態調査」のサイトには、2011 年度自学自習等実態調査の報告書が <http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/resource/2013jigaku.pdf> に掲載されている。「リソース」のサイトには、FD 研究検討委員会の勉強会などで持ち寄られた各部局で行われている授業評価アンケートが、<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/session/post04.php> にアーカイブされている。

本年度より、「おすすめ授業 (<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/recommend/list.php>)」ということで、京都大学 OCW (OpenCourseWare) (<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/>) から、おすすめ授業の紹介を開始した。OCW では、これまでに 2,000 もの講義ビデオが蓄積されており、アクティブラーニング型授業や英語での授業など、授業デザインや教室内で実際に教える際に役

立つ講義ビデオを紹介したものである。

② 第2WGの活動

◇大学院生のための教育実践講座（第9回）

2013年8月5日（月）10:00～18:30に、京都大学百周年時計台記念館2階の国際交流ホール、および、会議室を利用して実施された。参加者数は、Basicコース55名、Advancedコース18名の計73名が参加し、参加院生には、総長の修了証が授与されている。詳しくは、II-3.を参照されたい。

◇文学研究科プレFDプロジェクト

文学研究科において、オーバードクター（OD）を対象とした、リレー講義、公開授業・検討会が行われている。本年度も、昨年度に引き続き、哲学基礎文化学系ゼミナール（木曜2限）、基礎現代文化学系ゼミナール（木曜5限）、行動・環境文化学系ゼミナール（木曜5限）で、前期、後期に行われている。リレー講義担当講師は相互に参観し、自分の授業実施も含めて、上記ゼミナールの公開授業および20分程度の授業検討会に8回以上参加すること、および、2014年2月20日（木）13:00～18:30に行われる事後研修会に参加することを前提として、総長の修了証が授与される。詳しくは、II-2.を参照されたい。

◇工学部教育シンポジウム

工学部教育シンポジウムが2013年12月6日（金）16:30～20:00、京都大学桂キャンパスの桂ホールにて行われた。飯吉透高等教育研究開発推進センター教授より「メディアやテクノロジーを利用した大学教育の最新動向」、土井真一国際高等教育院副院長より「国際高等教育院における教養共通教育の改善に向けた検討状況」の話題提供のあと、「教育改善に向けて私の授業-アンケート結果を受けて-」と題して、建築学科、情報学科、工業化学科より授業紹介があった。さらに、「地球工学科国際コースにおける学部教育の現状と課題」が紹介された後、新工学教育プログラム実施専門委員会委員長の西山峰広教授の総括、質疑応答があった。

◇『京都大学のFD2013』の発刊

京都大学のFD活動の情報共有のため、また、アカウントビリティを示す資料の一つとして、ニューズレター『京大のFD2013』を発刊する方向で、準備を進めているところである。

③ 委員会全体の活動

◇新任教員教育セミナー

第4回目となる新任教員教育セミナーが、2013年9月10日13:00～18:30、百周年時計台記念館2階で、ミニ講義、「私の授業（鎌田浩毅人間・環境学研究科教授）」の紹介、グループ討論などのプログラムが実施された。新任教員の参加は89名。詳しくは、II-4.を参照されたい。

◇FD研究検討委員会「勉強会」

本年度のFD研究検討委員会の勉強会（通算第9回）は、「学生の自主的な学習を促す取組」というテーマで、2013年11月25日（月）14:00～16:00、総合図書館3階のライブラリーホールにて実施された。本勉強会では、勉強会に際して、FD研究検討委員会委員を対象とした「学生の自主的な学習を促す取組」に関するアンケートの結果について宮川恒委員長より説明があり、続いて、「学習支援サービスPandAの活用について（喜多一国際高等教育院副院長）」、「学生の自主的な学習をサポートするツールについて（酒井博之高等教育研究開発推進センター准教授）」より、話題提供があった。その後、出席委員によるディスカッションが行われた。

（大塚雄作）

II-2. 文学研究科プレFDプロジェクト

1. 文学研究科プレFDプロジェクトの概要

1-1. 京都大学のプレFD

プレFDとは、これから大学教員（ファカルティ）になろうとする大学院生やOD（オーバードクター）・ポストクのための職能開発の活動を指す。「プレFD」という用語は和製英語であり、アメリカでは、Preparing Future Faculty (PFF) と呼ばれている。2008年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」において「教育研究上の目的に応じて、大学院における大学教員養成機能（プレFD）の強化を図る」とされたこともあり、近年では研究大学を中心に多くの大学がプレFDを実施するようになってきた。京都大学は、「大学院生のための教育実践講座」（II-3参照）をはじめ、いち早くプレFDに取り組んできた大学の一つである。

1-2. 5年を終えた文学研究科プレFDプロジェクト

本プロジェクトの流れは、3年目の2011年度に事前研修会が加わって以降、大きな変化はない(図1参照)。当初からその中心となっているのは、公開授業と検討会である。具体的には、本プロジェクトにおいて実施される授業はすべて公開授業とされ、毎回の授業終了後20分程度の授業検討会を行う。一人の講師は2回から5回の授業を行う。また、他の講師の授業を参観、検討会に参加する。全ての授業が終了した段階で研修会を行い、自分自身の教育活動を振り返る。

2回以上の授業の担当、他の講師の授業の参観を行った上での検討会への参加、そして総括の研修会への参加をもって、京都大学総長による修了証が授与される。

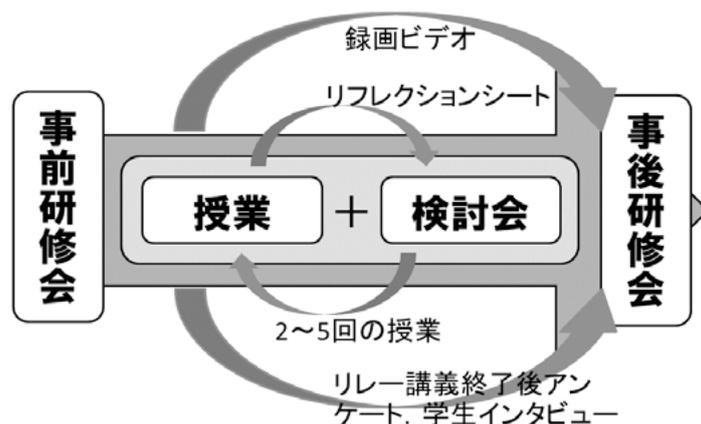


図1. 文学研究科プレFDプロジェクトの流れ

これまでの参加者は、延べ143名である(表1参照)。本プロジェクトは、文学研究科主導で進められており、教務補佐員はすべて文学研究科出身のODである。また、コーディネーターとして関わる文学研究科の教員数も、プロジェクト継続に伴い、増えている。一方で、文学研

究科には、6つの系があるが、本プロジェクトに参加しているのは、哲学基礎文化学系、現代文化学系、行動文化学系の3つであり、それ以上には増えていない。

表1 文学研究科プレFD参加者数

	2009年度 (前期・後期)		2010年度 (前期・後期)		2011年度 (前期・後期)		2012年度 (前期・後期)		2013年度 (前期・後期)	
	講師	哲学基礎文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	25	哲学基礎文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ	15	哲学基礎文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ	9	哲学基礎文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ	10	哲学基礎文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ
基礎現代文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ		6	基礎現代文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ	10	基礎現代文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ	9	基礎現代文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ	11	基礎現代文化学系 ゼミナールⅠ・Ⅱ	10
			行動・環境文化学 系ゼミナールⅠ・Ⅱ	11	行動・環境文化学 系ゼミナールⅡ	7	行動・環境文化学 系ゼミナールⅠ・Ⅱ	6	行動・環境文化学 系ゼミナールⅡ	6
教務補佐員	1		4		3		3		3	
文学研究科教員	2		6		5		5		6	

1-3. 2013年度文学研究科プレFDプロジェクトスケジュール

1-3-1. 前期スケジュール

文学研究科プレFDプロジェクト事前研修会

2013年4月4日 京都大学文学部新館

<プログラム>

第1部 プロジェクトの全体像をつかむ

- ・ 挨拶 (文学研究科准教授 伊勢田哲治)
- ・ プロジェクトの概要説明 (文学研究科教授 福谷茂、高等教育研究開発推進センター准教授 田口真奈)
- ・ 昨年度の授業の様子 (高等教育研究開発推進センター特定助教 田中一孝)
- ・ 先輩の声 (文学研究科教務補佐員 小城拓理・田林千尋・佐金武)

第2部 授業設計について知る

- ・ 授業のデザインと振り返りーワークシートの活用ー (高等教育研究開発推進センター教授 松下佳代)

第3部 コースを考える

- ・ グループミーティング

哲学基礎文化系ゼミナール

2013年4月11日～7月25日 毎週木曜日2時限 10:30～12:00

検討会 12:00～12:20

<授業テーマ>

赤嶺 宏介 「入門」と「オリエンテーション」：カントによる哲学案内
 山田 貴裕 意味論的実在論論争
 君嶋 泰明 ハイデガー哲学入門ーその初期の歩みから「存在と時間」まで
 太田 裕信 京都学派と哲学
 前期のまとめ

基礎現代文化学系ゼミナール

2013年4月11日～7月25日 毎週木曜日5時限 16:30～18:00

検討会 18:00～18:20

<授業テーマ>

- | | |
|--------|------------------|
| 佐藤 夏樹 | アメリカ社会とヒスパニック |
| 中尾 央 | 科学的総合の歴史と哲学 |
| 大西 勇喜謙 | 科学的実在論論争入門 |
| 吉川 絢子 | 植民地朝鮮における離婚訴訟 |
| 田林 千尋 | 近代日本における歌謡研究について |

1-3-2. 後期スケジュール

行動・環境文化学系ゼミナール

2013年10月3日～2014年1月30日 毎週木曜日5時限 16:30～18:00

検討会 18:00～18:20

<授業テーマ>

- | | |
|-----------|-----------------------------|
| 別役 透 | 動物のナビゲーションに関する比較認知科学 |
| 平松 千尋 | 霊長類における色覚の機能と進化 |
| 北島 義和 | 農村アクセス問題とは何か—私的所有と公共の利益の挟間— |
| 西川 純司 | インフラストラクチャーの社会学—モノからみる社会 |
| 安井 大輔 | 多文化接触領域の食からみるエスニシティ |
| 水野(藤井) 英莉 | 生殖技術とジェンダー |
| 山内 熱人 | メキシコの農村文化とその生活 |

哲学基礎文化系ゼミナール

2013年10月3日～2014年1月23日 毎週木曜日2時限 10:30～12:00

検討会 12:00～12:20

<授業テーマ>

- | | |
|--------|--------------------------------|
| 梅野 宏樹 | 悪いことばかりの世界に神なんかいない……のか? |
| 末永 絵里子 | 考えることを考える—「問題系(プロブレマティック)」とは何か |
| 岩井 謙太郎 | キリスト教思想入門 |
| 上原 潔 | 宗教多元論とキリスト教
後期のまとめ |

基礎現代文化学系ゼミナール

2013年10月3日～2014年1月23日 毎週木曜日5時限 16:30～18:00

検討会 18:00～18:20

<授業テーマ>

- | | |
|-------|-------------------------|
| 富永 望 | 京都市水道百年史 |
| 川崎 陽 | 朝鮮における「皇民化」政策と朝鮮 |
| 坂 堅太 | 戦後日本の「労働」表象について |
| 岡内 一樹 | 現代社会と環境との関係について |
| 藤川 直也 | 存在しない者について語る—マイノリティ主義入門 |

文学研究科プレ FD プロジェクト事後研修会
2013年2月20日(木) 吉田南1号館(予定)

2. 2013年度の文学研究科プレ FD プロジェクトを振り返って

2-1. 文学研究科のコーディネーターから

先述したように、本プロジェクトでは、文学研究科の教員がコーディネーターとして各系が開講する授業の統括を行っている。以下は、2013年度のコーディネーターによる振り返りである。

総括コーディネーターから

昨年に引き続き今年も総括コーディネーターを務めさせていただいた。とはいえ、昨年同様、私自身がしたことはほとんどない。各系のコーディネーターの皆さんと優秀な教務補佐員たちが運営の実質を担い、私はもっぱら勤務表の管理だけをさせていただいていた。今年度は年度途中でその教務補佐員の一人が都合により降板することになったが、これについても急遽経験者に交代していただくことができ、大きな問題は生じなかった。関係する皆さんのご協力に感謝したい。

プレ FD も5年を経て、過去の参加者の就職の話聞くことも多くなった。「プレ FD の経験が就職後役に立った」「面接の際にプレ FD について聞かれた」「教務補佐員をやっていたことが就職の決め手になった」など、このプロジェクトに参加したことがプラスに働いたという声を聞くたびに、いろいろ苦勞がありつつもこのプロジェクトを続けてきてよかったと思う。本プロジェクトは4年目までは本部からの援助を得て開催されてきたが、今年度からは援助が打ち切れ、文学研究科の内部の資金だけでやりくりしている。文学研究科自体の予算も削減される中でも今後もなんとか続けられるよう、このプロジェクトの意義について内外に広く訴えていければと思う。

(文学研究科准教授 伊勢田 哲治)

各系のコーディネーターから

今年度のプレ FD プロジェクトは後期の行動・環境文化学系ゼミナールIIで実施しました。出席する学生は毎回40名以上で、それは最後の1月になってもほとんど減りませんでした。質問も少なからずあり、5限であるにも関わらずほぼ全員覚醒していることなどから、各回の講義が学生の興味を十分引き付けていることを、講義室の後ろでいつも実感していました。プロジェクトの講師は5名(各2回)でしたが、そうでない講師の何人かも検討会を希望しましたので、ほぼ毎回、講義後に検討会を開きました。そこでよくわかったことは、講師の皆さんがしっかり準備して講義に臨んでいること、そして講義内容と進め方について真摯に考えていることでした。当初は、生真面目な講師の皆さんが堅苦しく考えすぎることによって、どの講義も同じような構成と進め方になってしまうのではないかと懸念も持っていました。しかしそれは全く当たらず、講義はどれもきわめて個性的でした。そのことも学生の興味を引きつけた理由の一つかもしれません。講義の質とは、単なる経験年数の関数として向上するものではなく、ひとえに講師の姿勢と個性に依存するものであるという、これまた当然といえば当然のことを、若い講師の皆さんから教えられた半年間でした。

(文学研究科教授 櫻井 芳雄)

小・中学校・高校の教員が授業をするためには大学でさまざまな訓練がなされているのに対して、大学の授業をするための訓練はこれまでほとんどなされてこなかった。大学院を出たばかりのODはずっとそのことに不安を感じていたように思う。実際初めて教壇に立った彼らから、授業の仕方について相談を受けたことがある。このプレFDプロジェクトは、そのような不安を取り除き、授業をするための技法を身につけるよい機会であった。今回参加したODから、口々に参加してよかったという感想を聞いている。初めてコーディネーターとして参加した私自身、長年大学の授業を担当してきたにも拘らず、時間の割り振りや黒板の使い方などをほとんど意識してこなかったことに気づかされたばかりか、授業準備にかけるODたちの情熱に強く触発された。授業後の検討会も、正反対の感想が出たりして、忌憚のない意見を交わすよい機会になっている。講師たちとコーディネーターにとって、このプレFDがたいへん有意義であることは間違いなからう。他方、受講した学生たちにとってのこのプロジェクトの意義は、若い講師たちの学問への情熱を受け取ることであろう。学生たちの掛け値なしの本音を聞いてみたい気がする。

(文学研究科教授 氣多 雅子)

大学教員という職に就いていると、学会等で発表や講演を聴く機会はありますが、他の人の通常の授業を見学することはまずありません。ましてや自分の専門外分野の授業を見学する機会を見いだすことは不可能に近いのではないのでしょうか。また若い人に授業を見学させて頼んでもきつと嫌がられるでしょう。系ゼミのコーディネーターの仕事でもある授業見学は、専門外分野に関する最新の研究状況を聞くというとても稀な機会でもあります。そういう点では、コーディネーターというのは以外とおいしい仕事なのかもしれません。

このようなことを書いたのは、文学部で系ゼミが始まって数年が経ち、これからの方向性を考えなければならない時期に来ていると思いますが、実際に系ゼミを見学したことのある教員の数はまだ限られているのではないだろうかと思ったからです。また近年多くの大学で教員募集の際には模擬授業が課される状況になっていることを考慮しますと、研究業績だけでなく、教育経験についても、どのように大学院生、そして若手研究者をケアしていくべきなのかということについて我々教員も考えなければならないのではないのでしょうか。

(文学研究科教授 伊藤 和行)

2-2. プロジェクト参加者の声

2-2-1. プロジェクト全体に対する満足度

本プロジェクトでは、毎年、プロジェクトの事後アンケートを実施している。本年度もアンケートを実施予定であるが、現時点で事後研修会未実施のため、ここでは昨年度のアンケート結果を示したい。2012年度は3つの系から、12名の回答を得た。アンケートの内容は、資料1に示したように、本プロジェクトの3つの柱である「リレー講義を担当すること」「リレー講義後の検討会に参加すること」「事後研修会に参加すること」のそれぞれの満足度を5点満点で示し、その理由を問うものである。アンケートからは、いずれも平均4点以上と高い満足度であることがうかがえる(表2)。

表2 2012年度文学研究科プレFDプロジェクト事後アンケートの結果

設問	平均
“リレー講義を担当したこと”に対する満足度	4.8
“リレー講義後の検討会に参加したこと”に対する満足度	4.7
“事後研修会”全般に対する満足度	4.3

「リレー講義を担当したこと」に対する満足度5の理由としては、たとえば「1. 職歴になった。2. 参観者の方々からのアドバイスが自分の授業改善のために大変に役に立った。3. リフレクションシートという方法が授業構成法にとって有効であることを学んだ。4. FD研修に参加していた、ということがひよっとしたら就職にプラスに働いたのかもしれない。」といった回答に集約されるであろう。

「リレー講義後の検討会に参加したこと」に対する満足度5の理由としては、「検討会は、それが誰の講義かに拘わらず非常に実りの多いものだった。悩みの共有と解決に向けた議論がベテランの教育者であるコーディネーターの先生や同年代の担当者でできたのが良かった。」「それぞれの講師の発言から、彼らがどのような問題意識を持っているのかが分かった。それは今後私も悩むことになるであろう問題であるように思う。必ずしも明確な解決策がなくとも、どのような問題があるのかをあらかじめ理解し、それに対するいくつかの、それぞれは完璧とは言えない方策のリストを知ることで今後の講師生活に対して余裕をもって臨むことができると思う。また自身の講義について検討してもらったことも、自分の講義スタイルを客観的に捉えるよい機会となった。」「センターからこられた方の目線や、同世代の先生からのユーザー目線の意見など、様々な視点からの意見がもたらされたのがよかった。また、普段あまり交流のない他の専門の人と触れ合えたのが良かった。」といったような回答が得られた。

以下は、質問4.「プレFDプロジェクト全体に対するあなたの意見・感想を教えてください。」という設問への回答を列挙したものである。高い満足度の理由が垣間見える。

京大の教壇に立つという非常に貴重な経験を通じ、自らの講義について振り返る機会を与えてくださったプレFDプロジェクトに、心から感謝しています。ありがとうございました。

大学教育に求められるものが、自分が受けてきた教育と大きく異なることに戸惑うのが今のOD世代だと思う。こうしてワークショップのような形で教育へ踏み出す一歩目を導いてもらえるのは有り難いし、同世代の別の系の人と知り合えるのも新鮮で刺激的だった。ずっと続けていってもらいたい。

プレFDへの参加は2年目となりましたが、今年度も、授業・検討会・事後研修会すべてが勉強になりました。成長できたかどうかは甚だ疑問であり、申し訳ない限りですが。

昨年度のアンケートでは、マンネリ化しているのではというようなことを書いたと思いますが、センター主導で新しい試みを導入され、FD研究としても多くの成果を生んでいるように思います。その末端にいたることができたのは有難いことだと思います。お金が減るとのことでしたが、新しい試みを続けているプロジェクトですし、本も出るということですから、一時的なことだと思います。完全に他人事な物言いで申し訳ありませんが、本当に大切なプロジェクトだと思いますので、続いてほしいと思っています。

「基礎ゼミナール」という授業の学生にとっての位置づけや、参加者人数、レベル等の情報を講師に前もって提示したほうがよいと思われる。また、各講師が授業の企画をするに先立って、少なくとも何か統一テーマを設定しておいたほうが全体としての一貫性が増すだろう。

これまで研究に集中してきたDやODにとっては、大学教員としてどう授業に臨むべきかを考える機会があることは、いきなり非常勤講師として教育に望む場合と比べると、とても貴重で大事だと思う。

検討会の試みは大変興味深く、みな、楽しんでやっている印象だった。これは哲学系に特有の現象かもしれないが、教師として批判にさらされる経験の必要性が実感された。

貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。今後に活かせるように努めたいと思います。

3年間参加させて頂きました。このような試みは教育実習のない博士を出た人間にとってはとても有意義なものでした。本当にありがとうございました。

まずリレー講義形式で3回の講義を担当させていただけるということがありがたかった。又検討会も大変有益で、教育者としてどうあるべきかを考えるきっかけになったと思う。

学生以外の方から授業に関する評価を聞くことができる貴重な場なので、今後も続けていってほしい。

授業改善や情報交換の場として非常に貴重な機会だと思います。また参加されている先生方やスタッフの方々が真剣に取り組まれていることが成功の秘訣だと感じています。ありがとうございました。

素晴らしい経験をさせていただき、有難かった。

2-2-2. 事後研修会に対する満足度

事後研修会については、プログラムの内容を細分化してそれぞれに対して評価を求めた。事後研修会そのものについては、先述したように満足度は4.3点と高く、自由記述からもおおむね満足いくものであったことがうかがえる。一方で、個別のプログラムを子細にみていくと、その得点（表3）や自由記述から改訂の余地があることがわかる。

表3 2012年度文学研究科プレFDプロジェクト事後研修会に対する満足度の結果

設問	平均
「ワークシートの作成と振り返り」に対する満足度	3.8
「哲学基礎文化学系の新しい試みの紹介」に対する満足度	4.1
「ミニ講義・ミニミニ講義による情報・知識の提供」に対する満足度	4.3
「グループ・全体ディスカッション」に対する満足度	4.3

3-1. “事後研修会”全般に対する満足度

評定値	記述内容
5	非常によく考えて構成されているなど感じた。
5	全体として、よく練られた構成の研修会で、参加して大変勉強になりました。不満があるとすれば、会場がやや寒かったことくらいでしょうか。
5	盛りだくさんの内容で、高等教育推進センターの先生方のご発表は教育の専門家としてのマクロ的な視点が勉強になったし、実際に講義を担当した後での担当者どうしのディスカッションは刺激があった。
5	授業に関して普段考えていることを話し合うことができ勉強になった。
5	思想系だけでなく、幅広い先生方の意見を聞くことができた。
4	同じ講師の方たちと意見を交換する機会を得ることができた。
4	担当したりレー講義を振り返ることができ、反省できました。 グループワークが有効活用できればよいと思います。
4	総括として、いろいろと勉強になった。ただ、企画の数が多すぎて質問・議論の時間があまりなかったのが残念だった。

4	研修会の議論は全般的に「言うは易し、行うは難し」の印象。 ある程度の経験が必要なため、時間をかけて個々人が改善していくしかない。改善にむけてのモチベーションとしては有益だった。
4	異なった系の講師が集まり議論し、交流する場は有益だと感じた。 またプレFDという試み自体に反省を加える機会としても参加してよかったと思う。 だが、哲学系以外の講師が少なかった点は残念。
4	ディスカッションでは他の講師の忌憚りの無い意見を聞くことができた。
3	研修会というよりも、参加者同士で感想を言い合うような会であり、特に何かが成長したというような実感はなかったため。なお、研修会後の懇親会では、多くの方々と交流することができたので大変有意義だった。

3-2.事後研修会「ワークシートの作成と振り返り」に対する満足度

評定値	記述内容
5	授業デザインについて、これまで気にしていなかった部分などがあつたことも分かり、参考になった。
4	このような機会でもない限り、自分の講義を逐一振り返ることはなく、苦痛を伴いながらも多くの反省の機会を得ることができたため。
4	ワークシートをもとに講義を振り返るのは良いが、ワークシートを作成する段階で戸惑うことが多かったため、事前研修で作成方法のもう少し詳しい解説が必要かと思う。
4	ワークの中でいろいろと考えることができました。もう少しみなさんのワークシートから学べることを共有できる時間が欲しいところですが、半日の研修会では難しいですね。
4	おおむね満足している。ただ、先述したが時間が少なすぎた。
4	研修のためには必要なことだが、ワークシートの作成と振り返りが少々きつかった。
4	ワークシートを作って振り返り作業を行った以上、事後研修会でそこに触れる時間を設けること自体は理にかなっていると思うものの、やや形式的で、改善の余地があるのではないかと感じた。
4	時間に捉われず、話したいことを話し続け、時間が来たら「また来週」というスタイルの講義の良さもあるはずである。これについて問題提起をしたかったが、初心者ゆえはばかられた。
3	ワークシートの機能を、講師陣がうまく使いこなせていない、あるいは使いこなす必要がないと考えていると感じられた。
3	自分が担当した授業のビデオを見る機会がなかったため、思い出しながらワークシートを作成したのが残念でした。
3	ワークシートの活用法については初めから想定していた通りのものであり、それを活用することに重大な意義があると、改めて気づかされる、ということにはならなかった。
3	短時間で書かせる意味がよくわからなかった。

3-3.事後研修会「哲学基礎文化学系の新しい試みの紹介」に対する満足度

評定値	記述内容
5	毎回MLで流れてくる講義レポートにある「コンセプトマップ」が何なのかずっと気になっていたのですが、どのようなものか分かって良かった。学生の主体的な思考活動が促される面白い試みだと思った。
5	活動報告とともに、その利点や限界、今後の課題などが簡潔にまとめられていて興味深かった。
5	コンセプトマップの作成など、新しい授業方法については、なかなか個人的に知識を得る機会が少ないため、とても貴重だった。
5	コンセプトマップの意義と有効性を簡潔に説明されていた。このツールは今後私の授業の中に取り入れていきたい。
5	コンセプトマップという新しい試みに参加でき、面白かったです。リレー講義ではテーマがバラバラになってしまいがちなので、導入するとよいと思いました。
4	田中さん、田林さんがしっかりまとめて下さって、私も振り返ることができました。他の系ゼミナールの先生方やお越しいただいた方にどれだけ伝わったのかな、と思うところはあります。短い時間でしたし、「こういう学習効果が得られました」というようなわかりやすい結果が出るものでもありませんので仕方ありませんが。
4	前期では参加人数が少なかった。後期の事例を教えてもらったことは良かった。また、コンセプトマップを評価に使用するという論点も新鮮であった。ただし、コンセプトマップを使用していない他の系の講師にとっては十分その意義が伝わらなかったかもしれない。
4	今後自分の授業でも実践したい。
4	コンセプトマップの試みはその背景となる理論を講義してもらっていたため、納得できた。
4	(無回答)
2	唐突に紹介が始まった印象で、事前知識がない私としては戸惑いの方が大きかったため。
2	コンセプトマップについての話題と、そもそも総括授業を設けることの成果とが明瞭に区別されていなかったように思う。何が特にコンセプトマップという方法の成果であったのか、コンセプトマップによっては、それ以外の方法ではできないような何ができるのか、ということについては結局わからなかった。質問の時間もなかったのはこの項目では特に残念であった。

3-4.事後研修会「ミニ講義・ミニミニ講義による情報・知識の提供」に対する満足度

評定値	記述内容
5	盛りだくさんの内容で、高等教育推進センターの先生方のご発表は教育の専門家としてのマクロ的な視点が勉強になったし、実際に講義を担当した後での担当者どうしのディスカッションは刺激があった。
5	各先生方の講義が大変参考になりました。松下先生の講義、昨年とは別の角度からの講義で今年も勉強になりました。田口先生のミニミニ講義は、使える情報が盛りだくさんだったのですが、グループディスカッションでそのまま頂いてしまったのがちょっと申し訳なかったです。
5	他の先生方の授業内容を反省的に考察することは、なかなかない経験だったため、とても役に立った。
5	学生のモチベーションを高めるのにも色々な方法・観点があることを学んだ。
5	その後の議論のよいキッカケになり、工夫されているなど感じた。

4	海外の大学との比較について、多くの知識を吸収することができたため。
4	ミニ講義・ミニミニ講義とも大変に勉強になった。
4	ミニ講義勉強になりました。大学教育の動向に合わせて大学教員の公募で求められるポイントなどもアドバイスいただけたとうれしいです。 ミニミニ講義は貴重な体験談を話していただき勉強になりました。グループワークの最初にあると作業しやすかったかもしれないと思いました。
4	とりわけ、ミニミニ講義で先輩の事例を紹介してもらったことがよかった。
4	(無回答)
4	「言うは易し、行うは難し」の印象。 ある程度の経験が必要のため、時間をかけて個々人が改善していくしかない。改善にむけてのモチベーションとしては有益だった。
3	講義の内容が、講師たちのおこなった授業の具体的な経験を参照するものであってほしい。

3-5.事後研修会「グループ・全体ディスカッション」に対する満足度

評定値	記述内容
5	盛りだくさんの内容で、高等教育推進センターの先生方のご発表は教育の専門家としてのマクロ的な視点が勉強になったし、実際に講義を担当した後での担当者どうしのディスカッションは刺激があった。
5	(無回答)
5	どのレベルの学生に合わせるか、やる気のない学生をどう巻き込むか、など私自身が非常勤をするときに悩んでいる問題が議論され、勉強になりました。グループ間での関連付けがあってもよかったかと思えます。その分もっと時間があるとうれしかったです。
5	参加者それぞれの意見が話し合われ、最後には統一的な結論に至ったことが問題点を共有するという意味で意義があった。
4	他の参加者と悩みや問題意識を共有することができたため。
4	すでにいくつか他大学で授業をもたれている方々の体験談や問題解決法が聞けたのは貴重な体験だった。
4	講師たちの個人的な経験に根ざす意見が聞かれされたのが、刺激的だった。
4	議論する場があったということが、とにかくよかったと思う。ただし、少し時間が足りなかったかもしれない。
4	(無回答)
4	制約と外野が多すぎる気がする。教室の広さなども含めて、もう少しレス・オフィシャルにすれば、もっとワイワイガヤガヤと意見交換ができたのではないかと思う。
4	実践あるのみと思う。
3	ちょっとグループの空気に任せて受け身になってしまったところがありました。もう少し多角的な議論ができたようにも思います。

3. 終わりに

文学研究科プレFDプロジェクトは2009年度に開始され、本年度で5年目を終える。これまでの歩みは、昨年度に刊行された書籍(田口ほか,2013)をはじめ、いくつかの刊行物とし

て報告がなされている。未来の大学教員を育てる試みであるプレ FD は、全国的な広がりを見せ、特に、本プロジェクトを参考として東京大学でも開始されたことは新聞に取り上げられるなど、話題となった。

京都大学では、プレ FD を正課のカリキュラムに位置づけるべきだとの考えから、京都大学研究科横断型教育プログラムに、センター教員が兼任している教育学研究科から、「大学で教えるということ」という授業を提供している。

他大学に先駆けて充実したプログラムが展開されてきた文学研究科プレ FD プロジェクトは、その修了者を早くから輩出してきたともいえる。本プロジェクトの効果あるいは限界について、調査すべき時期にきているだろう。

引用文献

田口真奈・出口康夫・高等教育研究開発推進センター（2013）『未来の大学教員を育てる一京大文学部・プレ FD の挑戦』勁草書房

（田口 真奈、田中 一孝、松下 佳代）

質問 3.

3-1-1. “事後研修会”全般に対する満足度は全般的にどのようなものですか。
当てはまるものを残して他の選択肢を消してください。

- 5.非常に満足している
- 4.まあまあ満足している
- 3.どちらともいえない
- 2.あまり満足していない
- 1.まったく満足していない

3-1-2.その理由を以下に自由にお書きください。

3-2-1.事後研修会「ワークシートの作成と振り返り」に対する満足度はどのようなものですか。

当てはまるものを残して他の選択肢を消してください。

- 5.非常に満足している
- 4.まあまあ満足している
- 3.どちらともいえない
- 2.あまり満足していない
- 1.まったく満足していない

3-2-2.その理由を以下に自由にお書きください。

3-3-1.事後研修会「哲学基礎文化学系の新しい試みの紹介」に対する満足度はどのようなものですか。

当てはまるものを残して他の選択肢を消してください。

- 5.非常に満足している
- 4.まあまあ満足している
- 3.どちらともいえない
- 2.あまり満足していない

1.まったく満足していない

3-3-2.その理由を以下に自由にお書きください。

3-4-1.事後研修会「ミニ講義・ミニミニ講義による情報・知識の提供」に対する満足度はどのようなものですか。

当てはまるものを残して他の選択肢を消してください。

5.非常に満足している

4.まあまあ満足している

3.どちらともいえない

2.あまり満足していない

1.まったく満足していない

3-4-2.その理由を以下に自由にお書きください。

3-5-1.事後研修会「グループ・全体ディスカッション」に対する満足度はどのようなものですか。

当てはまるものを残して他の選択肢を消してください。

5.非常に満足している

4.まあまあ満足している

3.どちらともいえない

2.あまり満足していない

1.まったく満足していない

3-5-2.その理由を以下に自由にお書きください。

質問 4.

プレ FD プロジェクト全体に対するあなたの意見・感想を教えてください。

質問は以上です。ご回答ありがとうございました。

2012年度 文学研究科プレFD事後研修会プログラム

日時：平成25年2月14日(木) 13時30分

集合場所：吉田南1号館 106

開始時間		場 所
13:15	受 付 (学 務 部)	
13:30	開会式	106
	開会の挨拶：高等教育研究開発推進センター長 教授 大塚雄作 司 会：高等教育研究開発推進センター 特定助教 田川千尋	
13:35	セッション1. 自己紹介	106
	参加者の自己紹介と公開講座を担当しての感想	
13:55	セッション2. ビデオ視聴	106
	講義ビデオの視聴	
14:10	セッション3. 講義の振り返り	106
	ワークシートを用いた講義の振り返り 高等教育研究開発推進センター 准教授 田口真奈	
14:35	セッション4. 哲学基礎文化学系の新しい試み	106
	コンセプトマップ導入に関する事例報告 文学研究科 教務補佐員 田中一孝 文学研究科 教務補佐員 田林千尋	
14:50	セッション5. ミニ講義	106
	「大学授業をどう創るか」 高等教育研究開発推進センター 教授 松下佳代	
15:15	休 憩 ・ 移 動	
15:30	セッション6. グループディスカッション	106・201・205
	グループディスカッション(30分) テーマ1：「学生の多様性にどのように対応するのか」 テーマ2：「学生をどう授業に巻き込むのか」 テーマ3：「学びを促す授業デザイン」 ミニミニ講義(5分) テーマ1： 文学研究科 教務補佐員 小城拓理 テーマ2：高等教育研究開発推進センター 准教授 田口真奈 テーマ3：高等教育研究開発推進センター 特定研究員 坂本尚志 グループのまとめ(20分)	
16:25	セッション7. 全体ディスカッション & まとめ	106
	全体ディスカッション&まとめ 司 会：高等教育研究開発推進センター 准教授 田口真奈	
17:00	閉会式	106
	閉会の挨拶：文学研究科長 教授 服部良久 修了証授与：FD研究検討委員会委員長 教授 宮川 恒	
17:15	情報交換会	201

II-3. 大学院生のための教育実践講座

—大学でどう教えるか—

1. はじめに

「大学院生のための教育実践講座」は、大学教員を目指す京都大学の学内者を対象にした講座である。「大学院生のための」と銘打たれてはいるが、大学院生の他にも、ポスドク、研究員、オーバードクターなどの参加も多数ある。大学院生は、将来、研究者としてだけではなく、授業を担当することも求められており、まずは教員として授業を担当するための自覚を促し、現在の大学教育における課題を共有することがこの講座の1つの大きな目的である。

平成17年度に第1回が実施されて以来、毎年、年に一度の頻度で開催され、今年度で9度目の実施となる。平成18年度までは、高等教育研究開発推進センターが企画、運営していたが、平成19年度よりFD研究検討委員会の主催となり、今年度も本センターは企画、運営の補助を行った。

日本では、2008年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」において「教育研究上の目的に応じて、大学院における大学教員養成機能（プレFD）の強化を図る」とされたことも手伝って、この数年、プレFDを実施する大学が増えてきた。代表的なところでは、京大の他に、名古屋大学、広島大学、東北大学、北海道大学、一橋大学、筑波大学、東京大学などがある。本学においても、文学部のオーバードクター（OD）によるリレー講義をはじめとして、大学院生やODを対象としたプレFD活動が年々充実してきている（<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/about/>）。本講座はそうした本学のプレFD活動の中で、最も長い歴史をもつものである。

2. 企画の目的と実施の背景

本講座では過去の受講生の要望を受け、平成20年度より「Basic」と「Advanced」の2つのコースを開講している。今年度も、基本的なコースの枠組みは昨年度のプログラムを踏襲し、そのうえで昨年度の反省を踏まえながら、参加者の要望を汲み取りつつディスカッションを中心とした内容をより充実させることを意識した。

Basicコースは、将来、大学で教職につくことを希望する大学院生を対象とし、Advancedコースは、昨年度までに本講座を受講した経験のある大学院生、あるいは非常勤講師などで大学において授業担当経験のある者を対象としている。そこで、Basicコースでは、担当教員によるミニ講義で現在の大学教育がおかれた状況や課題を学び、グループ・ディスカッションなどを通して、自分自身がこれまでに大学の授業を受けてきた経験を振り返りつつ、「大学で教えるということ」がどのような課題を抱えているのかを考える機会を設けた。

Advancedコースでは、具体的に大学の授業を構成する際に生じる課題を共有するために、2名の参加者による模擬公開授業を実施し、それについてディスカッションをする場を設けた。数年前より、Advancedコースではミニ講義をなくして、ディスカッションをメインに据え、参加者相互のインタラクションによって理解を深める時間を多く確保しており、今年度もそのプログラムを踏襲した。また、ディスカッションをより充実させるために、参加者への事前ア

ンケートにおいて関心のあるテーマや自分の取り組みについてまとめておくことを依頼し、議論をスムーズに導入することに活用した。上述の通り、参加者からの要望を受けて、平成20年度より設置された Advanced コースの内容は、参加者と本センターのスタッフが継続的にコミュニケーションをとることによって年を追うごとに改善を見ている。

3. 実施概要

3-1. 実施概要

本講座は、2013年8月5日（月）10時から18時30分まで、京都大学百周年時計台記念館2階において開催された。Basic コースと Advanced コースは平行して行われ、ミニ講義や模擬公開授業、グループ・ディスカッションなどのために、国際交流ホールII・III および小・中会議室を使用した。本講座は事前申込者のみを受け付けており、参加者は、当日に、受付で2千円（ランチ、情報交換会代を含む）を参加費として納めた。当日のプログラムに関連する資料として、本稿末にプログラム内容・講義資料（資料1）、広報チラシ（資料2）、事前アンケート（資料3）、事後アンケート（資料4, 5）を掲載している。

3-2. 参加者数とグループ構成

今回実施された本講座への参加者数は、Basic コース51名、Advanced コース17名の計68名であった。参加者の所属研究科および階層（修士課程・博士課程・ODやPDを含む研究員など）ごとに、その内訳の詳細を表1に示す。

昨年度の参加者数（48人）に比べ、今年度は大幅に参加者が増加した。これは人間・環境学研究科の参加者の増加が全体の参加者数を押し上げたことに起因する（5名→24名）。本講座を知ったきっかけとして、指導教員やその他の教員、友人の誘いなどが多数挙げられており、こうしたいわゆる口コミが広がったことがこの背景にあると考えられる（表2）。一昨年度より研究科を横断するように参加者の所属部局は広がりを見せており、本年度はさらにその傾向が見られた（昨年度12部局→19部局）。また、今年度のBasic コース参加者は、修士課程と博士課程の大学院生がほぼ半数ずつとなっており、幅広い学年に見られたことが特徴である（ただしBasic コース修了を前提としたAdvanced コースの参加者は全て博士課程やOD・PD等である）。参考までに、昨年度は修士課程の大学院生のBasic コース参加者は全体の約11%であった。また本講座は将来に大学教員になることを目指す大学院生・OD・PDなどを主として対象としているが、本年度は図書館職員の参加が4名あった

本講座では、上記の通り、大学院生同士のディスカッションの場を設けている。理系と文系を意図的に混合することで、分野をこえて討議・交流をできるようなグループ構成を行った。さらに、修士課程と博士課程など、参加者の学年もバランスがとれるように配慮し、Basic コースでは3つのグループを編成した。Advanced コースについては、事前にグループ編成を行わず、当日、テーマに沿って希望者を集めるかたちでグループをつくり、ディスカッションを行った。ディスカッションの際には、各グループにセンターの教員が1名ずつファシリテーターとして入り、議論の進行に関するコーディネートをを行った。

表 1. 各コースの参加者の内訳

研究科・部局	Basic				Advanced			
	人数	内訳			人数	内訳		
		修士課程	博士課程	OD・PD・研究員・ 研究生・その他		修士課程	博士課程	OD・PD・研究員・ 研究生・その他
経済学研究科	6		6					
文学研究科	1		1		2		2	
教育学研究科	6	6			1		1	
人間・環境学研究科	18	5	12	1	6		4	2
工学研究科	1		1					
医学研究科	2		2					
農学研究科	4	1	3					
理学研究科	4	4						
情報学研究科	1		1					
生命科学研究科	1	1			1		1	
アジア・アフリカ地域研究研究科	1	1			1		1	
地球環境学舎	1		1					
経営管理大学院	2	2						
iCeMS	1			1				
生態学研究センター	1			1	1			1
白眉センター					1			1
宇宙総合学研ユニット					1		1	
総合生存学館	1	1						
付属図書館								
計	51	21	27	3	17	0	7	10

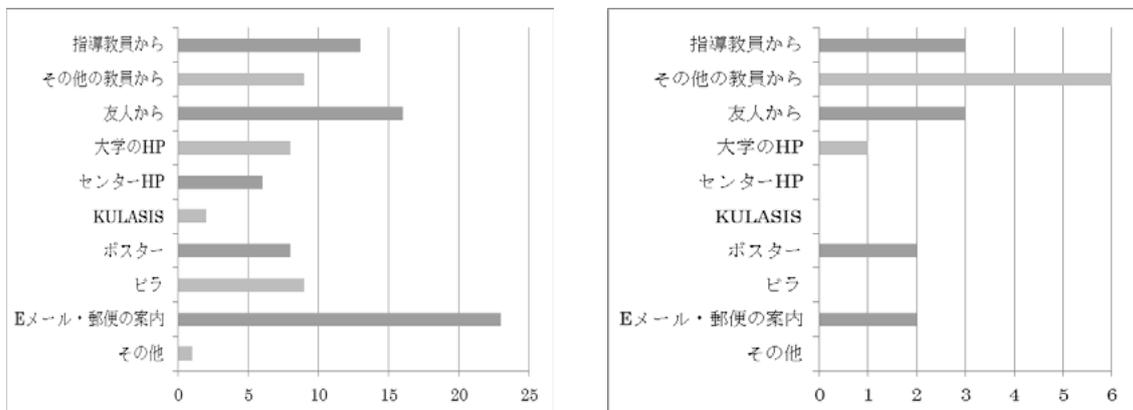
4. 事前アンケートの結果

本講座を実施するにあたり、あらかじめ参加希望者に事前アンケートを電子メールで送付し、回答を依頼した（資料2）。これは、参加を希望する学生がどのような経緯で本講座を知り、どのような動機や期待を抱いているのかといった点を把握すること、およびグループに分かれてディスカッションを行う際のグループ分けの判断材料とすることを目的として行った。質問事項は、基本的に過去の回と共通する内容とした。

4-1. 本講座を知ったきっかけ

まず、どのようにして本講座を知ったのかを調べるために、「この講座のことをどのようにして知りましたか？（あてはまるものの番号をすべて○で囲んで下さい）」という質問を行い、表2にある10項目を選択肢として設けた。表2に示した通り、Basicコースにおいては指導教員と友人からの誘い、Eメール・郵便による案内が、Advancedコースにおいては、その他の教員から誘いが多かった。

表 2. 講座を知ったきっかけ（複数回答可） [左：Basicコース、右：Advancedコース]



4-2. 大学での教育経験と教員への志望の度合い

次に、大学での教育経験と教員への志望の度合いを調べるため、問2で「大学での教育経験があるか?」、問3で「大学教員にどの程度なりたいか?」という質問を行った。

問2の「大学での教育経験があるか?」については、Basicコースでは、「なし」が28名、「TA」が22名、「非常勤講師」が4名であった。Advancedコースでは、「なし」が6名、「TA」が6名、「非常勤講師」が7名であった(表3)。以上のように、Basicコース参加者は、教育経験がない者が全体の半分を占め、また教育経験のある者のほとんどがTAであった。Advancedコース参加者は、3割以上の参加者に教育経験が無いが、これは図書館職員が4名いたことによる。

問3の「大学教員にどの程度なりたいか?」(5件法、「1:まったく希望していない」から「5:非常に希望している」)については(表4)、Basicコースでは、「非常に希望している」「やや希望している」と回答した者が約8割であった。Advancedコースでは、図書館職員を除いた全員が「非常に希望している」「やや希望している」「どちらとも言えない」のいずれかを回答した。Basicコース、Advancedコースともに大学教員になりたいと考える参加者が多いことが分かる。

表3. 大学での教育経験(複数回答可) [左: Basicコース、右: Advancedコース]

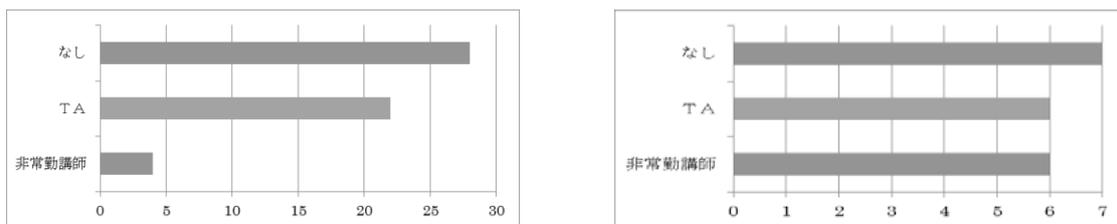
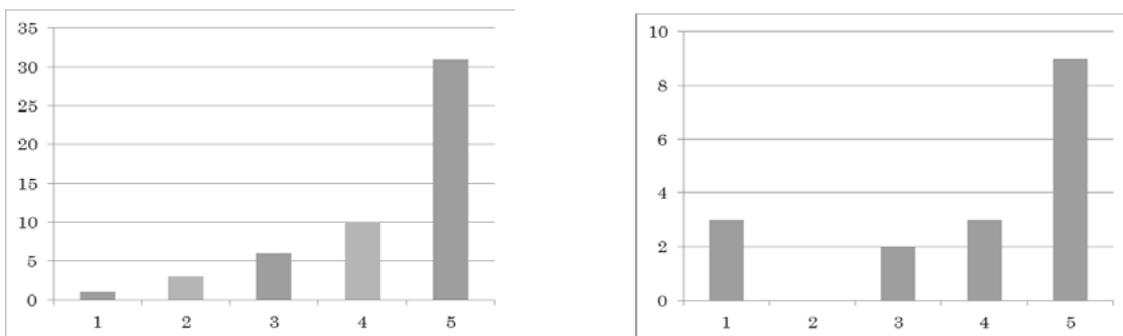


表4. 大学教員になることを希望するか [左: Basicコース、右: Advancedコース]



4-3. 本講座の受講動機

問4では、本講座の受講動機を8つの質問によって尋ねた。以前は自由記述によって受講動機を尋ねていたが、3年前からは、それまでの自由記述を元にした質問項目によって尋ねることとした。全ての質問は「1. 全くあてはまらない」～「5. 非常に当てはまる」の5件法で尋ねられた。表5に質問項目と、各コースの質問に対する平均値を示す。

表5. 各コースの受講動機の平均値

質問項目	Basic コース 平均値	Advanced コース 平均値
大学での教育活動に関心があるから	4.51	4.41
大学で教えるための知識・技術を身につけたいから	4.31	4.24
大学教育について考える機会が欲しかったから	4.43	4.00
実際に教育に関わる中で悩んだり困ったりしたことがあるから	3.00	3.24
他の大学院生が大学教育についてどのような考えをもっているか知りたいから	3.63	3.24
他の大学院生と、大学教育について意見交換したかったから	3.52	3.12
他の大学院生と人間関係をつくりたかったから	3.55	2.53
今後自分が大学教員として就職する際に有利になると思ったから	3.37	2.65

両コースともに、「大学での教育活動に関心があるから」「大学で教えるための知識・技術を身につけたいから」「大学教育について考える機会が欲しかったから」の3項目の得点が比較的高い結果となった。一方、「今後自分が大学教員として就職する際に有利になると思ったから」という項目に対する評定は比較的低く、参加者は個人の関心に基づいた参加ではあるものの、それが自分のキャリアと直接結びつくとは考えていないという傾向があることがうかがえる。今後は、本講座の受講者が得た成果や、就職に役立ったという報告、本講座の発行する修了証の効果について、さらに認知度を高めていく必要があるものと考えられる。

4-4. Advanced コース準備のための質問

問5以降は、Advanced コースでのみ尋ねた。問5は、模擬公開授業・検討会で授業者となり、模擬授業を行うことは可能であるかを尋ねた。「行うことは可能」は0名、「条件によっては可能」は3名、「行うことは不可能」は14名であった。「条件によっては可能」という回答が得られた受講生から、教育学研究科より1名、白眉センターより1名を選出し、模擬授業を担当してもらった。

4-5. 大学以外での教育経験、大学教育への問題意識

問6では、教員免許取得の有無を尋ねた（複数回答可）。「小学校」1名、「中学校」7名、「高等学校」9名、「その他」0名、「なし」8名と、教員免許を持つ者が半数程度であった。

問7では、初等・中等教育での指導経験の有無を尋ねた（複数回答可）。「小学校であり」2名、「中学校であり」1名、「高等学校であり」4名、「なし」11名と、経験を持たない人が多かった。

問8では、塾・家庭教師などでの指導経験の有無を尋ねた。「あり」が14名、「なし」が3名と、経験者が相対的に多かった。

問9では、学部生時代に受けた授業への満足度を尋ねた。「1. まったく満足していない」から「5. 非常に満足している」までの5段階で評定を行った。その結果、「5. 非常に満足している」が1名、「4. まあまあ満足している」が6名、「3. どちらともいえない」が6名、「2. あまり満足していない」が4名、「1. まったく満足していない」が0名という結果で、満足度の平均は3.2であった。

問10では、「あなたが考える大学教育における問題点」について、自由記述による回答を求めた。その結果を表6に示す。授業の形式や内容、学生側の意識の問題、社会のニーズと大学のあり方などさまざまな問題点が挙げられた。

表 6. 大学教育における問題点

記述内容
ディスカッションの機会が少ない気がします。
大学教育は教師主体の伝えるだけの授業が多く、さらに半年に1回だけ単位を得るための試験に合格すれば終了とする授業も多い。私はこれらの授業が本当に授業料に見合ったものなのか甚だ疑問である。現在の大学教育の方針は、大学だけでなく教師や学生の考えを反映して作られているため、学生は自分が受けている授業の在り方についてもっと関心を持つべきである。
一方向的授業、思考を必要としない授業。
①大学での教育は教師から一方方向に知識を与えるのではなく、話し合いや調査等を通して、自分たちで問題を解決するプロセスを重視するものだと思う。そしてそのような教育を行うためには、少人数の授業で、各自が考えなければならない環境を作ることが望ましいが、そのような環境が人員面でも施設面でも整っていないのではないかと。②教員の仕事は研究と教育だといわれているが、業績評価については研究内容に重きが置かれていると思う。従来通り研究を業績評価の中心にするのであれば教育を補助するためのシステムを、また、教育を従来以上に業績評価に加えるのであれば教育を評価するシステムを今以上に確立する必要があると考える。
学生によって、学力や学習意欲の差が激しい。授業評価（アンケート）の行い方。上記と関連して、学生が授業を商品かサービスのように見なしている点が気になっています。
大学教育の一番の問題点は、受講者のモチベーションが低いことである。中学、高校の時のように「受験」という目的がないため、大学教育は単位さえ取ればそれでよい、という感覚をもちやすい。モチベーションが低い受講生に対して、専門性の高い知識を教えるのもすぐに忘れ去られてしまう。授業内容を分かりやすくすれば良いというのではなく、いかに面白いかを inspire することに意義があると感じる。
①業務内容に学生の指導が含まれない身分にもかかわらず研究室の学生の指導に関与せざるを得なくなっているため、学生数に対して必要な指導要員を考えた研究室の体制作りが必要だと思う。
教育サービスとしての側面ばかりが重視され、教員の個性や学問の自由さが活かされづらい状況にあるのではないかと思います。雇用も不安定だし…。
社会の大学に対するニーズ、大学側から「到達目標」として学生に提示する学習項目(単位取得要件)、学生側の要望が大きく異なる。特に、近年においては社会からの大学に対する要求が大きくなってきている点が、アカデミズムにおける伝統、教育カリキュラムに少なからず影響を与えており、緩やかな崩壊を招いているという懸念。そもそも、学生に「勉強」に充てるための時間がない。アルバイト、サークル等の学生生活に没頭しつつ、3年次から始まる就職活動戦線に向けての準備を行っていく必要があり、勉強を行う時間がない。
特に学部生について、研究テーマについての情報を収集する能力が低く、その情報の価値判断ができないにもかかわらず、本人はその自覚に乏しく、能力の獲得・向上に取り組む意識が低い学生が多いこと。
1.ゼミ以外の授業のディスカッション形式の授業で、なかなか議論を煮詰めることができない。その原因としては、①テーマそのものについての知識不足、②議論の方法がわからない(たとえば、意見を表明しようと思ったら、流れが変わってしまい発言の機会を失ってしまうなど)、③日本人はシャイである、などをあげられると考える。①、③は個人の資質によるところが大きい。②は改善できるのではないかと考えるが、ではいったいどのようにしたらよいのか。2.単位の都合上、興味・関心がない分野の教養科目を履修することがある。生徒により異なるモチベーションに、どのように対処したらよいのだろうか。3.非常勤をしている友人の話によると、「レポート試験を課すと、明らかに盗用とわかるレポートがある。出典を書くように指導しているのだが・・・」とのことである。一部の生徒だけかもしれないが、大学生と盗用・剽窃の問題を改善するにはどのようにしたらよいだろうか。
京都大学のような大規模な大学では、多種多様な授業が行われている。膨大な数の授業の中から、学生がその才能を伸ばしたり、興味を育てていけるような授業と出会えるような仕組み(ガイダンスや広報等)を考えていく必要があると思う。
あらかじめ決まった方法ではなく、自分で考えて課題の解決を図るような教育がさらに必要になると思います。
大学教育では求められている問題点として、高校以前の段階で求められる知と、大学や社会で求められる知の性質が異なるからである。高校までの学びは、大学入試に大きな影響を受けており、その結果、学生は、受動的に授業を聞き、「XはYである」という形の命題を暗記することが中心となっている。ところが、実際の社会で求められるのは、命題知を基礎にした実践知・活用知である。したがって、命題知を社会の中で実際に活用できる知へと変容させていくことが、大学教育では求められている。「高校時代の受動的な学習態度から能動的で自律的・自立的な学習態度への転換」を図るには、初年次教育、共通教育等においても、学生が何を学びたいか、何を身につけていくかを測定しながら、学習成果の向上に結びつけていくことが必要。
学生が大学教育に何を求めているのかが分かりにくい。どのような知識や能力を身につけることを期待して講義を受けているのか?とりわけ、哲学のような教養科目の場合。私自身は京都大学で教育を受けたので、大学の教育とは研究者になるため知識と能力を身につけること、あるいは大学での研究の疑似体験をすることであると考えていた。だが多くの学生は研究とは無関係の進路を選ぶので、彼らにとって望ましい大学教育とは何か、悩むことがある。
あらかじめ決まった方法ではなく、自分で考えて課題の解決を図るような教育がさらに必要になると思います。
大学教育では求められている問題点として、高校以前の段階で求められる知と、大学や社会で求められる知の性質が異なるからである。高校までの学びは、大学入試に大きな影響を受けており、その結果、学生は、受動的に授業を聞き、「XはYである」という形の命題を暗記することが中心となっている。ところが、実際の社会で求められるのは、命題知を基礎にした実践知・活用知である。したがって、命題知を社会の中で実際に活用できる知へと変容させていくことが、大学教育では求められている。「高校時代の受動的な学習態度から能動的で自律的・自立的な学習態度への転換」を図るには、初年次教育、共通教育等においても、学生が何を学びたいか、何を身につけていくかを測定しながら、学習成果の向上に結びつけていくことが必要。
学生が大学教育に何を求めているのかが分かりにくい。どのような知識や能力を身につけることを期待して講義を受けているのか?とりわけ、哲学のような教養科目の場合。私自身は京都大学で教育を受けたので、大学の教育とは研究者になるため知識と能力を身につけること、あるいは大学での研究の疑似体験をすることであると考えていた。だが多くの学生は研究とは無関係の進路を選ぶので、彼らにとって望ましい大学教育とは何か、悩むことがある。

学生が大学教育に何を求めているのかが分かりにくい。どのような知識や能力を身につけることを期待して講義を受けているのか？とりわけ、哲学のような教養科目の場合。私自身は京都大学で教育を受けたので、大学の教育とは研究者になるため知識と能力を身につけること、あるいは大学での研究の疑似体験をすることであると考えていた。だが多くの学生は研究とは無関係の進路を選ぶので、彼らにとって望ましい大学教育とは何か、悩むことがある。

問 11 では、「研修会当日に議論したいテーマ」について自由記述で回答を求めた。その結果を表 7 に示す。講義を行う技術上の問題から、アウトリーチ活動、大学教育や大学教員そのもののあり方を考えるようなテーマまで、幅広い記述が得られた。

表 7. 研修会当日に議論したいテーマ

記述内容
①授業で取り扱う資料をどのように用意するのか。②学生を授業で取り上げられた議論に有効的に参加させる授業の進み方
ディスカッション形式の授業をするうえで、ディスカッションを促す方法。
大学教育はなぜ存在し、何を求められているのか？偏差値が高い大学では本当に高度な授業を展開しているのか？
動機づけをどうするか
この度は事務職員として参加させていただきますので、こちらからテーマを出すのではなく、院生の方が希望されるテーマで議論に参加させていただきたいと思います。
授業はどこまで分かりやすくあるべきか。授業評価やコミュニケーションペーパーの活用法。学生とのコミュニケーション方法について。私語や途中退室についての注意。
私はアウトリーチ活動として、理系大学院生の研究を高校生に伝えるサイエンスコラムの発行と、高校における座談会の斡旋をしています。科学好きな人だけでなく、広く一般に研究内容を伝える（コラム紙を手にとって拾い読みしてもらうにはどのようなデザイン・文章が良いか、高校における座談会では研究を話すよりも進路相談を希望されるなど、伝えたいことと要求される事のバランスが難しい）にはどうしたらよいか、をずっと考えています。大学教育に直接関係していないことかもしれませんが、ご容赦ください。
①理解力や得手不得手など、ひとりひとり性質の異なる学生の集団を指導する際に、起こりやすい問題はなにか、また、何に気を付けるべきか。②質問を受け付けても発言が出ない授業において、学生に発言してもらうにはどうすればいいか。
今後、大学教員を目指すうえで、こういった「講座」を受けることが必要になってくるとすれば、それはどういうことを意味するのか？
大学生の勉強について。大学に対する、社会の要請に対してどのようなカリキュラムを提示していくべきか。
学習・研究を行うにあたって基礎となる能力の習得について、どうすれば学生自身がその必要性を理解し、意欲的に取り組むようになるか。
1.「教養」と「専門」をどのようにつなげていくことができるか。2.キャブ制について。3.教員・学生の社会への発信能力をいかに鍛えるか。
大学教育に大学職員はどのような形で関わるることができるか？どのような可能性があるか？（大学院生が主体の本講座には不適切なテーマかと思いますが、職員として気になる問題です）
望ましい大学教育の在り方について。
①大学という場を理解する。②人としての守るべき規範を理解させる。③大学の中に人間関係を構築する。④レポートの書き方、文献探索方法など、大学で学ぶためのスタディスキルやアカデミックスキルを獲得させる。⑤クリティカルシンキング・コミュニケーション力など大学で学ぶための思考方法。⑥高校時代の受動的な学習態度から能動的で自律的・自立的な学習態度への転換を促す取り組み。
他の先生方がどのような問題を感じておられるのか伺いたいです。

5. 事後アンケートの結果

本講座の当日、すべてのプログラムが終了した時点で、事後アンケートを実施した（資料 4）。参加満足度や各プログラムに対する有意義度および改善すべき点について、評定と自由記述をもとに構成した。質問事項は、基本的に昨年度とほぼ同様にものとした。当日参加者のうち全員から回答が得られた（Basic コース 51 名、Advanced コース 17 名）。

5-1. 本講座の全体的な満足度

本講座の全体的な満足度について、「本講座の参加満足度は全般的にどのようなものですか」という質問に対し、「1. まったく満足していない」から「5. 非常に満足している」までの 5 段

階で評定を行った。Basic コースは平均 4.57 点(グループ討論：4.70、ミニ講義：4.45、ボディ・ワーク：4.02)、Advanced コースは平均 4.35 点(模擬授業・検討会：4.41、グループ討論：4.70)となり、全体的には、本講座に対する高い満足度がうかがえる。ボディ・ワークについては、昨年度(3.78)に比べ改善が見られた。これは昨年度のアンケートを踏まえ、今年度からセッションの時間を 100 分から 80 分に短縮した点によるかと思われる。

5-2. 本講座の満足度の理由(自由記述)

本講座に対する満足度の理由に関する自由記述を以下に資料として挙げる(表 8、表 9)。

表 8. 満足度の評定とその理由(Basic コース)

評定値	記述内容
5	よく勉強になりました。いろんな学生と交流して、それぞれの意見を聞いて、参考として、自己の将来に使えるかもしれませぬ。
5	目指すべき大学の授業をイメージできたのは、意義があったが、具体的にどうすれば理想的な授業ができるのか、については不明なまま終わってしまったので。
5	日頃関心がありながら、なかなか研究室内では学び、議論出来ない、如何に授業を担当するのか、という問題について、一日考え、学ぶ機会を頂けたことは、極めて有意義な経験でした。
5	グループ討論に参加しましたが、語学的な問題であまり積極的に参加しませんでした。あまり勉強しなかったと思います。でも全体的としては色々なものを身につけて、かつて知らなかった点にも理解してきました。それこそこの実践の価値だと思います。
5	ディスカッションで考えを上げることができました。積極的な議論からパワーをいただきました。他領域の方々と学問を考えることができました。そのことで専門性を見つめることもできました。
5	違っている立場からの方々の話を聞いて、非常に勉強になりました。考えさせられました。
5	①グループディスカッションで、普段は出会えない、他学部の方々と知りあうことができた。②吉沢先生の大学の就職活動や、大学での授業についての体験ベースのお話はとても興味深かった。
5	①自分の思考の限界や不足点に気づき、補足・修正できた。②自分の発言やその他本日関わった行動の中で見直すべきところと注意すべきところが自覚できた。
5	普段なかなか考えることのない大学での教える行為について考えることはとても貴重な経験だと思います。また、学問領域が異なる大学院生と交流することができたのはとても有意義だった。
5	ディスカッションの繰り返しや、その発表を通じて、今まであまり考えたことがなかった問題について、自分なりの整理ができ(かけ)た。
5	大学教育について、他の人がどのように考えているのかを知ることができた。彼らと討論することによって、自分の考えを整理し再確認することができた。
5	大学院では研究が主な活動となっており、教育に関して考える機会はほとんどない。現在はTAとして学生に教えたり、質問に答えたりしているが、スキルやノウハウには自信がない。そのため、このような教育に関してプロの考えを聞いたり、同じことを意識している学生と交流する機会はとても有用でした。
5	他の参加者の意見を聞いたことが良かった。私は、会社員をしていた時に、よく研修やプレゼンテーションをさせてもらったので、教育についてほとんど純粋なサービス業の認識が強い。学生さんは、理想が高いので、参考にしたいと思いました。ただ、自分のスタンスとしては、覚めたおっさん以外はとれないと思います。
5	グループ討論を通して、自分の思いつかないような考え方、視点を知ることができた。自分の考えを話し、他の人の意見を聞くことで、問題が明確化し、また、その対策もわかりやすくなった。教育について、これほど真剣に考えたのは初めてだった。
5	ディスカッションの時間がたっぷりあり、当初の予想をはるかに上回る実りある議論ができました。また、全体討論の時間が設けられていたことで、より深い議論ができ、自分自身が色々考える良い機会にもなりました。ミニ講義も自分になかった考え方を得るのはもちろん、その後の討論にもつながりました。
5	他分野の人の話や、色々な経歴・考え方の人の意見が聞けたこと。大学教育を考える上で、もう一度色々考えなおす機会になったこと。
5	大学教育に関して、初めて深く考え、その意見を発表し、仲間と討論できた事は、大変貴重であったから。また body work、lecture も大変充実していた。研究室にはわからない、他分野の学生との意見交換も有意義でした。
5	大学教員になるための心構えを一段と強く持てるようになったと思います。
5	グループ討論・全体討論の途中では、議論の前提がなかなかみ合っていない印象が強く、非常にロマン主義的な結論に落とし込まれるのではないかと危惧していましたが、結果としては意見・視点の多様性を見ることができたとし、それらを通して、自分なりに考えていくための基盤を得られたと思います。
5	講義内容、議論内容が刺激的だった。スタッフの方や参加者の意欲が高く、視点も様々で鋭かったのも、良い緊張感のある作業ができた。

5	今まで周りに大学教員を目指している人がいなかったから。
5	他研究科の学生と活発な議論の場となって、とても有意義な時間だった。
5	大学教員を将来の職業として視野に入れた、様々な分野の院生の話が聞いて興味深かった。また普段の研究ではディスカッションをすることがめったにないため、ディスカッションの進み方を自ら参加しながら観察することができた。意見の異なる人との意見の合わせ方について勉強になった。
5	色々な意見を聞けたり、活発に議論できた。その議論を通じて、自分の考えがどう見られるのかも感じられた。オープンソースが出てきて、大学とは今後どうあるべきかを考えるのは意義あることだと思う。
5	いろいろなことを学べて、とても有意義な時間をすごすことができました。全く知らないことも、ですし、他の方々の視点も面白かったです。ありがとうございます。今、悩んでいる問題にも関わりがあり、勉強になりました。できれば、ミニ講義がもう少し少なくなければ、体力的に楽だったかもしれません。でも、とても満足できた一日でした。
5	短い時間の中で現在の大学教育のおかれた状況や大学教員に求められるものについて、具体的に考えることができた。
5	大学の授業について同じように考えている人と意見をシェアできてよかった。将来、教員になった時の問題点が明確になった。ただ、こうした講座によって大学教育が文科省のいいなりにいって行くのでは、という危機感も少なからずあります。教育の多様性・自由が保証されるような講座であり続けてほしいです。(窓に向かって授業している先生の話しでも、ちゃんと聞こえたりすれば面白いと感じる時もあります。)
5	他の院生と知り合うことができ、さらにいろんな意見や見方を知ることができて良かったと思います。みなさん院生さんは非常に優秀で、考え方が深い！と思うことが多かった。ポディワークは普段あまりすることがなかったもので、他の人と触れ合うことで、コミュニケーションの認識に役立ったと思います。メーリングリストを作ってほしいです。
5	よい授業や教員の資質について考えられた。グループの方とディスカッションしたり、自分達の考え及ばなかった点を他のグループから得られ、知識を整理したり、視野が広がった。他学部の方と交流できた・ポディワークは私の専門で学生が患者さんの距離感を学ぶ上でとても使えと思った。
5	様々な人々と沢山議論ができたため、短時間ではあったが、様々な観点から大学教育を見つめることができた。非常に濃密な時間を過ごすことができたため。
5	社会人経験者・他分野(特に、普段かかわりの少ない文系分野)と同じ土俵で議論することで、広い視野の意見を聞くことができた。また、最終討論において、非常に短い時間で意見をまとめ、発表する難しさを体験し、どうすれば良かったのか、考えさせられた。他グループの良し悪しも非常に参考になった。
5	思っていたよりも、本格的な内容で、考えを深めることができたから。
5	グループ討論と講義の繰り返しではあったが、相補の関係となっていて充実した。参加者も意識が高く、それぞれの背景を使って議論できたと思う。
5	大学の教育に関して、しっかりとした意識を持っていらっしゃる方が多く、議論が面白かったです。ただ、最後には議論、まとめがあまりにかけ足になって概念的、一般的になりすぎてしまって、理想論までで、実際の困難な点まで至らなかった(参加された方が授業に対して真面目なためと思う)のが残念でした。
4	様々な研究科の院生と意見交換が出来て非常に有意義でした。今回は、大学で教えるというテーマでしたが、国際化が進んでいく中で、教員の英語力というものが必要になると考えられるのですが、そうした問題も踏まえて議論できればと思います。
4	常とは異なる研究科の方とコミュニケーションを図ることで、教育に対する異なる視点・方法論、また共通する問題・悩みや解決策が見出せたため。
4	普段思いつかない視点から大学教育について考えることができたから。特に、学生あるいは他者との付き合い方・距離感に関する考察は興味深かった。
4	全体的に内容とプログラムの組み方は非常に良くて、大変勉強になりました。ただし、時間的には、やはり一日だけでは短く、討論・コミュニケーションを十分に行えなかった気がします。何回かの討論で課題の表に触れることができていたが、もうちょっと深めていって、「良い大学の授業」、「良い授業のやり方」に対して体験できれば嬉しいです。
4	しんどい(笑)。院生となると個性が強い人のために、一部のシャイな人の意見が埋もれてしまい、グループとしての意見=少数の意見になってしまうシーンがあった。ポディワーク、もう少し面白くできないのか??
4	大学での教育についての考えは深めることができたが、基本的な認識としてそもそも社会の中で大学教育の意義が問われている中で、なぜ大学での教育が大切なのか、社会的な責任は何なのかをもっと話し合いたかった。ニーズにあわせるという意見など出てきましたが、ニーズ(個人のニーズよりも社会的なニーズ)をどう考えるのかの認識をもっと深めたかったです。
4	ハンガリーとアメリカでの状況を聞けたのでおもしろかった
4	参加者の方々が、大学の教育やあり方、今後の方向性についてどのように考えているか知ることができて刺激的だったので。しかし、ディスカッションは慣れていない(方法を身につけていない)ので、(ディスカッションの質が)良かったのかはわからない。
4	そもそも、大学教員を目指す上で、「教育」に対して考え、討論する機会が今までなかったのも、その機会が得られたこと自体が自分にとってプラスになった。また、討論で出た意見に関しても、自分とは異なる視点から見たものが多く、さらに考える機会を得られた。
4	自分がこれから教えていきたいと思っている精神分析学問についてあらためて考える良い機会になったと思います。ありがとうございました。

4	「大学教育とは何か」について今まで深く考える機会がなかったのですが、講義やディスカッションを通じて、多くのことを考える機会となったためです。
3	役に立ちそうな情報が少なかったです。ほかの生徒との議論がとてもよかった。
3	教育学者など、本日掲げられている問題に対する識者の意見をうかがいたかった。ただし、現場の方々の意見は非常に面白かった。
3	普段交流のない他学科の学生や先生方の意見を聞いてよい機会だったが、全体の論調として、授業のおもしろさやわかりやすさ、サービス面が重要視され過ぎている感じだったので、もう少し、研究機関としての大学の独自性や目指すべき点、改善点という観点も必要に思ったため。しかし、こうした機会は貴重だと思います。

表 9. 満足度の評定とその理由 (Advanced コース)

評定値	記述内容
5	色々なバック・グラウンドの人達と意見が交換できたから。
5	いろいろな事例をきけて、教育していく上で、ヒントになった。悩む点が似ているなあーと感じて、面白かった。
5	自分が当初にもっていた問題意識（高校や専門学校とは異なる、大学での授業とは？その+αの部分をしっかりとかみとりたい）がある程度、解決の方へと向かったから。
5	講座自体は良かったが、最後の淡路先生の話に違和感ありすぎでした。あとファシリテーターの先生2人もが高等教育のご専門であったので、ちょっと議論が偏ってしまった気がする（先生はとっても良い方で感謝しています。たぶん…。違ったら本当すみません）。人教的にはちょうどよく、有意義な議論ができて楽しかったです。ありがとうございました。
5	今回のプログラムで、今まで悩んでいた問題点や疑問点を解決する道すじが立った。スタッフの方々の進行もとても良く、長時間ではあったが短く感じられた。今後授業を行う上での課題も考えられた。
5	他の参加者の意見を聞くことができ、また大学教育における工夫の具体案を学ぶことができたから。担当教員の知識が豊富で、またインタラクションが上手で、教員と学生のインタラクションのあり方を考えることができたから。
5	演習補助と行う上で役立つ知識を得られただけでなく、大学教育について考える良い機会となったから。ありがとうございました。
5	諸先生方が何に悩んでおられるのかが分かった。センター側から、広い視野での情報が議論のなかで、適切に提供されたのもよかった。
5	模擬授業のフィードバックがすばらしくて、ありがたかったです。グループワークもたのしかったです。どうもありがとうございました。
5	現在の教育問題を考える良い機会でした。
5	授業における具体的な方法論（クリッカー、コミュニケーションペーパー、コースデザインなど）を学べて勉強になりました。教師が講義で伝えたいことと、生徒の意識に溝がある点に関して、多くの議論が出来たことが良かったです。
4	学生側、教員側、それぞれの立場から貴重なコメントを得ることができたため。教員としての立場から、教育に携わっている先生方にコメント、教員としての先輩として助言頂くことができたのが勉強になった。
4	私は事務職員であるため、本講座の対象としている教員志望の者ではないが、授業外学習を支援すべき図書館で働く者として、教員志望の方がどのようなことを考え、不安に思っていることを知ることができた点で満足している。
4	討論した内容はとても勉強になり、自分でも他の方の意見に触発されて面白い意見ができたと思うが、自分の直接の問題意識について議題の中心にならず、消化不良の面があった。
4	経験者のお話しもうかがってとてもよかったと思います。
4	普段の授業の中で考えていた疑問点を掘り下げて考えることができた。他の参加者の教育実践例を聞き、今後の自分の経験に生かせる点を多く獲得できた。
3	自分のレベルでは難しかったが、いろいろなことを学べた

5-3. 今後の改善に向けて

来年度の改善を検討するために、「今後に向けて改善した方がいいと思われる点がありましたら、自由にお書き下さい」という質問のもと、自由記述による回答を求めた。その結果を表10、表11に示した。

Basic コースでは、グループ討論の時間やプログラムの構成や時間配分に関する記述が多くみられた。特に、グループ討論については時間を長くしてほしいという声が多く、参加者が議論をより深めたいと考えていることがうかがえた。休憩時間を求める声も多かった

Advanced コースでは、模擬授業・公開検討会に関わることやプログラム構成、議論の進め方など様々な回答が得られた。また、「授業経験者のみが参加できるようなコース」「教育歴で

ある程度分ける」といった教育段階別の研修に関わる要望も出ていた点が、今年度の特徴として挙げられる。

表 10. Basic コースの今後の改善点に関する自由記述

記述内容
グループディスカッションがさして有益とは思えなかったので、今後もこの形式を継続するのであれば、人数や時間配分、テーマ等を工夫する必要があると思う。告知の仕方を改善された方がよいと思う（もっと広く）。
休憩時間を増やしていただければ有難いです。
他大学の授業内容や教員志望の院生との交流がもっとできれば良いのではないかな。
BASIC、ADVANCE ともに参加者に対しては今後も大学関係のメールを送る（もうやったらすみません）→すみません、下の方でありそうですね（笑）。研究科により予め班分けをし、それも班替えも（セッション毎に）した方が、もっと異分野の人と交流できるし、多くの意見を聞けると思う。
（1）グループの中でも小グループのメンバーをもっと変えているんな視点を聞きたかった。（2）普段は聞けない教育学の話等はとても興味深く、自分がこれから学んで行く上で参考になるものが多かった。（3）「つながる」の中でも、日本の中ではあまり話されないパワーダイナミクスに話など、もっと話をもっと深められればよかったなと思いました。
感想になるが、学生を生徒と呼ぶ場合がディスカッション等であって少し違和感があった。
研究科別に、参加者に偏りがあると感じました。告知をもっとした方が、参加者にとっても良いと思いました。
スケジュールがタイトなので、もう少し時間に余裕があるといいなと思いました。また、講義では、この研修を受けて非常勤や専任になった方のお話なども聞きたいと思いました。
大学教員ではない人達の授業の理想像について現場の大学教員はどう思われるのか（リアリティーのない話なのか）。本音を語ってほしい。
経験のある先生からもっと具体的なアドバイスがあったらいいと思います。
討論の時間が少ないと感じた。しかし、時間をどのように割くかというのも、面白さとの兼ね合いの中で考えねばならないので、時間の編成や、二日に分けるなどの工夫をしていく必要があると思います。
1.時間を長くすること 2.「良い大学授業をするにはどうすれば良いのか」ということに対してディスカッションはしましたが、参加者にもっとはっきり伝わるために、ある程度見習うことのできる見本があれば（ビデオ etc.）良いのではないかと思います。
トイレ休憩をもう少し増やした方がよい。
教育専門家からの講義がちよっと少ないと思いますが・・・
もっと議論したかったです。2日間でもいいぐらいだと感じました。来年も参加したいですが、次、Advanced というのは、大学での授業経験がないので少し足踏みしてしまいます。
①特にないですが、グループ討論のところで時間が足りなかったと感じました。②それぞれの専門で、どういうふうに授業をやっているか、を参加者に紹介させるセッションがあったら、もっといいなあと思いました。
特にありません。非常に満足しています。
改善点というより希望。大学教員になるための就職活動についての話をもっとあるといい。参加者の大きな関心事であると思う。
グループ討論のメンバーをその度変えてほしい。（合性の合う合わないでディスカッションの output における差が大きい）
グループ討論 3 回目は同じ部屋に 3 グループあり、騒がしかったため議論しにくかった。また、ボディーワークは時間が長すぎたように感じる。
若手の教員の方など、大学院生や PD だけでなく、実際に教員をされて間もない方と意見交換できる機会もあるとよい（今日、一日のプログラムの中にはなく、問 6（2）のような場をもつ場合）
要望として、アカハラやセクハラに関する講義の導入があります。改善案は、ミニ講義のあとに質問時間（休憩）を設けることです。疑問がありましたが、休憩時間すらなかったので、聞くことができませんでした。
もう一日あっても良いかな、と思いました。一日で研修をしてしまうと、考える時間が少なくなってしまうように思いました。
1 日のうちに内容が盛りだくさんだったので、いつもより集中できた気がする。短期集中のほうがやりとげた感があるが、討論についてはもう少し時間がほしかった。
非常に取り組みやすい環境でした。
昼食時に、同じグループの他班の方としゃべることができる機会があれば良かったと思いました。
研究に従事する院生が集まっているので、教育的な思考をもっと講義してくれても良かったように思います。実践とはあまり関わりがないのでしょうか？
本プログラムのことを知ったのが、メ切延長後に京大のメールアドレスにきたメールによってだったので、もう少し早く知りたかった。
4~5 人のグループでずっと固まっていたので、もう少し他のグループの人たちと話せる時間もほしかったです。大学でどう教えるかというテーマでしたが、そもそもどうすれば大学教員になれるのかやなるのにどれくらい大変なのかを知りたいので、パンフレットなどあればうれしいです。
議論の時間が一番面白かったが、時間が短すぎて、白熱している所で打ち切りとなるのはとても残念。討論テーマを 1 つにして徹底的に議論したかった。また、スケジュールがタイトすぎる。

もう少しグループ討論の時間が欲しかった。まだまだ意見を聞きたかった。
ボディーワークは、女性同志とかの方がよかったなあ・・・と少し思いました。知り合いと組めると、よかったです。気にしすぎかもしれませんが。
グループ討論整理が少しやりにくかった。全体討論の最後のグループの発表がまとまっていたので救われる気持ちでした。個別のグループ討論（少人数）自体は大変有意義だった。
学生どうしのディスカッションだと、どうしても理想論に偏ってしまう傾向にあると感じたので、教員の先生方もディスカッションに加わる機会があればよいと思いました。
グループ討論のまとめのときに、もう一つ、まとめ用のホワイトボードがあるとうれしいです。終了時刻がもう少し遅くなってほしいので、もう少し休憩時間がこまめに欲しかったです。
授業のスキルについても教えてほしい。
良い議論ができていたが、時間がもっとあったらもっと深めることができたと思う。2日できたら良いかも知れない。
非常にスケジュールがタイトだったので、5分でも休みをはさんで欲しかった。議論する時間がもう少し欲しかった。
ボディーワークについては、得られることが前後との文脈から離れていたため活用の機会が感じられなかった。ボディーワークをして、ある意味クールダウン出来た側面もあるので、たとえば授業の手法として「グループワーク」自体を考えるような、「メタグループワーク」などが出来れば前後の討論にも活きるかと思いました。
ほとんどの参加者が研究者、教員を目指される中、ほとんどの学生は様々な理由で就職する人ばかりで、興味はあるのだけれど、時間的に（就活、バイト、部活）で、授業だけには打ちこめず、ジレンマをかかえている場合もあります。今の学生（1～4回生）の声をとりあげたら、さらに良くなると思います。

表 11. Advanced コースの今後の改善点に関する自由記述

記述内容
よいプログラムだと思います。昨年度に続き、リピーターとして充実した1日を過ごすことができました。魅力的なプログラムであるので、全学において、より広報に力を入れていってもよいのでは、と思いました（もったいない!!）。
自己紹介の時間が少し長いように思います。事前アンケートでもっと受講者が抱えている課題や疑問点を吸い上げていけば、グループ討論のグループ分けも早くできますし、自己紹介の時間も短縮できたように思います。
もっと教員たちのお話を聞ければいいなと思います。
院生同士の（グループ）ディスカッションも有意義でしたが、勤続年数の長い先生方の経験談（授業作りの方法、スタンス etc.）ももっとたくさん聞けると良いと思いました。
Advanced コースでもミニ講義をしてもらいたい。
公開授業について、ルールを明確にした方がいいと思う。かけ足の授業だと、正当な判断がしにくくなるので、短縮するのではなく、切り出して授業して欲しい。
「Advanced」コースに参加させていただきましたが、問題の設定から、検討して、それに対する議論だったので、時間的には足りない感じがした。何か命題が決められているのも悪くないのかもしれませんが。もしくは、複数ある中で選ぶとか？でしょうか…
ファシリテーターの2人のうち1人は、教育の専門じゃない方（あるいは、京大の教員でない方）が、議論はおもしろくなるかも…と思いました。
グループ討論では、テーマによって発言者が偏る面があるので、参加者をいかに議論にまきこんでいくかを考えると、より一層有意義な時間になるのではないだろうか。
グループ討論の後にセンター側からのフォローがもっとあったほうがよかった（過去の議論ではどうだったか・・・など）。参加者の関心によって、議論にかたよがりがあると思うので、それを相対化する視点がほしい。
休けいが、もっとあった方がうれしかったです。スケジュールが少しきつかったところがあると思いました。
今後の講座（教員）のモチベーション。
ADVANCED に図書館職員の方が出席されていて、少し距離を置かれた参加になっている所が気になりました。参加者は全員横ならびであるべきだと思います。

5-4. 来年度の本講座やオンライン / 対面コミュニティへの参加希望

Basic コースの受講生に対して、「来年度、Advanced コースが開講されるならば、参加したいと思いますか」という質問のもとに、「1. まったくそう思わない」から「5. 強くそう思う」までの5段階で評定してもらった。その結果、「5. 強くそう思う」が16名（31.4%）、「4. そう思う」が23名（45.1%）、「3. どちらとも言えない」が9名（17.6%）、「2. あまりそう思わない」2名（3.9%）、「1. まったくそう思わない」は1名（2.0%）で、平均は4.00であった。多くの参加者がAdvanced コースに参加したいと考えていることが示された。

また、来年度の参加案内の送付希望を「希望する」「希望しない」の2択で尋ねたところ、

Basic コースは 46 名 (90.2%)、Advanced コースでは 9 名 (52.9%) が「希望する」と回答した。いずれもおおむね例年通りの結果であった。

最後に、「今後も継続して大学の授業改善について考える次のようなコミュニティがあれば、参加したいと思いませんか」という質問に「はい」「いいえ」の 2 択で回答を求めたところ、「(1) SNS などを利用し、オンライン上で情報・意見交換をするコミュニティ」については Basic コースで 38 名 (75.0%)、Advanced コースでは 5 名 (29.4%) が「はい」と回答していた。「(2) 実際に集まり、対面で情報・意見交換をするコミュニティ」については Basic コースで 46 名 (90.2%)、Advanced コースでは 14 名 (82.4%) が「はい」と回答していた。これまでの本講座の傾向と同様に、対面コミュニティを望む声が多いといえる。本講座の参加者の多くは、一日の研修に留まらない継続的な交流を望んでいることがこの結果から推察される。

6. おわりに

本講座は、将来、大学教育に携わることを希望している京都大学の大学院生、ポストドクター (PD)、研修員のために、ファカルティ (大学教員) へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するものである。9 回目の今年度の受講生からの評価もおおむね例年通り高いものであったと言える。しかしながら一方で、現職の大学教員による講義を生で聴きたいという意見も少なからず残っていることには考慮の余地がある。

冒頭でも述べた通り、本講座は「大学院生のための」と銘打ってはいるが、Advanced コースが創設されて以来、大学院生以外からの参加者も多く、参加者の多様化が著しい。Advanced コースは、大学院生の参加者とそれ以外の参加者 (OD・PD・研究員・非常勤講師など) はおおよそ半々である。今後は、そういった参加者層も含めながら、交流・ネットワークの形成を行い、運営側の適切な道筋づくりが重要になると言える。

(田中 一孝、松下 佳代)

実施プログラム = Basic =

9時45分～	受付
10時00分～	開会式 挨拶 FD研究検討委員会委員長 宮川 恒 趣旨とプログラムの説明 高等教育研究開発推進センター 准教授 酒井 博之
10時20分～	セッション1 グループ討論1：（自己紹介）「大学の授業をどう思うか」
11時20分～	セッション2 ミニ講義1：「大学授業の現在と未来」 高等教育研究開発推進センター 教授 飯吉 透
11時45分～	セッション3 ランチと自由討論
13時00分～	セッション4 グループ討論2：「大学の授業で教師に求められるもの」
14時00分～	セッション5 ボディワーク：「他者とのつながり・自分とのつながり」 京都文教大学 教授 濱野 清志
15時20分～	休憩
15時30分～	セッション6 ミニ講義2：「大学授業の現場から見たプレFD」 大阪体育大学 講師 吉沢 一也
15時55分～	グループ討論整理
16時30分～	セッション7 全体討論：「大学で教えるために」
17時30分～	セッション8 ミニ講義3：「大学で教えるということ」 高等教育研究開発推進センター 教授 大塚 雄作
17時55分～	閉会式 挨拶・修了証授与 京都大学理事 淡路 敏之
閉会式終了後	情報交換会（18時30分まで）

実施プログラム = Advanced =

9時45分～	受 付	
10時00分～	開会式	挨拶 F D研究検討委員会委員長 宮川 恒 趣旨とプログラムの説明 高等教育研究開発推進センター 准教授 酒井 博之
10時20分～	セッション1	全体討論1：（自己紹介）「教える側からみた大学授業」
11時45分～	セッション2	ランチと自由討論
13時00分～	セッション3	模擬公開授業・検討会
		休 憩 （10分）
15時20分～	セッション4	グループ・全体討論
17時55分～	閉会式	挨拶・修了証授与 京都大学理事 淡路 敏之
閉会式終了後		情報交換会（18時30分まで）



3



4



1



2

MIT OpenCourseWare: 2000以上の講義教材・ビデオを公開

The screenshot shows the MIT OpenCourseWare website. At the top, it says 'MIT OpenCourseWare: 2000+ Courses Available for Free'. Below this, there's a navigation menu with 'Home', 'About Us', 'How to Use', 'Contact Us', and 'Help'. The main content area features a 'Welcome to MIT's OpenCourseWare!' message, stating that MIT is proud to share its world-class education with the world. It lists various subjects available, including Mathematics, Physics, Chemistry, and more. There are also sections for 'New Courses' and 'Featured Courses'.

11

OpenCourseWareコンソーシアム

The screenshot shows the OpenCourseWare Consortium website. The header includes the logo 'OPEN COURSEWARE CONSORTIUM' and 'JOCW JAPAN OPEN COURSEWARE'. The navigation menu has 'HOME', 'ABOUT US', 'MEMBERS', 'HOW TO JOIN', 'WORK', 'CONTACT US', 'FAQ', 'FAQs in French', and 'HELP'. The main content area features a 'USE' section with 'Find Course Materials', a 'SHARE' section with 'Share Your University's Courses', a 'SUPPORT' section with 'Support the OCW Movement', and a 'JOIN NOW' button. The background image shows a person working at a computer in a library.

世界各国の100以上の大学・機関が参加し、既に数千もの講義教材が公開されている。

12

ノーベル物理学賞の賞金で作られた
物理学学習用オープン教材

The screenshot shows the PhET website. The header includes 'PhET' and 'Simulations'. The main content area features a 'From This Week's Chronicle' section with a photo of Carl Wieman and a 'NEW FORMULA FOR TEACHING' section. Below these, there are several simulation categories: 'Motion', 'Work, Energy & Power', 'Sound & Waves', 'Heat & Thermodynamics', 'Electricity & Magnetism', 'Light & Radiation', 'Quantum Phenomena', 'Chemistry', and 'Math Tools'. There is also an 'Index' link.

Carl Wieman教授とコロラド大学ボルダー校の仲間によるプロジェクト

9

拡がり続けるオープンコンテンツの世界
既に何万ものオープンな教材が利用可能

The image is a collage of logos for various open content initiatives. In the center, there is a large circle with the text 'オープンコンテンツ' (Open Content). Surrounding it are logos for: NSDL (The National Science Digital Library), universia, OOPS (Open Online Public Service), COR (Creative Commons), JOCW (Japan Open Courseware Consortium), MERLOT (Multimedia Educational Resource for Learning and Online Teaching), edna.edu.au, SCOUT (Support Center Open for University Teachers), and others. The text 'and more...' is at the bottom right.

10

インタラクティブなシミュレーションをコース教材に内包

The screenshot shows a web page for a chemistry course. The main heading is "Acid Dissociation and Equilibrium". Below the heading, there is a paragraph of text explaining the concept of equilibrium and the relationship between the strength of an acid and its dissociation constant. A chemical reaction is shown: $\text{CH}_3\text{COOH} \rightleftharpoons \text{CH}_3\text{COO}^- + \text{H}^+$. The equilibrium constant K_a is given as 1.8×10^{-5} . A diagram shows a beaker with a solution and a graph of concentration versus time. The page includes navigation buttons like "Home", "About", and "Contact".

AI(人工知能)技術を応用した自学サポートツール(Cognitive Tutor)をコース教材と共に提供

The screenshot shows a physics problem. The text reads: "Determine the sum of three concurrent forces: Force F_1 has a magnitude of 5N, its line of action passes through points A (1, 1) and B (4, 3). Force F_2 has a magnitude of 4N, its line of action is parallel to a 3-4-5 triangle. Force F_3 has a magnitude of 7N, its line of action is at 60 degrees to the horizontal." A diagram shows a coordinate system with points A(1, 1) and B(4, 3). Three force vectors F_1 , F_2 , and F_3 are shown originating from the origin. A hint box asks: "What is the magnitude of the sum? R = [] N. What is the direction of the sum? B = [] degrees." The hint box also includes a "Hint" section.

(Candace Thille, 2007)

The screenshot shows the homepage of the Kyoto University OpenCourseWare (OU-CourseWare) website. The page features a navigation menu, a "Welcome to Kyoto-U OCW" message, and a list of courses. A prominent article titled "01 - Food and environment under economic development and globalization" is highlighted. The page also includes a "Message from President" and a "Department" list.

ウェブ上でオープン化されている講義教材や授業ビデオは、より良く教えるための宝庫!

Open Learning Initiative (Carnegie Mellon University)

The screenshot shows the Open Learning Initiative website. The main heading is "The Science of Learning". Below the heading, there is a paragraph of text explaining the initiative's goal: "The Open Learning Initiative offers online courses to anyone who wants to learn or teach. Our aim is to combine open, high-quality courses, continuous feedback, and research to improve learning and transform higher education." The page includes a "Learn with OLI" button, a "Teach with OLI" button, and a "Get to Know OLI" button. There is also a "What We Do" section and a "Featured" section.

より深く、より効率的に、より確実に学ばせる工夫

何故MITは、イノベティブなのか？
 創意工夫・奇想天外・エンターテインメントの文化

MIT

京大もイノベティブ！：折田先生像！

自習過程の学習診断結果を教員や学生自身に伝え、理解にくいにくい概念や学習項目を明らかにする。

oli
 Open Learning Initiative
 Candace Thille, 2007

Monday, April 14, 2007 — Sunday, April 22, 2007
 Percent of Students Who Reach Criteria

Concept	Criteria	Percent of Students
Causal Theories	Intervention	~85%
	Causation Among Variables	~85%
Statistical Evidence	Causation vs. Association	~85%
	Causation by Unconditional Association	~85%

大学教育におけるFlipped Classroomも可能
 Open Learning Initiative (Carnegie Mellon University)

- 学習科学や認知科学に基づいたコース設計
- 効率的・効果的な学習・教授の追求
- 理解度・学習進度の可視化
- 教授法・学習法・教材の改善のための教員と学生のコミュニケーション作りを支援

Hands-On ENGINEERING class for Freshmen!

2.00a/16.00a Spring 2009

Exploring Sea, Space & Earth:

FUNDAMENTALS of Engineering Design

Prereq:
8.01, 18.01
Units: 3-3-3
Earn CI Credit

Can substitute as
pre-req for 2.0071

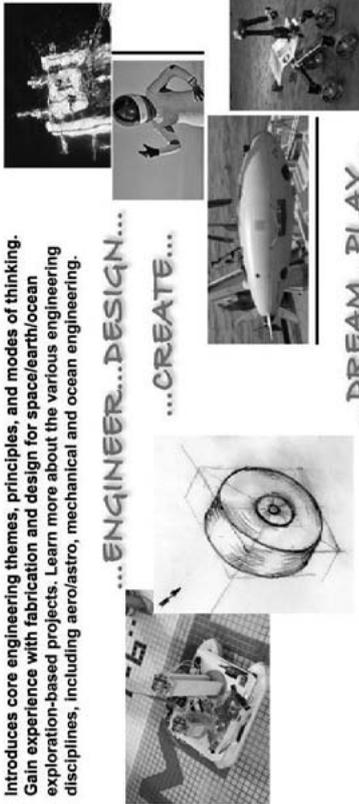
<http://web.mit.edu/2.00a/www>

Introduces core engineering themes, principles, and modes of thinking. Gain experience with fabrication and design for space/earth/ocean exploration-based projects. Learn more about the various engineering disciplines, including aero/astro, mechanical and ocean engineering.

...ENGINEER...DESIGN...

...CREATE...

...DREAM...PLAY...



Professors Alexandra Techet & Dava Newman

21

Learning Objectives

1. Engage in Engineering inquiry and discussion and demonstrate curiosity. Students accept responsibility for their own learning and are independent learners.
2. Use and calculate engineering FUNDAMENTALS (i.e., equations of motion, energy, constitutive equations, momentum, energy, free body diagrams, life, drag, and propulsion) to evaluate designs and robotic vehicle performance (homework, reading assessments, laboratory recitations, design reviews).
3. Approximate/estimate performance of vehicles, and possess a breadth of integrated fundamental knowledge in the sciences and engineering, humanities and arts (e.g. design notebooks, technical reports, web portfolio, laboratory recitations, poster session).
4. Effectively communicate their design ideas and process through written report, oral presentation and final poster presentation.
5. Team design of robotic exploration vehicle (notebooks, prototypes, drawings (hard copy and electronic), computer models, operational subsystems, operational vehicle, peer instruction).
6. Contribute effectively to team design (peer evaluations, self evaluations, TA and instructor evaluation).



22

Exploring Sea, Space AND Earth:

What do these three things have in common?



Space Shuttle

8th Largest Super-yacht



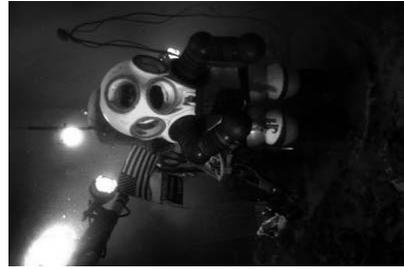
Paul Allen's 415' 4" Octopus



Maserati Race Car

23

These?



Future Warrior Concept



Shuttle Astronaut

Sylvia Earle in the Jim Suit

24

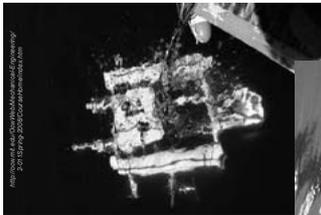
複数の学科・学部が協力して教育イノベーションを推進



Mathlets Mathlets Snapshot

数学科で開発されたMathletsが、物理学科のTEALでも利用されている。

2.00A/16.00A The Projects



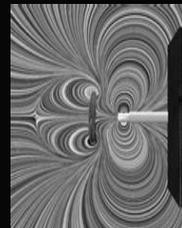
Remotely Operated Underwater Vehicles (ROVs)
2006, 2007 & 2009



Land Sea Rovers
2008

Projects expose students to fundamental electronics (soldering, circuits, fuses, LEDs, switches, etc) & instrumentation (pressure, temp, salinity, etc) as well as fabrication skills, trouble shooting and team work.

TEAL (Technology Enable Active Learning)



The Gallery of Teaching and Learning - KEEP Case Studies: Translating Knowledge and Experience
John Belcher教授と仲間たちによる授業改革プロジェクト

教育イノベーションは、一日にして成らず！

MIT New York Times



At M.I.T., Large Lectures Are Going the Way of the Blackboard



学部・学科レベルでの教員同士の教育知とノウハウの共有

MIT Mathematics CI Space collaborative space for instructors of communication-intensive subjects

HOME TEACHING TIPS COURSE ARCHIVE DISCUSSIONS SITE HELP

CI Space > Teaching Tips > Presentations > Teaching Presentation Skills

TEACHING PRESENTATION SKILLS

HOW TO TEACH PRESENTATION SKILLS

Before any student presentations

After an initial round of student presentations

Useful tricks

- Ask class to generate list of features of a good presentation. Refer to this list when giving feedback on later student.
- You may be able to obtain video equipment to film some student presentations. Seeing a video of yourself in front of an audience can be extremely informative (though often painful and awkward...). To ease the pain, it could be helpful to watch or discuss the video with the student, emphasizing the positive aspects of the presentation.
- If you have students comment on each others' presentations, each presenter is likely to receive the same feedback from the class. If you have students comment on each others' presentations, each presenter is likely to receive the same feedback from the class. If you have students comment on each others' presentations, each presenter is likely to receive the same feedback from the class. If you have students comment on each others' presentations, each presenter is likely to receive the same feedback from the class.

DISCUSSIONS RELATED TO TEACHING PRESENTATIONS:

This page displays all discussions tagged "Presentations" or "Assignment"

Student presentations in teams

March 4th, 2010 by cormican | Tags: Presentations, team | 12 Comments •

How to handle students with varying backgrounds/ability

September 25th, 2009 by sasaf | Tags: Course structure, Presentations, team | 2 Comments •

「互いに学び教え合うこと」、「学ぶために教え、教えるために学ぶこと」の大切さ。

「学びたい」「学んでもらいたい」と切望し、希求しているか？そのような人たちは、どこで出会えるのか？

Peer Instruction

基本的な概念や手法に対して学生の注意を集中させながら、講義中の学生同士のインタラクションを通じ深い理解を促す教授・学習方法

The Concept Test Process

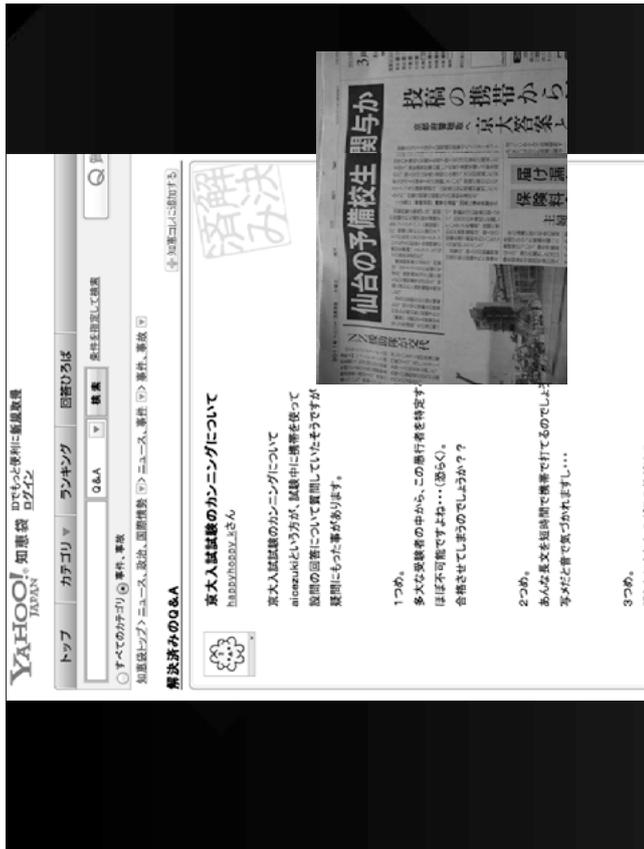
```

    graph TD
      A[Peer thought provoking questions] --> B[Students work on questions]
      A --> C[Students with professor or group]
      A --> D[Students with peer or group]
      A --> E[Students with peer or group]
      A --> F[Students with peer or group]
      B --> G[Self explanation]
      C --> G
      D --> G
      E --> G
      F --> G
      G --> H[Detailed explanation]
  
```

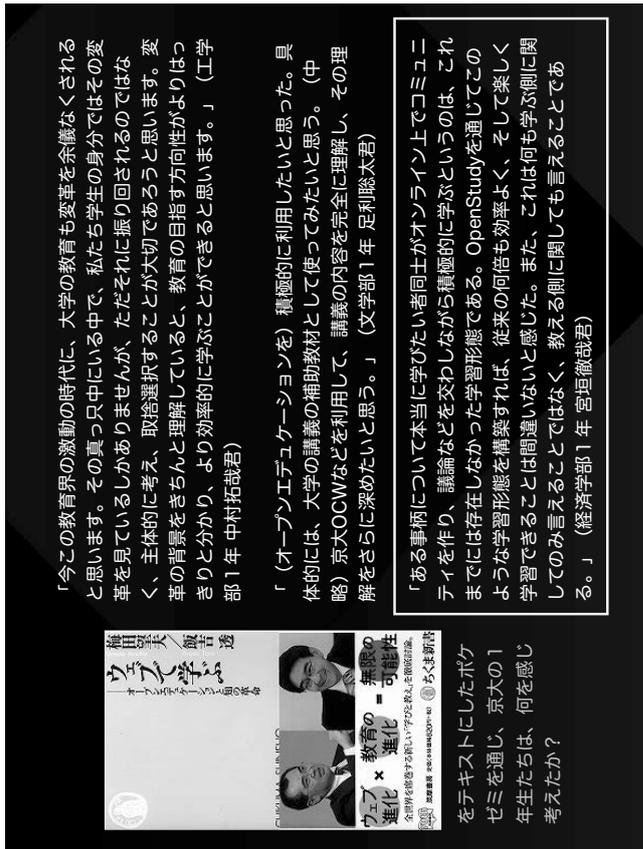
学習情報分析を利用しアクティブな協調学習を最適化

learning catalytics

Prof. Eric Mazur's Group
@Harvard University



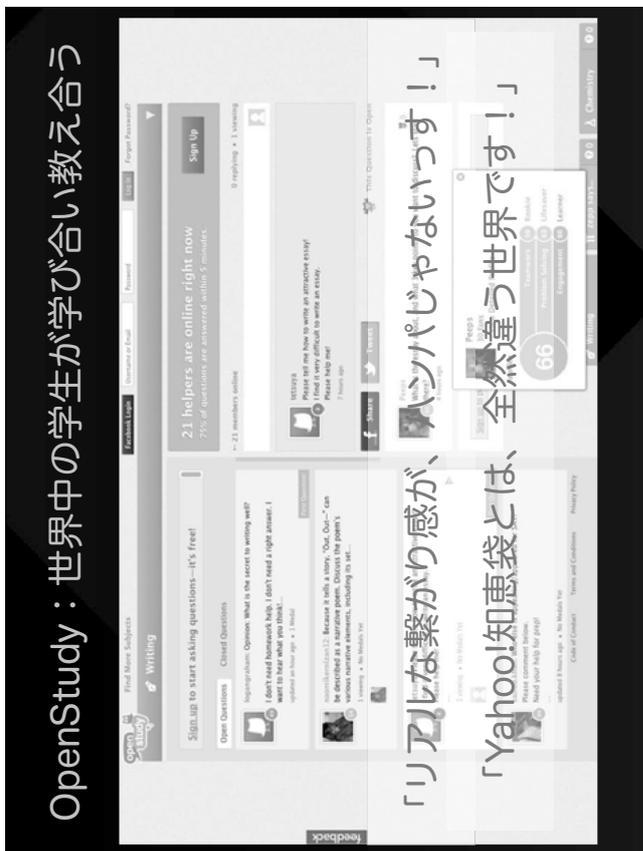
35



36



33



34

UK Open University

OpenLearn プロジェクト

The screenshot shows the OpenLearn website interface. At the top, there's a navigation bar with 'Home', 'LearningSpace', and 'About Us'. Below that, a search bar and several filters are visible. The main content area displays a list of courses with details like 'MIT Course Number: 6.002', 'Level: Undergraduate', and 'Instructors: Prof. Anant Agarwal'. A red arrow points to the 'Join Study Group' button.

- Open Universityの教材の一部を公開
- 学習コミュニティ作りを支援
- LMSは、Moodleを利用

Massive Open Online Course

The screenshot shows the Stanford Massive Open Online Course website. It features a header with 'COLLEGEDEGREES.com' and 'Stanford Online Course'. The main content area includes a video player for 'Unit 0w: 1 Introduction' and a list of instructors: Sebastian Thrun, Peter Norvig, and Anand Agarwal. A red arrow points to the 'Join Study Group' button.

- 世界中から10万人以上が登録
- 学習評価サービスも提供
- コース修了者には認定書を発行

MITOPENCOURSEWARE

Circuits and Electronics

The screenshot shows the MIT OpenCourseWare website for the 'Circuits and Electronics' course. It features a navigation bar with 'Home', 'Courses', 'Donate', 'About OCW', 'Help', and 'Contact Us'. The main content area includes a video player, a 'DONATE NOW' button, and a 'Join Study Group' button highlighted with a red arrow.

- MIT Course Number: 6.002
- Level: Undergraduate
- Instructors: Prof. Anant Agarwal
- Course Description: 6.002 is designed to serve as a first course in an undergraduate electrical engineering (EE), or electronic engineering and computer sciences (EECS) curriculum.

UK Open University

The screenshot shows the UK Open University website. It features a navigation bar with 'The Open University', 'Study at the OU', 'About the OU', 'Research at the OU', and 'Search the OU'. The main content area includes a search bar, a 'Study at the OU' button, and a 'Join Study Group' button highlighted with a red arrow.

- Study at the OU
- Research at the OU
- Search the OU

8.01x = The Best Remix of 8.01 + 8.01T

Classical Mechanics
Covers the basics of Newtonian mechanics, fluid mechanics, kinetic gas theory and thermodynamics in addition to exploring other real-world phenomena.

ABOUT THIS COURSE
8.01x is an online version of Classical Mechanics, which is the first of MIT's introductory physics courses. The course covers the basic concepts of Newtonian mechanics, including kinematics, dynamics, energy, and momentum. Topics are covered, such as resonance phenomena, musical instruments and astronomical phenomena such as binary stars, neutron stars, black holes, stellar collapse, and supernovae. You will also be given a peek into the intriguing world of quantum mechanics.

The course follows the MIT on-campus class as it was given by the renowned professor Walter Lewin in the fall of 1999. This includes his video lectures, problem sets, and a final exam. In 2012, the course was remastered and Professor Lewin, proclaimed "a Web Star" by The New York Times, has supplemented his lectures by including interactive questions to help students check their understanding during the lecture themselves.

School:	MITx
Course code:	8.01x
Classes start:	9 Sept 2013
Estimated effort:	12 hours per week

Prerequisites:
Some mathematical training is needed (high school level algebra and trigonometry, and some calculus). Calculus, AS MIT, 8.01T, Single Variable Calculus is a prerequisite for 8.01 (the best course you can take before 8.01x is 8.01T).

Register for 8.01x

Massive Open Online Course: MITx

MIT launches online learning initiative
MITx will offer courses online and make online learning tools freely available.

MIT today announced the launch of an online learning initiative internally called "MITx." MITx will offer a portfolio of MIT courses through an online interactive learning platform that will:

- organize and present course materials to enable students to learn at their own pace
- feature interactivity, online laboratories and student-to-student communication
- allow for the individual assessment of any student's work and allow students who demonstrate their mastery of subjects to earn a certificate of completion awarded by MITx
- operate on an open-source, scalable software infrastructure in order to make it continuously improving and readily available to other educational institutions.

参戦？ 日本初のedXへの参加

京都大学 KyotoU

Chemistry of Life
This course explores the chemical and physical processes that underlie life. It covers the structure and function of biomolecules, the biochemistry of metabolism, and the molecular basis of genetic information. The course is designed for students with a background in chemistry and biology.

edX
Experience the best courses. Redefine your world. Uncover a new passion or learn skills that just may change your life.

RETHINK YOUR WORLD
Experience the best courses. Redefine your world. Uncover a new passion or learn skills that just may change your life.

REAL CLASSES
An amazing experience. Real classes. Real people. Real learning. Real progress. Real success.

ON YOUR SCHEDULE
Take what you want, when you want. No more waiting for a class to start. No more waiting for a professor to be available. No more waiting for a seat in a lecture hall.

MEET NEW FRIENDS
Join a community of learners from around the world. Share your experiences. Learn from each other. Make new friends.

BECOME AN edX STUDENT. IT'S EASY.

MOOC Wars? Coursera vs. edX

スター教師たちが参戦する 「教えのバトル・ロワイヤル」

大学(組織) → 教員(個人) というシフト

COURSERA
The World's Best Courses. Online, for Free.

edX
Experience the best courses. Redefine your world. Uncover a new passion or learn skills that just may change your life.

オープンな学習の成果認定のための修了証やオープン・バッジ

EDUCATION

Open Badges
Recognizing learning wherever it happens.

Your Academic Data
Giving learners access to their personal learning profile.

Education Data Standards
A shared vocabulary for education data.

→ See all education datasets & tools



Higher Education Datasets
Comprehensive data about colleges and technical/vocational schools across the United States.



Learning Registry
Surfacing the best online learning resources for teachers and students.



Dr. Anant Agarwal, edX President

Meta Universityへの足掛かり？

MOOCsで修了証だけでなく単位も取れる？

Supported by
BILL & MELINDA GATES foundation

American Council on Education to Evaluate Credit Equivalency for Coursera's Online Courses

We are pleased to have recently announced that we have begun working with the American Council on Education (ACE) to initiate a credit-equivalence evaluation of a select few of the courses offered on Coursera.

This new third party evaluation, conducted through ACE's College Credit Recommendation Service (ACE CREDIT[®]), has the potential to make these select courses completed on Coursera eligible for college transfer credit at institutions choosing to accept the ACE recommendations.

ACE CREDIT[®] is a recognized authority in assessing non-traditional education experiences and helping students gain credit for courses and exams taken outside traditional degree programs. ACE CREDIT[®]'s review process enlists a team of academic faculty to assess courses and exams for the purpose of making college credit recommendations. These recommendations are generally accepted by more than 2,000 colleges and universities in the US, opening the possibility for students enrolled at one of these institutions to transfer credit into their degree programs. The decision to accept ACE CREDIT[®] recommendations is fully subject to the policies of the school and degree program a student wishes to apply it towards.



Wired Campus
The latest news on tech and education.

MOOC Provider edX More Than Doubles Its University Partners

At least one new member echoed that sentiment in explaining the decision to sign up. "What we hope to get out of our partnership with edX is actively learning from and building upon each other's educational innovations," said Toru Iiyoshi, a professor at the Center for the Promotion of Excellence in Higher Education at Japan's Kyoto University, in an e-mail interview. "It almost feels like that, by joining edX, we are together creating what Charles Vest once conceived as Meta University," he added, referring to the former president of MIT.

"We've not just joined MOOCs," said Iiyoshi, president of edX.

At least one new member echoed that sentiment in explaining partnership with edX in actively learning from and building upon each other's educational innovations," said Toru Iiyoshi, a professor at the Center for the Promotion of Excellence in Higher Education at Japan's Kyoto University, in an e-mail interview, which Charles Vest once conceived as Meta University," he added, referring to the former president of MIT.

Western Governors University

RESEARCH & PROGRAMS / ADMISSIONS / TUITION & FINANCIAL AID / CAREER WGU / THE WGU EXPERIENCE

1,866-225-5948

Learn more. Become more. *Online.*

WGU is a fully accredited online university offering online bachelor's and master's degree programs.

- Bachelor's degree options. Earn a degree in 3-5 years.
- Flexible online degrees. Earn a degree in 18 months.
- Affordable. Lower tuition. WGU is a non-profit university.
- Earn from your experience. Accelerate your time to complete your degree with:

WGU NEWS

- WGU featured on NBC's Nightly News
- Watch video from the WGU Winter PDG
- WGU's new 100% online Bachelor's in Business
- THE MAGAZINE CARS WGU, THE BEST
- AMPP Presentation WGU Educational Leadership Program Graduates

SCHOOLS OFFERED AT WGU

- Additional Bachelor's Unimproved Degree Programs Available
- Bachelor's in Business Administration
- Bachelor's in Business Administration - Management
- AMPP Presentation WGU Educational Leadership Program Graduates

REBERT WGU

Western Governors University

- アメリカの19州の協力によって創設されたオンライン公立大学
- 通常の大学のように自前の履修課程に合わせた講義を提供していない
- 学生が十分な知識や技能を持ち合わせていることが試験やレポートで確認されれば、「学生が、どのような教材を使って、どのように学んだか」に関係なく、評価基準に従って単位を認定し、必要な単位数が揃えば学位を授与する」という制度を採用（学生は、オープンエデュケーションをフル活用できる）
- 学位取得にかかるコストは、普通の私立大学の六分の一程度
- 学士課程を最短二年間で修了可能なので、学生（特に社会人学生）が経済的・時間的に得られるメリットも大きい
- 学生のための24/7オンライン学習支援（教員やチューターによるカウンセリングなど）やオンライン図書館などの学習リソースなどの提供

ROOM for DEBATE

SEARCH ANYTIME.COM

DEBATEERS

Got a Computer? Get a Degree.

INTRODUCTION

MAV 6, 2012

Are you looking for a new way to get a degree? At the University of Phoenix, we're offering a new way to get a degree. Last week, Harvard and the Massachusetts Institute of Technology announced a new nonprofit partnership to offer free online courses. Those who complete the course will get a certificate of mastery and a grade, but no official credit.

Should Harvard and M.I.T. offer credit for those courses and even allow students to obtain their degrees online? Indeed, doesn't it make more sense for elite colleges and universities to do this?

READ THE DISCUSSION

The Promise of Lower Costs
RICHARD WELDER, CENTER FOR EDUCATION POLICY AND PRODUCTIVITY

Enhancement, Not Replacement
SEAN DECAUL, OBERLIN COLLEGE

More Options Means More Learning
JEREMY GLEICK, SOPHOMORE, UCLA

A Way to Reach Minorities
KATHY ENGER, NORTHERN LIGHTS LIBRARY NETWORK

What About the Lab Work?
WALTER LEVIN, PROFESSOR OF PEDAGOGY, MIT

THE CONVERSATION

PREVIOUS

NEXT

Who's Afraid of the Big Bad MOOC?

May 6, 2013, 1:00 pm

By Andrew Valls

Are MOOCs and other online materials a threat to quality public higher education, and to our role as professors? The members of the philosophy department at San Jose State University think so. They recently issued an open letter to Michael Sandel, of Harvard University, objecting to his role in encouraging the use of MOOCs at public universities. The controversy stems from San Jose State's contract with edX, a company that provides MOOCs, including one based on Sandel's

THE CHRONICLE OF HIGHER EDUCATION

Home News Global Opinion & Ideas Facts & Figures Blog Job Advice

Webinar: 3 Steps to Improve Program Effectiveness with Predictive Analytics

Technology

May 2, 2013

Why Professors at San Jose State Won't Use a Harvard Professor's MOOC

Comments (276)

Michael Sandel, shown giving a lecture at Harvard, says he hopes universities that use the MOOC version of his course do not force professors to use any more material from it than they wish to.

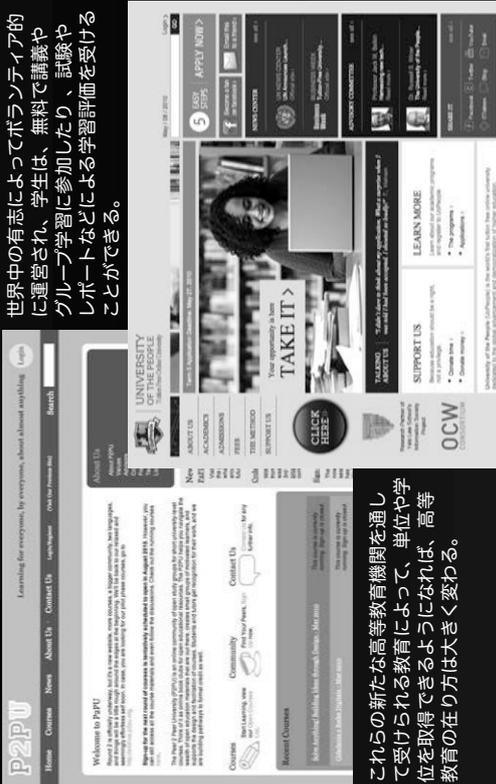
By Steve Kolowich

Professors in the philosophy department at San Jose State University are refusing to teach a philosophy course developed by edX, saying they do

地元大学教員 vs. MOOC教員

Peer-To-Peer U & U of The People

世界中の有志によってボランティア的に運営され、学生は、無料で講義やグループ学習に参加したり、試験やレポートなどによる学習評価を受けることができる。



これらの新たな高等教育機関を通して受けられる教育によって、単位や学位を取得できるようになれば、高等教育の在り方は大きく変わる。

一方、日本では？

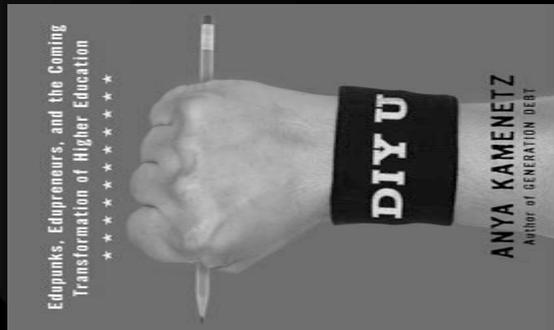


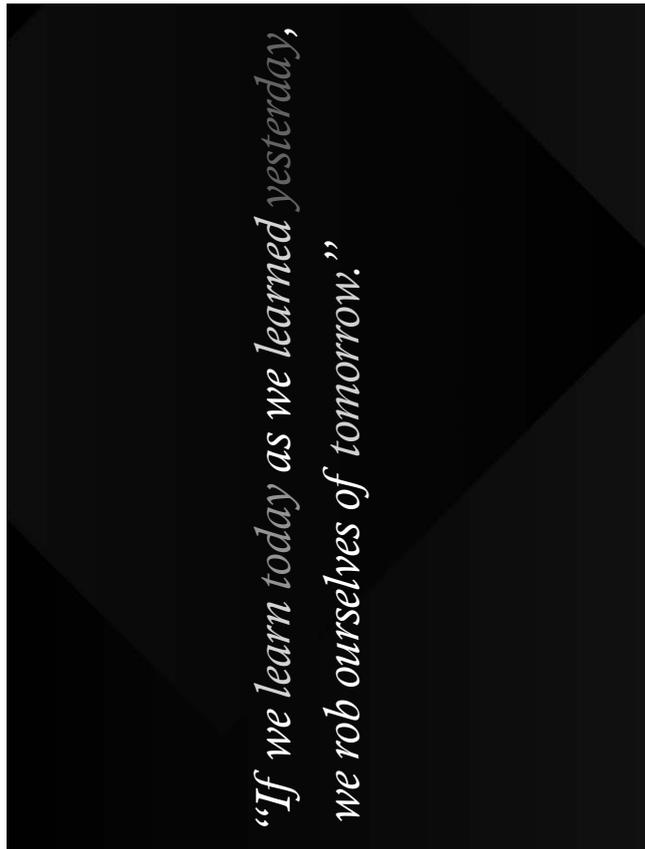
をデキストにした初年次ゼミを通じ、京大の1年生たちは、何を感ぜ考えたか？

「日本では生徒の側の問題として、強固な意志を持って本当に学習しようとしているものが少なく、教師の側の問題として、自分たちの地位に満足してそれ以上学ぼうとはせず、質も劣っている。(中略)多くの日本人がこのような(オープンエデュケーションの)システムを知らないであろうことが残念でならないし、ある種日本にとって損失ではないかとの印象を受けた。」(法学部1年 古本遙君)

「オープン化すると競争が促進されるため、オープンエデュケーションが日本の教育改善の鍵になりうる。しかし逆に、質の悪いものを進んでさらけ出そうとはしないから、質の悪さがオープン化の妨げになる。ここに日本におけるオープンエデュケーションの問題がある。日本でオープンエデュケーションが普及してないのは、明確な目的がないからだと思う。」(経済学部1年 徳井わか菜さん)

「東大・京大をはじめとする日本のトップ大学が、蓄積した教育的ナレッジを発信できないのは、残念で恥ずかしいことだと感じる。」(理学部1年 上杉高生君)








「今この教育界の激動の時代に、大学の教育も変革を余儀なくされると思います。その真っ只中にある中で、私たち学生の身分ではその変革を見ているしかありませんが、ただそれに振り回されるのではなく、主体的に考え、取捨選択することが大切であると思います。変革の背景をきちんと理解していると、教育の目指す方向性がよりはっきりと分かり、より効率的に学ぶことができると思います。」（工学部1年 中村拓哉君）

「（オープンエデュケーションを）積極的に利用したいと思った。具体的には、大学の講義の補助教材として使ってみたいと思う。（中略）京大OCWなどを利用して、講義の内容を完全に理解し、その理解をさらに深めたいと思う。」（文学部1年 足利聡太君）

「ある事柄について本当に学びたい者同士がオンライン上でコミュニティを作り、議論などを交わしながら積極的に学ぶというのは、これまでには存在しなかった学習形態である。Open Studyを通じてこのような学習形態を構築すれば、従来の何倍も効率よく、そして楽しく学習できることは間違いないと感じた。また、これは何も学ぶ側に関してのみ言えることではなく、教える側に関しても言えることである。」（経済学部1年 宮垣徹哉君）

をテキストにした初年次ゼミを通じ、京大の1年生たちは、何を感し考えたか？

- John Dewey (1916)

京都文教大学臨床心理学部 教授
濱野清志

ボディワーク 心体で感じる 他者とつながる・自分とつながる

1 心と体の関係

教師と学生とのかかわりは、知的な交流のみではなく、情緒的な交流、学ぶことに意味を感じることの共有など、全部が絡まりあっていること

自分自身が自分の人生を、無理なく、できる限り全体的に生きているかどうか
落ち込んで何もする気のしない自分をどのように生きていこうとするか

→ 心と体の現象を私の経験にしていくところに個性があらわれる

教師が自分という存在のかけがえのなさをそれなりに生きていこうとする
ところに、一番の教育力が生まれる

2 自分という存在・生命現象を生きること

「崖から落ちる」たとえばなし 自己理解のために

そこに見出される主体性と落ちていく自分の存在

自分という存在のもつ心や体の特色と自分自身を同一化しない

3 学びの一人称性

何を教えることが大切か。

人それぞれのその時活用できるその人の資源を十分に活かせる多様な環境を整える
自分にできる限界をよく知る。

4 自身の主観性、一人称性に気づき、学ぶ

実践その① 手を観察する

両手を目でながめて自分の手がどんな手かよく観察する（1～2分）

目を閉じて、両手を身体の前に浮かし、動かさないうで、観察する（1～2分）

二つのモードの観察で体験したことから気づくことを話し合う

考えるヒント：一人称の身体（主観的身体）と三人称の身体（客観的身体）のちがいを

誰にでも共通して捉えることのできる手と今ここにしかない、生きている私の手

自分という存在のかけがえのなさ

実践その② 動きを通して相手に触れる

背中から観察して、相手の動きを捉え、伝える
自分が感じる自分の体験と他者から見た自分の体験
関わりつつ、信頼関係を築くことのコツ

考えるヒント：自分の体験は自分だけのもの。他人が自分をどうみているか、その認識が自分の行動に影響を与えること。信頼関係は一方通行でははぐくまれないこと。

実践その③ 身体感覚に目を向ける

マインドフルネス 3分間呼吸法 ただひたすら自然な自分の呼吸を観察する
その体験を、正直にながめ、話し合う

考えるヒント：外向的姿勢と内向的姿勢、内向の重要性、呼吸のおもしろさ 意識と無意識の交差点
自分という生命現象に触れる

実践その④ 気功による気の体験

気のボールをつくって味わう
たがいの気のボールに触れ合う
気による交流を体験する

考えるヒント：イメージがリアリティを生む。気はそこに関与する生きた人がいることであるかのよう
に感じられる。気そのものを独立して捉えすぎないことの重要性。「気のせい」と「気のおか
げ」

参考文献：濱野清志『覚醒する心体』新曜社

藤原勝紀『からだ体験モードで学ぶカウンセリング』ナカニシヤ出版
ジョン・カバットジン『マインドフルネスストレス低減法』北大路書房

「大学院生のための教育実践講座2013
～大学でどう教えるか～」ミニ講義

大学授業の現場から見たプレFD

大阪体育大学
吉沢 一也

概要

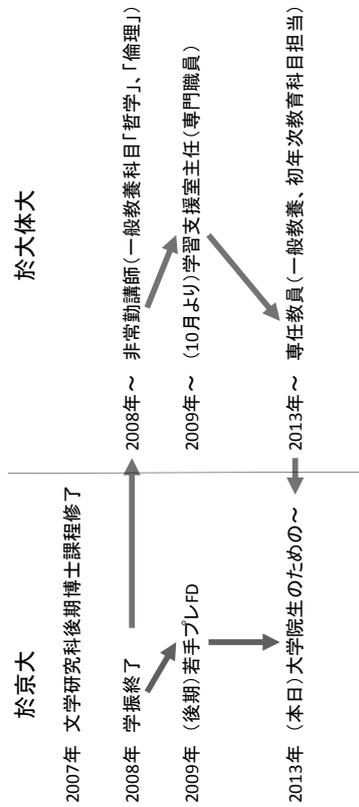
話のフロー

1. 話者の立場。育成される側から育成する側へ。
2. 大学の機能別分化への対応——京大プレFDはどこまで対応できるのか。
3. 大学の機能に応じた、求められる教員像。
4. 特定の機能を持つ大学における、教員の使命と可能性

目的

大学教員を目指す京大院生、PD、研修員が、ファカルティ(大学教員)に向けて自己形成していくための、きっかけとなる場の提供。

話者の背景



大学の機能別分化と京大プレFD

※大学の機能別分化への経緯

- ・理念・目標にもとづいた各大学の多様化・個性化(大学審議会H10)
- ・諸機能の配分と重点を置き方による大学の特色化(中教審H17)
 - 世界的研究・教育拠点,
 - 高度専門職業人養成,
 - 幅広い職業人養成,
 - 総合的教養教育,
 - 特定の専門的分野(芸術, 体育等)の教育・研究,
 - 地域の生涯学習機会の拠点,
 - 社会貢献(地域貢献, 産学官連携, 国際交流等),

・本学としての役割・機能のうち、自らの“強み”となるものの重点化。使命の明確化と機能別分化に関する支援策の検討(文科省の依頼H23)

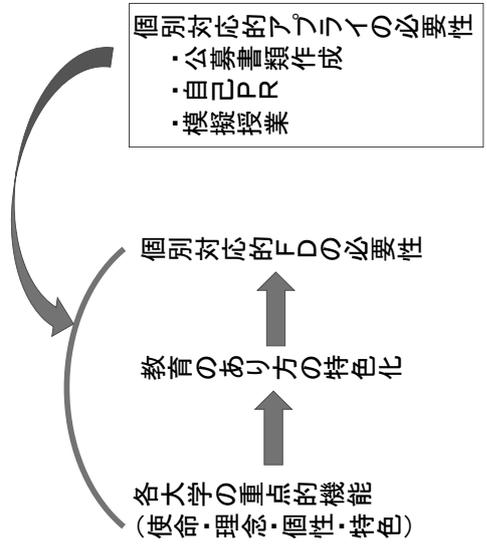
上記の分化は、教育の分化、FDの分化をもたらすのでは？

※京大ブレFD

【概要】

- ・文学研究科のODが分担して、各自の専門に基づいた2～3回の授業をリレー形式で実施。
- ・このすべてを録画保存するとともに学内に公開し、毎回の授業終了後、授業分担者同士で授業検討会を行う。
- ・これらの授業実施を受けて、前期1回、後期1回の計2回、研修会を開催し、授業分担と研修会受講を条件として、参加者には総長名の修了証が授与される。

(授業担当者にとっての)メリットと、残された課題は？



ODの時間的制約に対して

- 研究と教育の内容的乖離
他大学の特色に合わせた内容の授業を構想することができない。
- 研究と教育の方法論的乖離
他大学の学生の気質にあった授業方法は独自に研究がたい。

◎とにかく教えることになった大学の空気をすばやく読むしかない！

研究時間の最大化という観点から辛抱する！！

二つのエピソード

アレスが天文研究をしようとして、ねえテオドロスさん、上を見ていて井戸に落ちたとき、機転のきく愉快なトリアア出の下女が彼をかからって「あなたはお知りないうと夢中になつていらつちやいですが、ご自分の目の前のことや足元のことはお気づきではないのですね」と言つたという話があるが、ちよつとそんなものだね。そしておなじじかいかい、知を愛求して生きていく人々全てにあてはまるというわけだ。

(プラトン『テアタイテトス』,174a-b)

アレスが貧乏であることから、人びとが彼に向かって、哲学は無益だと言わんばかりに非難したところ、彼は天文学によってオリブの出来具合を見通し、いまだ冬の間にならずかな金子(きんす)を工面して、ミレトスとキオス島中のすべてのオリブ絞り機の手付けを打つたが、競り合う相手がいらなかつたために、それらを安価に賃借することができた、というのがその話である。やがて美りの時期が到来すると、大勢が突如として一者に機械を探し求めたので、彼ははいかようになりと自分が望むままの条件で買出し、多額の金銭をかき集めることができた。そして彼は、「哲学者にとつて、もしその気になれば、裕福になることは容易であるが、ただし、それは本気で取り組むべき事柄ではない」ということを示してみせた、というのである。

(アリストテレス『政治学』A.11.1259a)

2013年 8月 5日
 大学院生のための教育実践講座2013
 ～大学でどう教えるか～

セッション8 ミニ講義3
大学で教えるということ

京都大学 高等教育研究開発推進センター
 大塚 雄作

◆毎回授業アンケートの挑戦

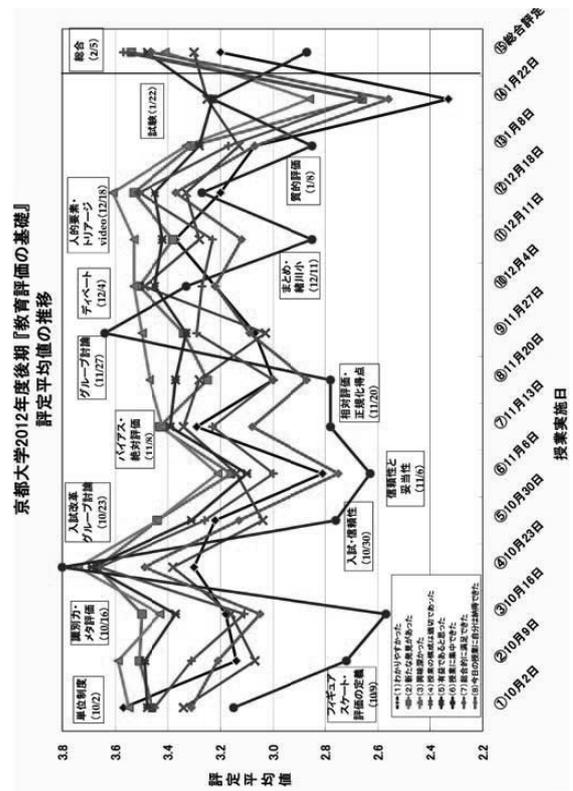
教育評価の基礎 (I) Portfolio 2006 - 6 (5月23日)

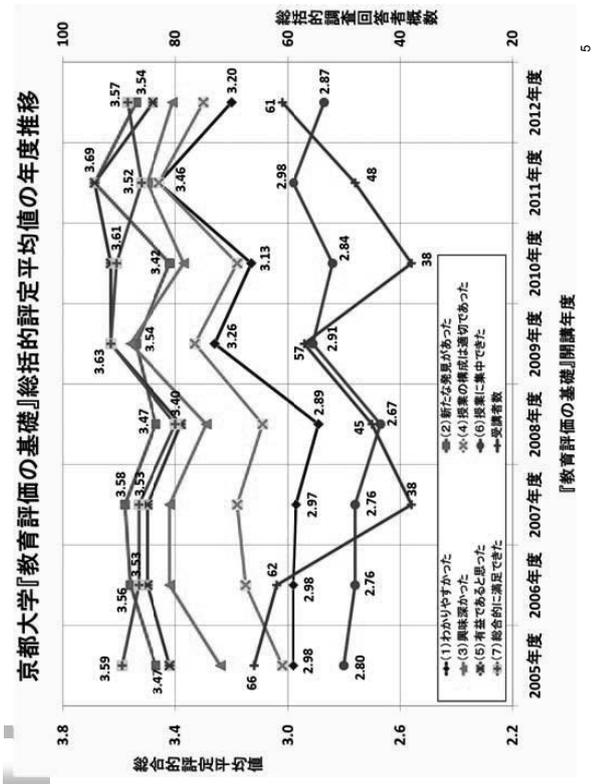
学生番号	氏名
(1) わかりやすかった	あひはる
(2) 新たな発見があった	あやまら
(3) 興味深かった	あやまら
(4) 授業の構成は適切であった	あやまら
(5) 有益であると思った	あやまら
(6) 授業に集中できた	あやまら
(7) 総合的に満足できた	あやまら

■今日の授業で、個人的に、ポイントと感じた点、疑問点、印象に残った点、授業で改善すべき点など、以下に自由に記載して下さい。(なお、必ず何か記入して下さい)

■いい大学授業とは何だろう？

- 授業の明解性・体系的性 ← 内容分析
- 授業の伝達性・活動性・応答性 ← 方法工夫
 視聴覚メディア活用・学生参画型授業・
- 学習評価の工夫
 学生の学習意欲・主体的学び ← 学生の多様性





■何が授業「改善」?

——これでもいいと思った瞬間が最も危ない!?

■一つの側面を改善 → 他方が阻害されることがある

Cf. 角を矯めて牛を殺す

■一人ひとりの学生の求めているものは異なる

→ 学生の求めとどう呼応するか
その定石はない?

Cf. 啐啄同機(そつたくどうき)

■学生との距離感

■受講生はどんな学生だろう

■学生はついてきてくれるだろうか

出身大学での授業の
やりやすさ

若い時期の授業の
学生との近い感覚

ポディワークの意味



■授業をひらく

■「わかりやすさ」が低い

→ やさしくすればよいか?

むしろ、演習・実習などの併用は?

■「授業への集中度」が低い

→ 集中度を高める工夫をすればよいか?

むしろ、事前の準備、今後の展開明示か?

★カリキュラムの視点からの改善の試みが肝要

= 授業は一人だけで改善できるものではない

■ 授業をどう創るか？

- 授業で教員は「講義」しなければならぬのか？
「指導」しなければならぬのか？

では、「講義」では 学生は「参加」しないのか？

- 授業は サービス産業？
顧客満足度を
満たせばよいか？

- 「学習共同体」という発想

= 共同体への参画過程・
そこでの創発的産出を学びと捉える



8

■ 大学教員の役割は？

- 授業の状況に応じた意志決定者
= デイレンマ・コディネーター？
- 学習共同体の形成を促進するモデレーター？
- 学習共同体を「ひらき」、
学習共同体間を「つなぐ」
FD共同体への参加者？



『大学授業の課題』は山積している……。

9

セッション3 模擬公開授業・検討会

教職課程科目「教育原理」を一例として

井岡 瑞日（立命館大学／京都学園大学 非常勤講師）

1. 講義全体の概要

目的 （シラバスより抜粋）

現代教育を理解するためには、人類が形成してきた「教育」という営みについての基本的理念を再確認する必要がある。本授業では、近代の西洋、及び日本社会における代表的な教育思想やその背景にある子ども観、近代学校教育制度の成立・展開過程等について多角的に検討し、教育の基本原則についての理解と深い洞察力を養うことを目指す。その上で、あらためて現代日本社会の教育課題について、歴史的視点から考察してみたい。

※ 板書中心の講義形式で行う。教科書、参考書は使用しない。適宜プリントを配布する。

スケジュール

1. ガイダンス
2. なぜ教育の歴史を学ぶのか
3. 西洋近代の教育思想と実践① 「近代教育学の父」、コメニウス
4. 西洋近代の教育思想と実践② 「子どもの発見者」、ルソー
5. 西洋近代の教育思想と実践③ 幼児教育の実践者たち、ペスタロッチ・フレーベル
6. 西洋近代の教育思想と実践④ 子どもの権利の提唱者、ケイ
7. 日本の教育制度と思想① 近代学校教育制度の登場
8. 日本の教育制度と思想② 公教育制度の整備と国家主義教育の形成
9. 日本の教育制度と思想③ 新中間層の興隆と大正新教育運動
10. 日本の教育制度と思想④ 戦時下の教育から戦後の教育へ
11. 現代教育の課題を考える① 教育病理問題の顕在化と学校・教師批判
12. 現代教育の課題を考える② なぜ、「ゆとり教育」は実施されたのか
13. 現代教育の課題を考える③ いじめの温床！？、学級（クラス）の歴史
14. 現代教育の課題を考える④ 育児・しつけをめぐる問題の再考
15. 授業の総括／検証テスト

2. 模擬授業（レジュメ）

本授業の構成

第13回 13. 現代教育の課題を考える③ いじめの温床！？、学級（クラス）の歴史

1. 学級（クラス）の病理、「^{スクール}教室^{カースト}内カー
2. 明治～大正期における学級制度の導入と展開
 - 日本の学級の特徴 ●等級制から学級制へ ●学習以外の活動をする学級
3. 学級（クラス）は「あって当たり前」の組織ではない

レジュメ（模擬授業に相当する部分）

2. 明治～大正期における学級制度の導入と展開

○日本の学級の特徴

- 「学級はかくあるべき」
- ・学級共同体言説
 - ・教師・生徒一体性言説

○等級制から学級制へ

学制発布による欧米をモデルとした学校教育制度の導入は、人々に大きな困惑を与えた。

- ・時間による拘束
- ・師匠→教師、寺子→児童
- ・「教室」の誕生

学校教育の効用を人々に理解させるため、明治政府は**等級制**を導入した。

1892（明治24）年、文部省令「学級編成等ニ関スル規則」により、それまでの等級制に代わり、**学級制**が導入される。

「一人ノ本科正教員ノ一教室ニ於テ同時ニ教授スヘキ一団ノ児童ヲ指シタルモノニシテ従前ノ一年級二年級等の如キ等級ヲ云フニアラス」

その目的は、国民国家を担う児童を**規律化**することであった。

Cf. 個人のための知育→国家のための徳育

授業の構成

第1週: オリエンテーション

第2週: 脳科学

第3週: 生理

第4週: 知覚

第5週: 注意

第6週: 意識

第7週: 記憶I

第8週: 記憶II

第9週: 言語

第10週: 思考

第11週: 感情

第12週: 発達障害I

第13週: 発達障害II

第14週: 総合討論

第15週: 総括

4

概要説明

- 誰に対する授業であるか。
 - 4年生総合大学の1回生向け概論授業
- 授業の目的は何か、そのために15回の授業をどう構成しているのか、この1回(90分)の授業はどの構成し、提供する授業はそのうちのどの部分にあたるのかを明確にしてください。

2

授業の目的

- 多様な観点から多様な方法論を駆使して展開されている、現代の認知心理学研究の全体像を知る。
- 主要な研究領域と基礎概念、方法、先端研究の成果などについて、包括的に理解する。

3

言語

米田 英嗣 (KOMEDA, Hidetsugu)
白眉センター
2013年8月5日

komeda.hidetsugu.5w@kyoto-u.ac.jp

認知心理学概論 第9週

何のことを書いた文章？

手順は簡単である。まず、物をいくつかの山に分ける。もちろん、量によっては一山でもよい。設備がその場になければ、次の手順として他の場所に行かなければならないが、そうでない場合はこれで準備完了である。大事なことは、一度にあまり多くやらないことである。つまり、一度に多くやりすぎると、むしろ少なすぎるくらいの方がよい。この注意の必要性はすぐにはわかないが、もし守らないと困ったことがすぐに起こる。ここをうまくしないとお金がかかるとにもなりかねない。最初の内は、この作業は複雑に見えるかもしれない。しかし、すぐに生活の一部となるであろう。近い将来、この仕事が必要でなくなるとは考えられないし、誰も予言できない。手順が完了すると、物をまたいくつかの山にまとめあげる。次にそれを決まった場所にしまう。やがて、これらはまた使われ、そして再び同じ作業が繰り返される。面倒なことだが、とにかくこれは生活の一部なのである。

Bransford & Johnson (1972)

- 50名の高校生
- 「洗濯」というタイトルを、
 - 見せない
 - 読解後に見せる
 - 読解前に見せる

本日の内容(模擬授業)

- 言語の理解
 - 言語と脳
 - 言語と思考
 - 文章の読解
- 字義通りでない言語
 - 比喩
 - 皮肉
 - 比喩皮肉の神経基盤
- 言語における身体化認知
- ハイリンガルの言語理解
 - ハイリンガルの子どもとおとな
 - 言語の切り替えスイッチ
- 定型的でない言語の理解
 - 高機能自閉症を持つ人の言語理解
- 将来の方向性

何について書かれた文章か、
わかりますか？

文章の理解とは？

- 認知心理学の実験から考えると、認知心理学者が合意している説は以下
- 文章を理解する＝**文章を見て、聞いて、それが表わしているものを正しく思い浮かべ、正しく更新し続けること** (Kintsch, 1998)

12

文章の読解過程

- Kintsch (1998)によれば、文章読解過程は以下のプロセス
 - A. 文字の形や音の認識
 - ↓
 - B. 文章そのもののみからわかる逐語的な理解
 - ↓
 - C. Bに自分の記憶情報を統合したイメージの構築

※文脈情報は、Cの記憶情報に含まれる

13

表1 タイトルの提示タイミングにおける成績の相違

	なし	読解後	読解前	最大値
理解成績	2.29 (.22)	2.12 (.26)	4.50 (.49)	7
再生成績	2.82 (.60)	2.65 (.53)	5.83 (.49)	18

()内は、標準誤差

10

先行オーガナイザ

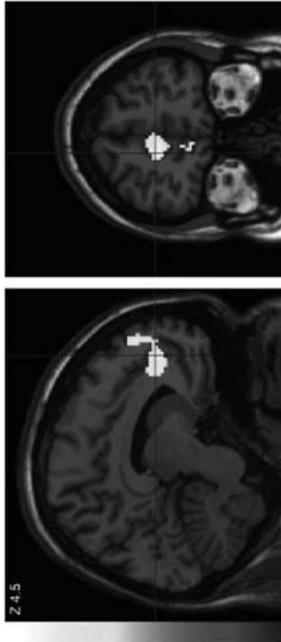
- 先行オーガナイザとは、学ばせたい知識を整理するために、当該知識に先行して提供する枠組みのこと (Ausubel, 1960)
- 同じ文章でも、適切なタイトルがあると、よく理解できる
- 適切な先行オーガナイザは、理解を正しく方向づける

11

<p style="text-align: center;">解釈</p> <ul style="list-style-type: none"> • 主題「愛」と、たとえる語「角砂糖」の比較あるいは相互作用によって類似特徴(たとえば、甘い、溶けてなくなる? など)が顕在化 <p style="text-align: right;">16</p>	<p style="text-align: center;">比喩</p> <ul style="list-style-type: none"> • 主題と、たとえる語を類似性、包含関係、イメージに基づいて結びつけた修辞表現 <ul style="list-style-type: none"> - 「のようだ」があるものを直喩 (simile) - 「のようだ」がないものを暗喩 (metaphor) <p style="text-align: right;">14</p>
<p style="text-align: center;">心は沼のようだ</p> <p style="text-align: right;">17</p>	<p style="text-align: center;">愛は角砂糖のようだ</p> <p style="text-align: right;">15</p>

<p style="text-align: center;">解釈: 文脈の効果</p> <p>「美というものは、そうだ、なんて云ったらしいか、虫歯のようなものなんだ。それは、下にさわり、引っかかり、痛み、自分の存在を主張する」 - 三島由紀夫「金閣寺」(楠見, 2001)より</p> <p style="text-align: right;">20</p>	<p style="text-align: center;">解釈</p> <p>• 主題「心」が、たとえる概念「沼」を典型例とするくどろどろしたもの>カテゴリーに包含</p> <p style="text-align: right;">18</p>
<p style="text-align: center;">皮肉</p> <p>• 肯定的発話で否定的意味を意図</p> <p>• たとえば、期待はずれの新人に対し、「本当に有能な新人だ」</p> <p style="text-align: right;">21</p>	<p style="text-align: center;">美は虫歯のようだ</p> <p style="text-align: right;">19</p>

比喩と皮肉の脳基盤



比喩と皮肉を理解する際に共通して活動する脳領域
 内側前頭前野 medial prefrontal cortex
 他者の心的状態を推測する能力である「心の理論」の脳領域

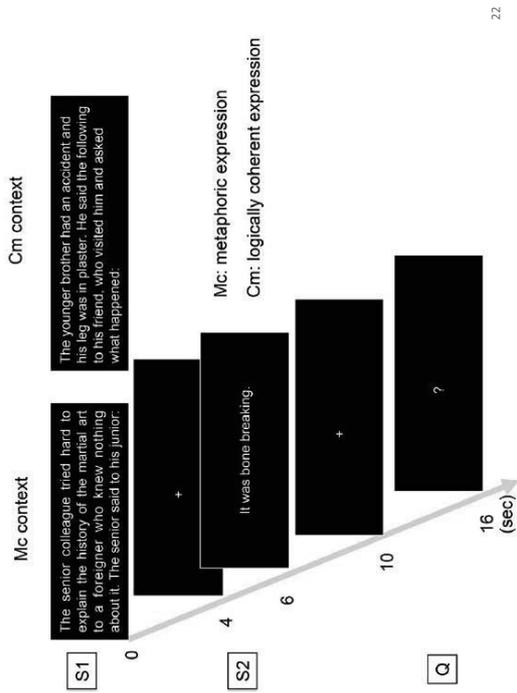
24

字義通りでない言語まとめ

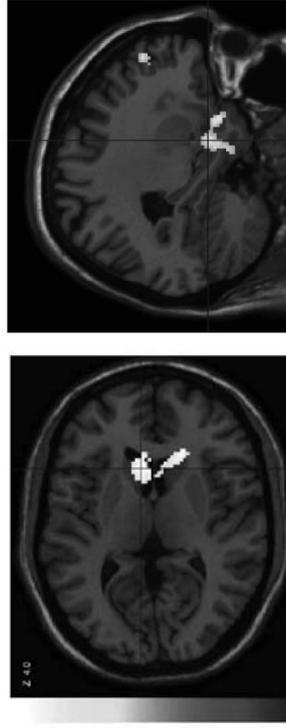
- 比喩と皮肉にそれぞれ選択的に機能する脳領域が存在
- 共通しているのは、他者の心的状態理解が必要
 点
 - 話者の意図を理解することが必要
- 比喩も皮肉も、ただの修辞表現だけでなく、会話相手の心の状態理解に関連

25

比喩と皮肉の脳基盤 (Uchiyama et al., 2012)



比喩と皮肉理解を支える脳領域



比喩を理解する脳活動
 尾状核 caudate nucleus
 大脳基底核の中にある線条体の一部
 単語、文の曖昧性の解消に関連

皮肉を理解する脳活動
 扁桃体 amygdala
 感情生起に関連
 人物の感情を推測

23

文とイメージ1



- 冷蔵庫の中に卵がある



- フライパンの中に卵がある

今から文がでます。
見逃さないように読んで理解してください。

26

28

文とイメージ2

- 2種類の文は、「冷蔵庫/フライパン」以外は全て同じ

- しかし、同じ「卵」という言葉から異なる視覚的なイメージが自動的に作られる

冷蔵庫の中に卵がある

フライパンの中に卵がある

27

29

身体化認知 (Embodied cognition)

- 言語を理解するということは、その言語が記述する内容を疑似的に体験すること (Zwaan, 2004)
 - 疑似体験をするために、言語理解者自身の脳活動、身体活動が必要 (Zwaan & Kaschak, 2008)
 - 他者の運動を観察している際に、自分は運動していないにも関わらず、自身の運動関連の神経活動が起こる (Rizzolatti et al., 1996)

32

Zwaan, Stanfield, & Yaxley (2002)

- 42名の大学生が対象
- PC画面上で文章を黙読した後で、表示される画像の物体の名前を口頭で言う課題を行う
 - たとえば卵の画像が表示されたら「たまご」と言う
- 提示される画像は、文の内容と (a) 一致するもの、(b) 一致しないもの、(c) どちらとも言えないもの、の3種類だった

30

運動に関する単語を聞くと、頭の中ではどうなっているか？

33

結果

- 名前を言うまでにかかった時間
 - 一致くどちらでもないく不一致
- 一致している時は、自動的にその画像のイメージが浮かんでいるため速かったと考えられる

表2 Zwaan, Stanfield, & Yaxley (2002) を変更したもの

	一致	不一致	どちらでもない
名前を言うまでにかかった時間 (単位はミリ秒)	605	638	617

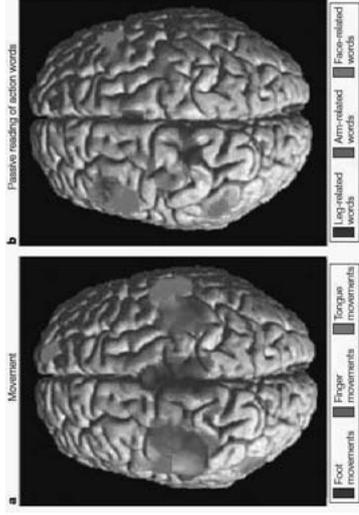
31

文献

- Ausubel, D. P. (1960). The use of advance organizers in the learning and retention of meaningful verbal material. *Journal of Educational Psychology*, 51, 267-272.
- Bransford, J. D. & Johnson, M. K. (1972). Contextual prerequisites for understanding: some investigations of comprehension and recall. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 4, 717-726.
- Kintsch, W. (1998). *Comprehension: A paradigm for cognition*. New York: Cambridge University Press.
- 米田 英嗣 (2010). 物語理解と社会認知神経科学 楠見 孝 (編) 現代の認知心理学 第3巻「思考と言語」北大路書房, 270-290.
- 楠見 孝 (2001). 比喩の理解. おもしろ言語のラボトリー 森 (編). Pp. 155-171.
- Rizzolatti, G., Fadiga, L., Gallese, V., & Fogassi, L. (1996). Premotor cortex and the recognition of motor actions. *Brain Research: Cognitive Brain Research*, 3, 131-141.
- Uchiyama H, Saito DN, Tanabe HC, Harada T, Seki A, Ohno K, Koeda T, Sadaoto N (2012) Distinction between the literal and intended meanings of sentences: A functional magnetic resonance imaging study of metaphor and sarcasm. *Cortex*, 48:563-583.
- Zwaan, R. A. (2004). The immersed experient: Toward an embodied theory of language comprehension. In B. H. Ross (Ed.) *The psychology of learning and motivation*, Vol. 44 (pp. 35-62). Academic Press, NY.
- Zwaan, R. A., & Kaschak, M. P. (2008). Language in the brain, body, and world. In P. Robbins, & M. Aydede, (Eds.) *The Cambridge Handbook of Situated Cognition*. (pp. 368-381). Cambridge University Press, Cambridge, UK.
- Zwaan, R. A., Stanfield, R. A., & Yaxley, R. H. (2002). Language comprehenders mentally represent the shapes of objects. *Psychological Science*, 13, 168-171.

36

Hauk, Johnsrude, & Pulvermuller (2005)



実際に運動をしているときと、運動に関連する単語を聞いているときの脳活動がオーバーラップ
 実際の運動と、運動に関連する単語の処理は同様の神経基盤

言語における身体化認知まとめ

- 言語理解は、抽象的なシンボルをイメージすることではなく、実体を持ったイメージを構築すること
 - 具体的な知覚イメージ、運動イメージ
- 言語の理解も、学際性が重要に
 - fMRI (functional Magnetic Resonance Imaging; 機能的核磁気共鳴画像法) の普及



大学院生のための 教育実践講座 2013

PFF Workshop for Graduate Students

～ 大学でどう教えるか～

開 講 日：平成25年 8月5日(月)
場 所：京都大学百周年時計台記念館 2階
参 加 費：2,000円(昼食代を含む)

※当日、受付で徴収します。
なお、キャンセルする場合は、7月31日までにお知らせください。
それ以降は、参加費を徴収させていただきます。

参 加 人 数：60名程度(Basic: 40名程度、Advanced: 20名程度)
※申込が多い場合は、先着順になります。

申 込 締 切：平成25年7月12日(金)
※なお、参加者には追って事前アンケートを送付します。

申 込 方 法：参加申込書をダウンロードし、
E-mailまたはFAXにてお申し込みください。
※京都大学HPのトップページ右横にリンクバナーがございます。
<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja>

申込・問い合わせ先：京都大学学務部教務企画課教育企画掛
E-mail: ksui-kkikaku-kyom02@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
T E L: 075-753-2528 (内線2528)
F A X: 075-753-2485 (内線2485)

この講座は、将来、大学教育に携わることを希望している本学の大学院生(PD、研修員などを含む)のために、ファカルティ(大学教員)へと自己形成していききっかけとなる場を提供するものです。

今年で第9回となりますが、「大学教育を考える視点が広がった」「院生同士のネットワークができた」と毎回好評を得ています。Basic(初参加者向け)とAdvanced(本講座参加経験者・大学授業経験者向け)の2コースを設けました。

なお、どちらの講座もプログラムの全てに参加した院生には、総長の修了証が授与され、就職に向けての1ステップになります。

(プログラムの詳細は裏面をご覧ください。)

主催:京都大学FD研究検討委員会
共催:高等教育研究開発推進センター

大学院生のための教育実践講座2013

～大学でどう教えるか～

プログラム

BASIC

- 9:45～ 受付
- 10:00～ 開会式
 - 挨拶
 - FD研究検討委員会委員長 宮川 恒
 - 趣旨とプログラムの説明
 - 高等教育研究開発推進センター准教授 酒井 博之
- 10:20～ セッション1
 - グループ討論1
 - (自己紹介)「大学の授業をどう思うか」
- 11:20～ セッション2
 - ミニ講義1
 - 「大学授業の現在と未来」
 - 高等教育研究開発推進センター教授 飯吉 透
- 11:45～ セッション3
 - ランチと自由討論
- 13:00～ セッション4
 - グループ討論2
 - 「大学の授業で教師に求められるもの」
- 14:00～ セッション5
 - ボディワーク
 - 「他者とのつながり・自分とのつながり」
 - 京都文教大学教授 濱野 清志
- 15:20～ 休憩
- 15:30～ セッション6
 - ミニ講義2
 - 「大学授業の現場から見たプレFD」
 - 大阪体育大学講師 吉沢 一也
- 15:55～ グループ討論整理
- 16:30～ セッション7
 - 全体討論
 - 「大学で教えるために」
- 17:30～ セッション8
 - ミニ講義3
 - 「大学で教えるということ」
 - 高等教育研究開発推進センター教授 大塚 雄作
- 17:55～ 閉会式
 - 挨拶・修了証授与
 - 京都大学理事 淡路 敏之
- 閉会式終了後～18:30
 - 情報交換会

ADVANCED

- 9:45～ 受付
- 10:00～ 開会式
 - 挨拶
 - FD研究検討委員会委員長 宮川 恒
 - 趣旨とプログラムの説明
 - 高等教育研究開発推進センター准教授 酒井 博之
- 10:20～ セッション1
 - 全体討論1
 - (自己紹介)「教える側からみた大学授業」
- 11:45～ セッション2
 - ランチと自由討論
- 13:00～ セッション3
 - 模擬公開授業・検討会
- 15:20～ セッション4
 - グループ・全体討論
- 17:55～ 閉会式
 - 挨拶・修了証授与
 - 京都大学理事 淡路 敏之
- 閉会式終了後～18:30
 - 情報交換会

留意事項

1. Basic講座では、ボディワークを行いますので、動きやすい服装・靴で参加してください。
2. 昼食、情報交換会等の飲食代は参加費から準備します。
3. 過去の講座の雰囲気は右記のURLをご参照ください。

<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/>

Ⅱ-3. 資料3

問3 大学教員になることをどの程度希望していますか。(あてはまる番号1つを〔 〕内にご記入下さい)〔 〕

- ① 全く希望していない ② あまり希望していない ③ どちらともいえない
④ やや希望している ⑤ 非常に希望している

問4 どうして、この講座を受講しようと思いましたか?(あてはまる番号1つを〔 〕内にご記入下さい)

問4-1.大学での教育活動に関心があるから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問4-2.大学で教えるための知識・技術を身につけたいから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問4-3.大学教育について考える機会が欲しかったから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問4-4.実際に教育に関わる中で悩んだり困ったりしたことがあるから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問4-5.他の大学院生が大学教育についてどのような考えをもっているか知りたから〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問4-6.他の大学院生と、大学教育について意見交換したかったから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問4-7.他の大学院生と人間関係をつくりたかったから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問4-8.今後自分が大学教員として就職する際に有利になると思ったから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問4-9.その他の受講動機がある方は、欄内に自由にご記述ください。

【これ以降は、Advanced コースの参加者のみお答え下さい】

問5 「模擬公開授業・検討会」では、参加者のうちどなたかに実際に模擬授業を行っていただく予定です(1授業につき概要説明10分+実演20分程度)。あなたがその授業者となり、模擬授業を行っていただくことは可能ですか？(あてはまる番号1つを〔 〕内にご記入下さい。②の場合は、懸案事項を()内にご記入下さい) []

- ① 行うことは可能
- ② 条件によっては可能(懸案事項:)
- ③ 行うことは不可能

問6 いずれかの教員免許をお持ちですか？(あてはまる番号すべてを〔 〕内にご記入下さい。④の場合は、詳細を()内にご記入下さい)
[]

- ①小学校 ②中学校 ③高等学校 ④その他() ⑤なし

問7 小・中・高等学校での指導経験はありますか？(あてはまる番号すべてを〔 〕内にご記入下さい)
[]

- ①小学校であり ②中学校であり ③高等学校であり ④なし

問8 塾・家庭教師などでの指導経験はありますか？(あてはまる番号1つを〔 〕内にご記入下さい) []

- ①あり ②なし

問9 学部生時代に受けた授業はどの程度満足なものでしたか？(あてはまる番号1つを〔 〕内にご記入下さい) []

- ①まったく満足していない ②あまり満足していない ③どちらともいえない
- ④まあまあ満足している ⑤非常に満足している

Ⅱ-3. 資料3

問10 あなたが考える大学教育における問題点について、欄内に自由にご記述下さい。

問11 研修会当日に議論したいテーマについて、欄内に自由にご記述ください

【参加にあたってのお願い】

- 研修会当日までに、自分が大学で授業を行う上で抱えている問題点(授業経験のない方は、問題になると考えられる点)と、それに対する対応策について整理しておいてください。
- また、自分が授業を行う上で参考をしている文献などがありましたら、当日ご持参頂ければと思います。

ご協力ありがとうございました。

「大学院生のための教育実践講座－大学でどう教えるか－」

事後アンケート（Basic コース）

京都大学 FD 研究検討委員会
高等教育研究開発推進センター

このアンケートは、来年度の本講座の実施と改善に役立てるために実施するものです。記名式になっていますが、結果の公表は、統計量あるいは無記名での自由記述の内容紹介にとどめ、個人が特定されることはありません。また、上記の目的以外に使用することは決してありません。ご回答のほどよろしくお願い申し上げます。

お名前： _____

ご所属： _____

あてはまるもの1つに○をつけて下さい

ご身分：

■大学院生の方

課程 ① 修士 ② 博士

学年 ① 1年 ② 2年 ③ 3年 ④ 4年以上

■大学院生以外の方

① PD ② 研究員 ③ その他 ()

以下の設問に対して、もっともあてはまる番号に1つだけ○をつけ、空欄内は自由に記述してください。

問1 本講座への参加満足度は全般的にどのようなものですか。

5. 非常に満足している 4. まあまあ満足している 3. どちらとも言えない
2. あまり満足していない 1. 全く満足していない

その理由をお書き下さい。

裏面もご回答ください

II-3. 資料4

問2 下記の(1)～(3)についてどの程度有意義であったか、お答え下さい。

- | | | |
|-----------------|------------------|--------------|
| 5. 非常に有意義だった | 4. まあまあ有意義だった | 3. どちらとも言えない |
| 2. あまり有意義ではなかった | 1. まったく有意義ではなかった | |

- | | | | | | |
|--------------|---|---|---|---|---|
| (1) グループ討論 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| (2) ミニ講義 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| (3) ボディークワーク | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

問3 今後に向けて改善した方がいいと思われる点がありましたら、自由にお書き下さい。

問4 本講座では、Basic コース経験者や大学授業経験者を対象とした Advanced コースを設けています。来年度、Advanced コースが開講されるならば、参加したいと思いますか。

- | | | |
|--------------|---------------|--------------|
| 5. 強くそう思う | 4. そう思う | 3. どちらとも言えない |
| 2. あまりそう思わない | 1. まったくそう思わない | |

問5 来年度も本講座の参加案内の送付を希望されますか。

1. はい 0. いいえ

問6 今後も継続して大学の授業改善について考える次のようなコミュニティがあれば、参加したいと思いますか。

(1) SNS などを利用し、オンライン上で情報・意見交換をするコミュニティ

1. はい 0. いいえ

(2) 実際に集まり、対面で情報・意見交換をするコミュニティ

1. はい 0. いいえ

ご協力ありがとうございました

「大学院生のための教育実践講座－大学でどう教えるか－」

事後アンケート（Advanced コース）

京都大学 FD 研究検討委員会
 高等教育研究開発推進センター

このアンケートは、来年度の本講座の実施と改善に役立てるために実施するものです。記名式になっていますが、結果の公表は、統計量あるいは無記名での自由記述の内容紹介にとどめ、個人が特定されることはありません。また、上記の目的以外に使用することは決してありません。ご回答のほどよろしくお願い申し上げます。

お名前： _____

ご所属： _____

あてはまるもの1つに○をつけて下さい

ご身分：

■大学院生の方

課程 ① 修士 ② 博士

学年 ① 1年 ② 2年 ③ 3年 ④ 4年以上

■大学院生以外の方

① PD ② 研究員 ③ その他 (_____)

以下の設問に対して、もっともあてはまる番号に1つだけ○をつけ、空欄内は自由に記述してください。

問1 本講座への参加満足度は全般的にどのようなものですか。

5. 非常に満足している 4. まあまあ満足している 3. どちらとも言えない
2. あまり満足していない 1. まったく満足していない

その理由をお書き下さい。

裏面もご回答ください

Ⅱ-3. 資料5

問2 下記の(1)～(2)についてどの程度有意義であったか、お答え下さい。

5. 非常に有意義だった 4. まあまあ有意義だった 3. どちらとも言えない
2. あまり有意義ではなかった 1. まったく有意義ではなかった

(1) 模擬公開授業・検討会・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5 4 3 2 1

(2) グループ討論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5 4 3 2 1

問3 今後に向けて改善した方がいいと思われる点がありましたら、自由にお書き下さい。

問4 来年度も本講座の参加案内の送付を希望されますか。

1. はい 0. いいえ

問5 今後も継続して大学の授業改善について考える次のようなコミュニティがあれば、参加したいと思いますか。

(1) SNS などを利用し、オンライン上で情報・意見交換をするコミュニティ

1. はい 0. いいえ

(2) 実際に集まり、対面で情報・意見交換をするコミュニティ

1. はい 0. いいえ

ご協力ありがとうございました

II-4. 新任教員教育セミナー 2013

1. プログラムの目的と経緯

1-1. 全学的な取組として

京都大学では、全学的なFD活動として、毎年9月に「全学教育シンポジウム」が開催されている。このシンポジウムには、総長・理事をはじめ200名あまりの教職員が参加し、主に教養・共通教育に関するテーマについて情報提供や意見交換が行われている。だが、教育経験別教育研修としては、大学院生対象の「大学院生のための教育実践講座」（II-3参照）が実施されているのみで、全学的な教員向けの研修は平成21年度まで行われていなかった。

一方、京都大学の第2期中期目標・中期計画では、学内の取組事項として下記の項目があげられている。

- ・FD研究検討委員会においてFDの現状分析を行い、情報の共有化を促進する。
- ・在学生、卒業生による授業評価の実施について検討する。
- ・部局FDへの支援を行う。
- ・院生・OD等を対象としたプレFDの普及を行う。
- ・初任者研修を実施する。
- ・ワークショップ等による情報の共有化を図る。

工程では「初任者研修」は平成23年度から実施することとなっていたが、平成22年度より試行的に実施することになり、センターが学務部教務企画課の支援を受けながら企画・運営にあたることになった。本年度は5回目である。

1-2. 目的と名称

「初任者」とは、ふつう「採用の日から1年間」以内の教員を指し、初等・中等教育では、初任者研修が法律で義務づけられている（教育公務員特例法第23条）。大学では初任者研修は義務づけられてはいないものの、近年、初任者研修を実施する大学は増えている（関西地区FD連絡協議会の「FD共同実施ワーキンググループ」は初任者研修の共同実施を行っている。III-3参照）。

しかし、初等・中等教育の「初任者」が教育実習以外にはほとんど教壇に立った経験がない教員であるのに対して、大学教員の場合は、その大学で採用されて1年間以内であっても、他の大学での教育経験をもっている場合が少なくない。したがって、初等・中等教育の教員と大学教員とでは、自ずと初任者研修の目的も異なってくる。とりわけ、本学の場合は、新規採用教員の中に、長い教育経験を有する教員も少なくないことが予想された。そこで、私たちは、「初任者」に代えて「新任教員」という呼称を用いることにし、その研修の目的を、＜京都大学らしい教育とはどのような教育か＞を考え、＜そうした教育を行うためにどのような教育サポートがあるのか＞、＜大学・部局や教員はどんな教育課題を抱え、それにどう取り組んでいるか＞を知ること、とした。これは、「本学の理念や目的に呼応したファカルティ・ディベロップメント（FD）」という中期目標の内容にも合致している。

本年度のプログラムは、全学のFD・教育改善の紹介（セッション1）、京大生の学習の実態

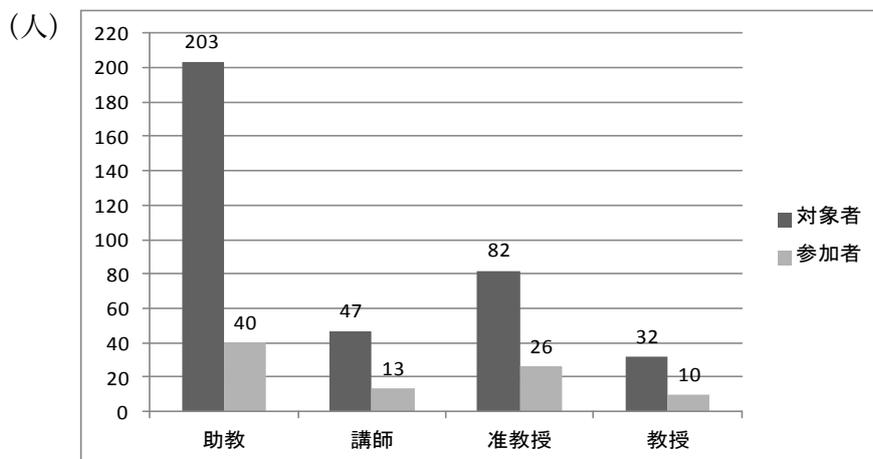
の報告(セッション2)、京大の教育的取組の紹介(セッション3)、京大の授業実践の紹介(セッション4)、各教員の試みの紹介とグループ討論(セッション5)、グループ討論の全体での共有(セッション6)、という6つのセッションで構成した(2-1「開催日時とタイムテーブル」参照)。全学、部局、個々の教員という異なるレベルでの教育的取組を、ミニ講義や討論などを通じて理解してもらうことを意図したものである。前期終了後の9月に実施することで、前期の教育経験をふまえてそのふり返りの機会となることもめざした。

1-3. 対象者と参加者

新任教員といっても、職階、雇用形態などきわめて多様である。また、この研修は教育目的に限定されているので、研究を目的に雇用された教員については除外する必要がある。そこで、本研修の対象となる新任教員を、「平成24年度の本セミナー実施以降、本学に採用されて、正規科目を担当している者」と定義した上で、学務部教務企画課経由で、各部局に対して該当者のリストをあげてもらおうよう依頼した。

その結果得られた対象者(計364名)の分布を、当日の参加者(計89名)の分布と並べて、(1)職階別、(2)新採・昇進別、に表すと以下ようになる。職階別では助教の人数が最も多い。また、新採・昇進別では新採の方が多かった。昇進については、それまでの職階では教育活動に従事していなかったが、昇進によって従事するようになった者が含まれていると考えられる。

(1) 職階別



■内訳

□対象者 (計364名)

助教：203名(助教43名、特定助教106名、大学院担当助教54名)

講師：47名(講師12名、特定講師15名、大学院担当講師20名)

准教授：82名(准教授16名、特定准教授29名、大学院担当准教授37名)

教授：32名(教授5名、特定教授8名、大学院担当教授19名)

□参加者 (計89名)

助教：40名(助教10名、特定助教12名、大学院担当助教18名)

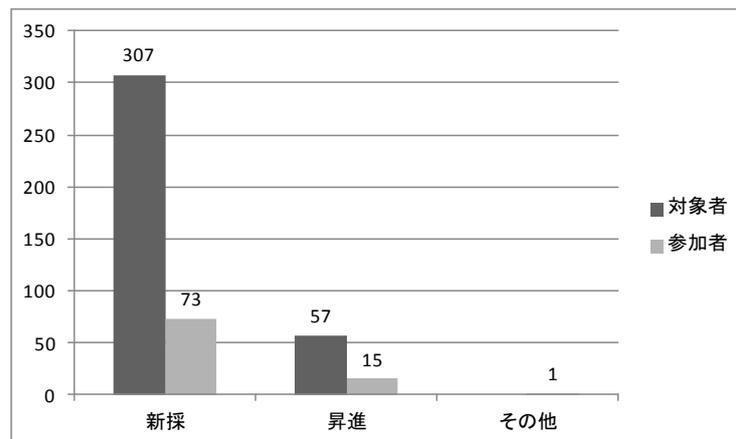
講師：13名(講師6名、特定講師2名、大学院担当講師5名)

准教授：26名(准教授9名、特定准教授5名、大学院担当准教授12名)

教授：10名(教授2名、特定教授2名、大学院担当教授6名)

(2) 新採・昇進別

(人)



■内訳

□対象者 (計 364 名)

新採：307 名、昇進：57 名

□参加者 (計 89 名)

新採：73 名、昇進：15 名、その他：1 名

2. プログラムの実際

2-1. 開催日時とタイムテーブル

開催日時：2013 年 9 月 10 日 (火) 13:00～18:00

開催場所：京都大学時計台百周年記念館 国際交流ホール

参加人数：89 名

タイムテーブル

13:00	開会式 (司会・進行：高等教育研究開発推進センター教授 松下 佳代) 開会挨拶：京都大学総長 松本 紘 趣旨説明：高等教育研究開発推進センター長 大塚 雄作
13:10	セッション1：ミニ講義1「京都大学のFD・教育改善」 FD 研究検討委員会委員長 宮川 恒
13:25	セッション2：ミニ講義2「京大生の学習の実態」 高等教育研究開発推進センター准教授 溝上 慎一

13:45	<p>セッション3：ミニ講義3「京大の教育的取組」 「教養・共通教育」国際高等教育院教育院長 北野 正雄 「京大の教育の国際化戦略」国際交流推進機構機構長 森 純一 「ICT利用による教育支援」高等教育研究開発推進センター教授 飯吉 透 「京都大学の教育サポートリソース」高等教育研究開発推進センター助教 田中 一孝</p>
14:40	<p>セッション4：ミニ講義4「私の授業」 人間・環境学研究科教授 鎌田 浩毅</p> 
15:10	休憩
15:25	<p>セッション5：グループ討論 「京大でどう教え、指導するか」</p> 
16:55	休憩
17:10	<p>セッション6：ラップアップ</p> 
17:45	<p>閉会式 閉会挨拶：高等教育研究開発推進センター長 大塚 雄作</p>

2-2. セッション5 グループ討論のテーマ

セッション5では、新任教員が本学の授業や指導で直面しやすい問題として、以下の7つのテーマを掲げた。参加者は、事前にこの中から自分の希望するものを選択し、テーマごとに分かれてグループ討論を行った。各グループとも、そのテーマについて経験を有する学内の教

員から事例紹介・情報提供が行われ、ファシリテータの司会進行によって自由に議論が展開された。

テーマ	事例紹介・情報提供	テーマの説明
1 学生を授業に巻きこむ—「対話を根幹とした自学自習」を本気で考えてみる—	平竹 潤教授 (化学研究所)	学生をアクティブに授業に参加させ、「対話を根幹とした自学学習」を促すにはどんな工夫ができるだろうか。単位のためでもなく、必須だからでもなく、ただひたすら学問の面白さと熱い向学心に導かれて、みずから進んで授業に参加し、授業外での自学自習に精を出す真の学びを実現するためには、教員はどうしたらいいのだろうか？
2 学生の多様化にどう対応するか？	須田 淳准教授 (工学研究科)	京大生の中にも、受験産業にどっぷりつかったために本当の勉強のしかたが分からない学生や、自分の選んだ専門分野に対する興味の希薄な学生もいる。どんな学生に照準を合わせ、そこからどう引き上げていくか。
3 英語による授業をどう行うか？	天野 洋教授 (農学研究科)	留学生を含む英語による授業では、日本人学生に対する日本語による授業とは異なる工夫が必要になる。それはどんな工夫か。
4 学生の思考力を鍛える	楠見 孝教授 (教育学研究科)	学生が4年間で身につけるものは、専門分野の知識・スキルだけではない。批判的思考や分析的推論、問題解決などの思考力を鍛えることも、大学教育の目標である。全学共通科目や専門科目を通じて、どのように思考力を鍛えることができるだろうか。
5 困難を抱えた学生に向き合うには	上床輝久助教 (健康科学センター)	修学上、研究指導上の不適応を起こした学生・院生に対し、教員はどう向き合えばよいのか。また、対応が必要なのはどのような場合なのか。
6 博士課程院生のキャリア形成支援	梅田幹雄教授 (学生総合支援センター・キャリアサポートルーム)	欧米と同様、わが国でも文系・理系を問わず、博士課程修了者が社会で広く活躍することが求められつつある。博士課程院生に対して、アカデミック・ポスト以外のキャリアも含む多様なキャリア形成を支援していくにはどうすればよいだろうか。

2-3. セッション6 ラップアップ（各グループではどのような議論が行われたのか）

セッション5のグループ討論の内容は、セッション6で報告され、全体で共有された。以下は、その記録を元に報告者によって作成された概要である。

■テーマ1「学生を授業に巻き込む—『対話を根幹とした自学自習』を本気で考えてみる—」

事例紹介・情報提供：化学研究所教授 平竹 潤

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター教授 松下佳代

私たちのグループでは、京大化研の平竹先生にポケットゼミのお話を伺いました。どのようなお話だったかを簡単に報告させていただきたいと思います。

私たちのグループの中で出てきた最初の問題点は、まず、学生とコミュニケーションを図る方法をどうすればいいかということでした。先生のお答えは、「王道はない。ガチンコ勝負である。人と人の交流だから、そこは距離を縮めていく」というものでした。確かにテクニックではなく、人間と人間の付き合いなのだと、あらためて目からうろこが落ちた次第です。

先生のご専門は有機化学で、先生のゼミには、ポケットゼミにしては多い約30人の学生さんが受講するのだそうですが、そこで実際に目の前で化学物質を見せて、その粘性や特徴などについて、ものを見てもらって、触れてもらって、それにまつわる話をして、理解を深めるということをされているそうです。確かに実物を見せるのは一つの方法だと思います。一番感

銘を受けたのは、毎回の授業のときに、必ず教科書の演習問題をやってもらって、そのレポート添削を非常に丁寧にされているということです。添削の内容を見ますと、good、excellentとか、やる気の起きるようなことも書き加えて、学生にフィードバックしておられることがわかりました。

一方で、レポートの添削は非常に時間と労力がかかり、それには先生も苦労されているようです。大学院生だけでなくポケゼミの卒業生にも依頼されているようですが、それは添削する側にとっても勉強になっている面があるということでした。

最後に、教育と研究をどう両立するかという問題について議論になりました。平竹先生からは一つの案として、教育と研究の負担を教員によって変えるという提案があったのですが、それには対しては参加者から異論が出ました。やはり研究をしている人が教育をすべきである、教員の教育負担を減らすにはもっとTAを活用するというような方法もあるのではないかと、いった意見が出されました。そこは多分、皆さん一番頭の痛いところだと思います。グループでも結論が出なかったのですが、引き続き考えていきたいと思いました。

このあたりでまとめとさせていただきます。ありがとうございました。

(報告者：人間環境学研究科准教授 吉田鉄平)

■テーマ2「学生の多様化にどう対応するか？」

事例紹介・情報提供：工学研究科准教授 須田 淳

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター准教授 溝上慎一

われわれは学生の多様化にどう対応するかというグループでした。多様化という言葉については、本来学力低下が問題なのですが、よくできる学生さんもいらっしゃるからということで、多様化という言葉になったという最初の話し合いがありました。

その内訳は、取りまとめをしていただきました電子工学科の須田先生によりますと、昔の京大生は上位3分の1、真ん中くらいの普通の京大生レベルが3分の1、下の方にあまり勉強しない3分の1がいるという組成でした。ところが今は、昔合わせて6割ぐらいいた上の方の学生が、4割ぐらいに減っていて、その下の方にもものすごく受身で、本当に暗記だけで何とか入ってきたという学生が4割ぐらいいて、その下にまた全く勉強しない学生がいるという組み合わせになっているところから始まりました。

須田先生の電子工学科では、留年率が30%ぐらいの状態であるということで、これをどうしていくかということから話が始まりました。須田先生の個人的な取り組みにつきましては、配っていただいたレジュメの中にいろいろ書いてあるのですが、それとは別に学科として今どんな取り組みをしているかを最初に説明していただきました。特に注目すべきは、入ってすぐのモチベーションをどのように維持していくかということで、工夫されている点についていろいろお話しいただきました。

例えば、1回生の後期になってしまうのですが、研究室の取材、概論という名前が付いているのですが、そういう講義の中で研究室を訪問、取材して、その中身をプレゼンすることによって、各研究室でどういうことをやっているかを知らしめるということです。

それから、サマーキャンプということで夏休みに単位は付かない自由参加ですが、そこで実際に電気回路を組んだり、プログラムを組んだり、実際に飛行船を飛ばしたりということをして、自分のやっている勉強がこんなふうに役立つのだということを知らしめることによって、モチベーションを高め、それで後につなげていくというお話がありました。

それを踏まえましていろいろと議論があったのですが、一つ皆さんの意見としては、まずモチベーションをどう高めていくかということを経験する必要があるということで、それはやはり早い時期の方がいいということがありました。それから、もう一つは、30%が留年することなのですが、それは逆に言えば、留年した30%の学生が、1留ぐらいで壁を乗り越えて、京大生としての質を保って卒業していくということなので、それはそれでありなのではないかということです。そのような話でまとまりました。以上です。

(報告者：化学研究所准教授 登阪雅聡)

■テーマ3「英語による授業をどう行うか？」

事例紹介・情報提供：農学研究科教授 天野 洋

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター教授 飯吉 透

本日は英語による授業をどう行うかというテーマで、農学研究科の天野先生にご指導いただきました。英語による授業をどう行うかというテーマなので、参加された皆さんの多くは、自分が担当した講義に多くの留学生が参加することと、その留学生の背景として多くの国の出身の方で、さらに多くの知識と広いレベルの、深いレベルから浅いレベルまで多くの知識を持っていることを想定されていました。

ただし、実際に英語での講義が始まる直前まで、どれくらいの参加人数があるのか、どれくらいの英語力を生徒さんが持たれているのか、どれくらいの知識レベルなのかというのが結構不明な点が多いのです。そのため、英語の講義ならではの特別な組み立てや構成を考える必要があるということが前提としてありました。これを解決するためには、講義の事前の準備と講義の内容と、あとこれは私も意外だったのですが、さらに講義の後の対応を考える必要がある、ということでした。

事前の準備としては、留学生の方には連絡が届きにくいとか、事前にメールで通知しても返ってこないという事例が報告されているので、留学生と教員間の連絡役になれるような、留学生の中でもリーダーを一人見つけて、その人を介して連絡を通知する。連絡網を整備することが重要である。さらにその講義で行う内容のシラバスを作っておくことが重要だ、という意見が出ました。

講義の内容としては、ただでさえ留学生が多くて母語が違うので、論理のつながりや、メッセージデザインは特に重要で、写真やグラフをメインに活用して、当日使う資料の配布を徹底することが重要であるということでした。講義後の対応ですが、留学生は日本人学生と比較して、相対評価がどういう根拠で出されたのか、その公平性をとても重視するので、留学生にある評価を与えたときに、それがどういう根拠で出たのかを説明する必要があるというのが一番新鮮な知識でした。

最後に、留学生の方はヒアリングの能力が日本人学生に比べて高い、という話題が取り上げられました。その一方で、日本人学生はリーディングとライティングが得意なので、議論の場では留学生が結構発言するらしいのですが、日本人学生の英語力を高めるためには、オンラインでウェブの掲示板を利用してディスカッションすることが、日本人学生の英語力の向上につながるのではないか、という意見が出ました。さらに、理解度のチェックを行うために、実際に日本人学生と対話を行っていくことで、理解レベルをリアルタイムで探っていくことが重要だ、という結論になりました。

私自身の感想としては、留学生にしろ、日本人学生にしろ、相手との情報のやり取り、メー

ルなり議論なりでやり取りしたことを「見える化」つまり可視化して記録していくことが信頼関係の向上につながって、結果的に良い講義につながるのではないか、という結論になりました。以上です。

(報告者：医学研究科特定助教 鈴木裕輔)

■テーマ4「学生の思考力を鍛える」

事例紹介・情報提供：教育学研究科教授 楠見 孝

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター准教授 酒井博之

私たちのグループは、「学生の思考力を鍛える」というテーマで議論を行いました。講師の楠見先生によると、今回議論する思考力というのは学生の批判的思考であり、それをどのように鍛えるかということです。相手を批判するのではなく、自分を省みるような思考が、恐らく研究したいとか、社会のリーダーになっていく中で必要になっていくと思うので、私自身もそれが非常に重要だと思い、このテーマを選びました。

どうやら思考力を鍛えられるかについては、まず、「授業への参加」という意味で、学生に分からないところを質問してもらうことに関して多くの議論が行われました。皆さんもよくご承知と思いますが、学生の質問が少ないことが問題になっています。その上でどのように学生の質問を引き出すか。楠見先生は、授業の最後に質問カードを学生に渡し、次の授業でその質問に対して答えるということを行っているそうです。あるいは、「全体で質問は？」と尋ねても学生からの発言が期待できないので、授業の最後に時間を取って、2～3人のグループで話し合いをさせ、盛り上がっているグループにその質問を受講者全体に紹介してもらうことによって、活発な話し合いが進められていく事例を教えてくださいました。先ほどどこかのテーマで挙がりましたが、ネットを使った匿名だと意外と議論が加速することもあるので、そういった環境を活用するのもいいかという話もありました。

学生にいろいろディスカッションさせることによって、批判的な思考を鍛えることができるようですが、われわれのグループの議論では、理系の科目ではこれがなかなか難しいことが課題として挙げられました。理系は非常に知識が膨大ですから、知識を詰め込ませるための授業をしないといけない。例えば、医学部や薬学部などでは国家試験があるので、それに対応もしないといけない。理系では答えが一つの場合もあるので、なかなかディスカッションというわけにもいかず、どうしたらいいのか。理系では特に院生になってから、プレゼンをさせたり、研究費の申請書を書かせたりといったことで鍛えていくという側面があります。それでももちろん良いところもありますが。私の所属する工学系で感じていることとしては、批判的思考を教える前に修士で出て行ってしまふような問題がありますので、いかに早期に批判的思考を学生に教え、研究に興味を持ってもらえるのかを今後考えていかなければいけないと感じています。

議論の中で他に出てきた課題を紹介します。100人以上が受講するような大規模授業ではディスカッションはなかなか難しいのではないかと、それに対してどうすればいいのかということや、一般教養では思考力をどのように教えたらいのかという議論がありました。これらもなかなか難しい問題ですので、今後、持続的に考える必要があると感じました。私からは以上です。

(報告者：工学研究科助教 山本隆文)

■テーマ5「困難を抱えた学生に向き合うには」

事例紹介・情報提供：健康科学センター助教 上床輝久

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター教授 大塚雄作

参加者は11名でしたが、それぞれ問題意識を抱えて参加されていました。困難といいましても、身体的な問題とメンタルな問題があるのですが、今回はメンタルな問題を中心に取り扱いました。メンタルな問題も、いろいろなパターンでその症状が出てくる。症状というとな変ですが、不登校や退学、うまく講義に出て来ない、学校ではふらふらしているのに講義にだけは出て来ないといったいろいろなパターンで怠学が出てきたり、また学力上についていけなくなってくるということも一つの心理的な困難で、問題が表れていることも考えられます。また、行動上の問題として、抑うつ的になったり、衝動的になったり、また多く人の集まっているセミナーの場でいきなり他人の批判を始めるなど、他者を巻き込むような問題行動に出たりすることもあります。こういったものがどうして起きてくるのかというのは、先ほどもありましたが、学力の差があったり、また留学生の方の場合、言語の問題や環境の問題があったりもします。また、入学したばかりの方であれば、バーンアウト、受験教育から普通の大学教育についていけないというようなこともあります。また、もともとご本人が持っているような性格。また、一部には器質的な疾患、精神疾患、うつ病、統合失調症、その他には、パーソナリティ障害、自閉症スペクトラム障害のような問題もあるかもしれません。それにさらに環境が影響してきて、問題が表面化してくることになります。

上床先生に事例は（プライバシーの問題がありますので）仮想の事例で紹介していただきました。自閉症スペクトラム障害のスクリーニングで、自閉症スペクトラム指数というのがあるのですが、これを用いた調査では、京大の学生は5%ぐらいで（スクリーニングの）識別点を越えるというような報告もいただきまして、もともとそういった資質を持っている方は決して少なくない。ただ、知能が高い分だけそれをマスクしていることがあるかもしれません。事例が表面化した場合の面接などが特に討論に挙がったのですが、プライバシー、人権、心理状態も配慮して、とにかく傾聴を心がけ、相手との話し合いの基盤をきちんと作ってあげることが大事ではないかということになりました。

ただし、いきなりいなくなってしまう人にどう対応するかは非常に難しい問題で、入学したばかりで人間関係ができる前にいきなりいなくなってしまった場合には、対応がなかなか難しいことが挙げられました。実際、こういった事例に対しては、まず紹介する。相談するのはどこかということ、一つは健康科学センター、そしてカウンセリングセンターになりますので、そういったところときちんとつながりを持って連絡していくこと。また、特殊なケースの場合には、例えば保健診療所の神経科に相談する。また、神経科にいきなり行きにくい場合には内科から紹介してもらうという手もあるようです。とにかく、まずは、カウンセリングセンター、健康科学センターを気軽に利用する姿勢を持つことが大事かもしれません。

また、器質的な疾患を抱えている場合もあるため、適切な医療介入を本人のためにもしてあげることが必要かもしれません。これを見つけることも非常に大事なのですが、事例が起きてからの対応も大事ですが、事例が起きる前に何ができるか。やはり担当教官の普段からの目配りが大事であります。しかも、それは自分の思い込みだけで判断するのではなく、いろいろな助教、講師、准教授、いろいろな見守りの中で多数の目から多数の判断を持って目配りを行い、学業面だけではなく、生活面や複数のルートで学生を見守ることが重要ではないかと考えられます。以上です。

（報告者：医学研究科特定准教授 三宅秀彦）

■テーマ6「博士課程院生のためのキャリア形成支援」

事例紹介・情報提供：学生総合支援センター・キャリアサポートルーム教授 梅田幹雄
ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター助教 田中一孝

現在、博士学生の数はピークを過ぎた感はあるとはいえ、昔に比べ随分多いです。現在、博士卒業後の平均10人に1人がアカデミックにしか残れないという現状では、いかに各学生にマッチングした企業への就職をアドバイスできるかという能力が、われわれ教員に求められています。そこで、われわれが博士に進む、あるいは博士課程の学生に指導する上で、以下の五つの点に気を付けなければならないと考えました。

まず一つ目は、視野を広げてあげることです。博士に進もうと考えている学生は、アカデミックだけという人もいますので、まずは本当に何を研究したいのかを気付かせて、その上でアカデミックだけではなく企業の魅力などに気付かせることを指導するべきだと思います。場合によっては留学なども勧めて、価値観や判断力の向上を促すことも有用かと思えます。

二つ目は、社会が何を自分に求めているかを意識させることです。ある意味、やりたいことをやるだけというのはアマチュアの世界で、自分は何で社会へ売り込めるかということに気付かせることが、実はプロフェッショナルの世界への第一歩であることを気付かせることが大事かと思えます。

この一つ目、二つ目を語る上で気を付けなければならない点として、三つ目として注意すべきは、企業への就職に対して決して劣等感を植え付けさせてはならないということです。われわれ教員が普段から企業や社会のことをよく勉強して理解した上で、企業への就職がいかに魅力的であって、決してランクダウンではないことを意識して指導していくべきであると思えます。

四つ目は、就職後も学生さんとのつながりを意識して重視することです。具体的には卒業生のネットワークがあることを教え、卒業後も後輩たちの指導や評価に携わらせていくことによって、就職後もこのアカデミアとのつながりを感じさせるような状況を作ることが重要です。

最後に五つ目、これは個人的には一番大事かと思ったのですが、学生さんに、指導課程の間でどこかで自分の将来を決める折り合いを付けることを意識させることです。昔は教授から「おまえはどこそこに行け」と言われるとそこで就職が決まって、就職できたのですが、この多様化している現在では、学生さんが自己責任で自分の将来を決めないといけない状況です。どういう形で決めるのかは各分野で違うので、具体的には言えないのですが、折り合いをどこかで付けることを意識させて指導しなければならないと思えます。

また、残念ながら議論の途中で終わってしまったのですが、女性の研究者を指導していくことも気を付けなければいけないと思えました。女性には出産や育児がありますので、それぞれのニーズに合ったことを意識してよく指導しなければならないと思えました。今後そのような場面に遭遇した場合、京大にはキャリアサポートルームや、女性研究者支援センターがございますので、その有効利用を検討する必要もあります。ご清聴ありがとうございました。

(報告者：理学研究科助教 田中洋光)

2-4. 参加者からの意見・感想—事後アンケート結果より—

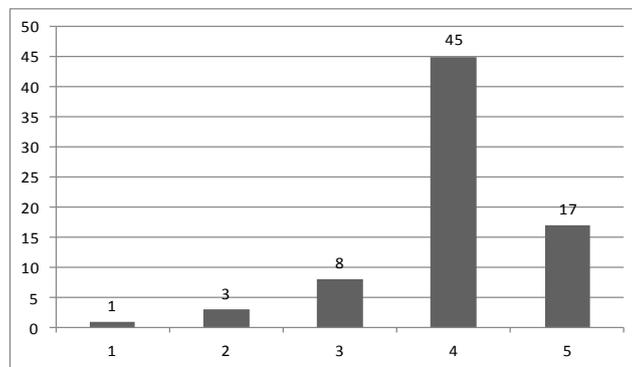
セミナー参加者に対して、セミナーに対する意見・感想を問う事後アンケートを行った。その結果、74名から回答が得られた。各質問に対する回答を以下に示す（質問によっては欠損値がある）。

(1) 各セッションの有意義度

各セッションの有意義度を「1. まったく有意義ではなかった」～「5. 非常に有意義だった」の5件法で尋ねた。平均で3.47～4.26となり、全体として高い評価を得ることができた。特にセッション4「私の授業」が4.26、セッション5「グループ討論：京大でどう教え、指導するか」が4.24と高い値を示した。

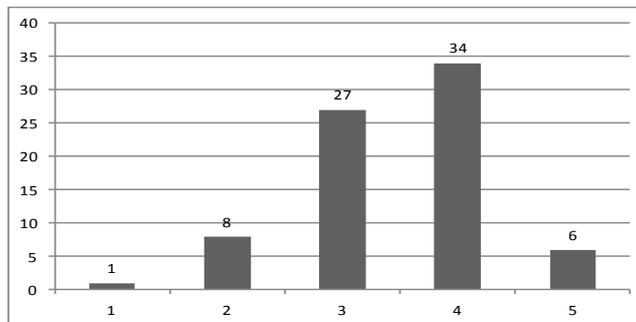
①全体の総合評価

平均値：4.00



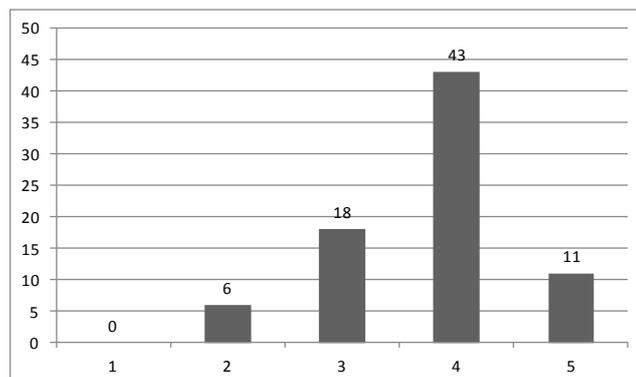
②セッション1「京都大学のFD・教育改善」

平均値：3.47



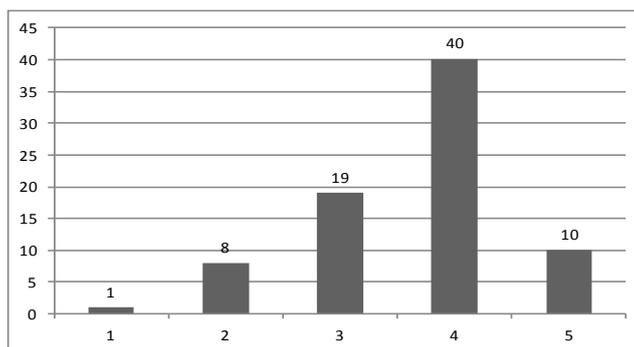
③セッション2「京大生の学習の実態」

平均値：3.76



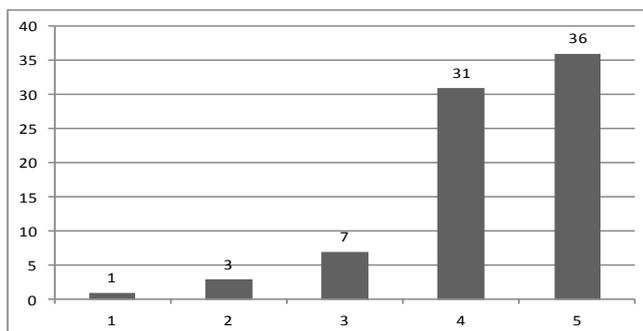
④セッション3「京大の教育的取組」

平均値 3.64



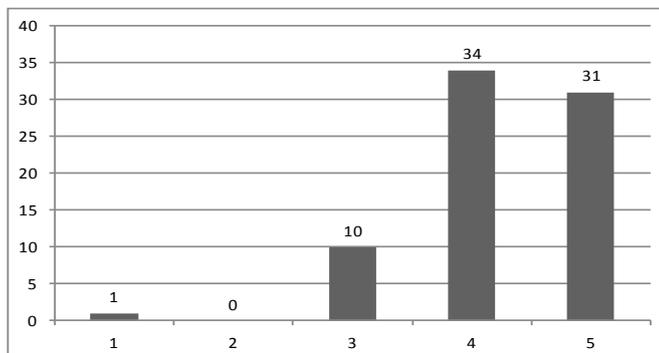
⑤セッション4「私の授業」

平均値：4.26



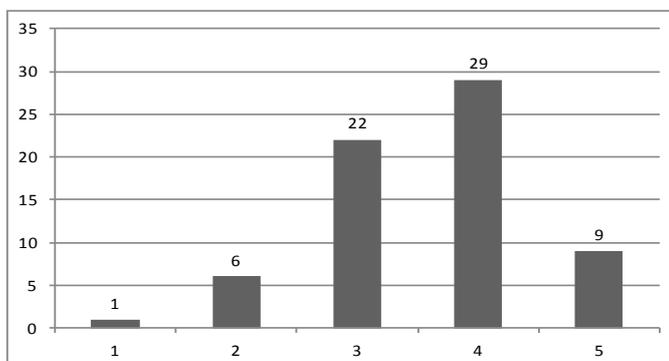
⑥セッション5「グループ討論」

平均値：4.24



⑦セッション6「ラップアップ」

平均値：3.58



(2) セミナーの開催時期について

セミナーの開催時期について「適切であった」「どちらともいえない」「適切ではなかった」のいずれかを選択してもらい、その理由を自由記述で尋ねた。その結果、「適切であった」が59名、「どちらともいえない」が13名、「適切ではなかった」が3名であった。ほぼ肯定的な評価が得られたが、適切ではなかったとする理由として以下の記述がみられた。

なかなかすべての参加者の要望に応えることは難しいが、来年度は夏期休暇の終わり近く（9月25日）に実施することとした。

【適切ではなかった理由】

- ・出張の少ない8月、1月、2月あたりのほうが助かる
- ・前期授業期間の直後の方が望ましいのではないのでしょうか（9月は学会が多いのでは？）
- ・早期に行うべき

(3) セミナープログラムに追加するとよいと思われる内容

自由記述をカテゴライズし、多いものから並べた。

特に多かったのは、授業の具体例をもっと紹介してほしい、研究と教育の両立のさせ方について議論したい、という意見である。後者は、本学のような研究大学では、出てくるのももっともな意見である。本セミナーは、研修内容を教育に限定しているので、研究について正面から扱うことはしないが、教育とのバランスについて取り上げるべき内容であろう。3番目に多い学生・院生の意見についても、直接あるいは間接（アンケート結果の利用など）で取り入れていきたい。

【授業の具体例（模範例、失敗例）、それについての議論】

- ・失敗例（事例）などを具体的に紹介していただくと参考になる。
- ・前半のミニ講義のうち、情報提供は資料配布のみにして、もっと実践的内容が増えると良い。アンケートの点の良い授業の実例など。
- ・「良い」「それほど良くない」授業などの動画を見ながら、具体例として例示していただくと良いかと思えます。
- ・新任教員による模擬授業とそれに対する議論などはいかがでしょう（「出前授業」のときの事前講習のような形式）。
- ・高評価・成功している授業・講義の様子を2～3つ見たい（会場で再現（実演）してもらいよりもビデオなどにしてダイジェストで見せてもらいと参考になると思う＜スケジュール的にも＞。コンテンツ制作室が手伝うと良いのでは？）。
- ・「私の授業」に相当する所を、違ったふうに授業に取り組まれている何人かの先生に話してもらえると対比できてなお良い。
- ・数学など板書をメインにした大人数クラスの（50名程度）模範授業やノウハウの教示。
- ・良い授業・悪い授業の実例の紹介。英語授業を普及させるなら、実際の授業を示して欲しい。
- ・授業に対する取り組み方をもう少し学べればよかったです。

【研究と教育の両立、研究に関する要素】

- ・教育と研究のバランス、研究への比重のかけ方は大学教員にとって非常に重要であります。このテーマに関するセッションがあればと思いました。
- ・「研究と教育」の両軸で考えると「教育」に特化したプログラムになっています。「研究」に関する要素も少しでもあると良いかもしれないと感じました。
- ・教育熱心な先生だけでなく、研究が特に秀でた先生の教育に対する考え方を聞きたい。
- ・教育と研究について

- ・研究と教育の関わり
- ・教育と研究のバランス

【学生・院生の声】

- ・学生の声聞くセッションもあればよいと思う。
- ・学生・院生のレスポンス／フィードバック
- ・学生自身からの声が聞けるとよいと思います。
- ・学生の意見

【教育支援体制の紹介・提案】

- ・教育の質を向上させるための支援体制の紹介。今回は時間調整で少なかった。
- ・大学の教育支援、例えば練習問題をQ&A形式でインターネット配信するなど
- ・ICTサービスを実際を使用してみるレクチャーがあると、認知度、利用率も上がるかもしれない。

【教養教育と専門教育の連携／学部教育と大学院教育の連携】

- ・専門教育と教養教育の位置づけや連携、専門教育に携わる先生方は教養教育なんかどうでもよいと考えておられるのでは？少なくとも、部局の教員は教養教育など自分たちには何のメリットもないと考えているのでは？
- ・学部教育と大学院教育の目指すものちがいや、その連携のあり方について京大の姿勢が知りたいです。

【学生の就職活動と学業の両立】

- ・学生の就職活動と学業の問題に関する内容があっても良いと思った。就活の時期が変わる等、学生の大きな関心の就職の問題と学業の両立などに、教員としてどうかかわっていくかも話を聞きたかった。
- ・京大生の進路（出口）の状況と変化

【グループディスカッション】

- ・もう少しグループDiscussion的なもの（ワークショップetc.）を入れてほしい。
- ・他のグループ討論にも参加できる時間がほしかった。

【他との比較】

- ・他大学教員及至その経験がある教員による京都大学以外での教育の現状紹介（京大の実状と対比すれば、啓発される点があるかもしれないので）
- ・国際比較

【その他】

- ・単位の合否状況や、留年率、教科書の選定など。
- ・基本的な教育システム（単位や必修など）がどうなっているのかの解説も他大学出身の教員にはあるとありがたい。
- ・まだまだFDや教養部など知らない単語があったので、参考資料として単語の説明、経緯を詳しく書いた資料が欲しかった。
- ・授業を初めて行う時の具体的な事務手続きの説明、例えばKULASIS上の手続きなど。
- ・セッション5の学生のメンタルヘルスに関する講義を全体で追加したら良いのではないかと思います。
- ・科学的エビデンスに基づいた教授法の解説
- ・民間・社会からの評価の受けとめ、反映（様々なaccreditation 制度への対応）
- ・逆になるべくコンパクトにして欲しい。項目が多すぎるので消化できない。

(4) 「セッション5：グループ討論」に追加するとよいと思われるテーマ

ここで一番多かったのは、(3) でもあがっていた「教育と研究の両立」であった。来年度は、このテーマを、全体セッション、グループ討論のどちらかで取り上げる必要があるだろう。研究分野で分けるという提案もあったが、本セミナーのような全学的な研修は、分野の壁をこえて交流することも一つの目的であるので、問題テーマで分けるという基本線は守りたい。

【教育と研究の両立について】

- ・教育と研究の両立について
- ・そもそも教育とは何か？ 何のためにするのか？ 研究と教育を有限のリソースでどのように両立するのか？
- ・教員の教育（の改善）にかかる時間をいかに確保するか。
- ・研究と教育の関わり
- ・教育と研究のバランス、あるいは教員のQOL 学生にどこまでサービスすべき？ 体がいくつあっても足りない？！
- ・研究・教育教官の分類、Teaching assistantの導入について

【授業の技法】

- ・大教室講義でのポイントorコツ → 学生を授業に巻き込むことが難しい授業もあると思うので、その対策やポイント。
- ・アナログか高度なICT活用か、どちらが京大にとっていいのかを議論したらいいのではないか。
- ・板書かPPTか。
- ・プレゼン技術

【研究分野／授業形式で分ける】

- ・テーマについてアイデアはありませんが、類似の関係学部でグルーピングすることも良いかと思います。
- ・研究分野ごとにわけてもいいんじゃないかと思いました。分野で、講義スタイルは全くちがうと思うので。
- ・追加ではないですが、分類を「授業」について小分類をしてテーマを設定した方がおもしろいのではないかと思います。初年次教育、専門教育、大学院教育としての授業など。

【学部・研究科間の交流】

- ・学部・研究科交流
- ・研究科どうしの交流について

【大学院教育】

- ・大学院生の教育
- ・今回は学部の授業についての討論だったので、大学院教育についての項目があってもよいと思います。

【その他】

- ・外国人教員との連携方法
- ・海外インターンシップ（短期・長期）
- ・大学における学生への評価のつけ方について。

(5) セミナーの改善点

相対的に多かった意見は、前半をコンパクトにする、後半を拡充する、資料を事前配布するであり、これらは互いに関連している。時間を長くする、回数を増やすという意見もあったが、実際に時間を長くしたり回数を増やしたりすれば、今度は不満も出るだろう。前半をコンパクト

トにし後半を拡充するというのは、限られた時間の中で改善できる点である。資料の事前配付については、事前配布したとしても参加者全員が読んでくるとは必ずしも期待できないのが難点である。

【前半（セッション1～3）をコンパクトにする】

- ・前半が眠かったです。すみません。
- ・セッション間で重複する内容や、細かすぎる組織機構の説明が多く、それらのセッションの目的が理解できなかった。（事務的な説明であれば、もう少し簡潔にまとめて欲しい。）
- ・セッション3の演題数が多すぎる。もう少しトピックを絞って、1つあたり、少なくとも20分以上充当し、スライドの要点を絞った方がよいのでは？ 鎌田先生のお話をもっと聞きたかった。
- ・ミニ講義の焦点を絞り、実用的なテーマを扱ってはどうか。
- ・セッション1～3は半分ぐらいにコンパクトにしてはどうか？
- ・ミニ講義1～3は座学だと思うが、理解を深めるのが難しいので何らかの工夫があるとよい

【後半（セッション4：私の授業、セッション5：グループ討論）を拡充する】

- ・課題解決は自分でやらねばならないが、うまくいった事例を紹介して頂けることは非常に参考になるので、この点での情報インプットをお願いしたい。
- ・教育法の実践的側面（セッション3の一部、4、5）をより拡充すべきではないか（制度的な側面はハンドアウト等でも紹介可能だから）。
- ・職位、経験がかけ離れている場合があり、短期間では活発な議論がしにくい。
- ・グループディスカッションの時間をもう少し長くした方がよいのではないかと思います。
- ・人数が多いので仕方ないが、双方向に対話できる時間がもう少しあってもよいのではないか（グループ討論の定員を減らす、等…）
- ・グループ討論をもっとしっかりやったほうがよいかも。話が発散してまとまらなかった。

【資料を事前配布する】

- ・（可能なら）テキストは事前に公開して頂いた方がよいかと思いました。
- ・昨年度実施セミナーの報告。記録集の事前配布。
- ・資料を事前にいただくと、話をきくだけ一方にならないかも。
- ・集団討論は事前に資料を配布、論点の提示（あるいは論点の集約のためのアンケート等）を行うともう少し有意義かと思った。
- ・資料を予め配布していただくと、一読してから参加できるので有難い。
- ・参加者に、事前に資料やみておくべきWebサイトを提示しておき、予習させておいて、システムetc.のところは、サツとおわってもらえたらと思います。

【時間を長くする】

- ・スケジュールをもう少し余裕を持った方がよいように感じました。
- ・もう少し時間を長めに設定されてもよいかもしれません。
- ・内容が盛りだくさんすぎて、個々のトピックスを深く議論し、十分に意見をたたかわせる時間的余裕がないように思う。半日ならもっとトピックスを絞り込むか、広いトピックスを扱うなら一日ぐらいのスケジュールで十分な時間を取れるようにした方がよいと思う。半日というのは中途半端で参加者は結局、ほぼ一日を費やしていると思う。
- ・時間の割に内容が多いので、余裕をもてると良いと考えます。

【部局、対象で分ける】

- ・全学のみでなく、部局毎の教育対策も必要では。
- ・分野や対象（学部、院生）によってアプローチが異なる側面があり、個別対応の部分をもっと深めることが出来るとよいと思う。

- ・授業といっても学部と大学院で対応が異なると思います。2つを分けて、学生の実状を教えてくださいと思います。

【講演時間を守る】

- ・「講演時間すら守れない」という低レベルの講演を長時間にわたって行なうのはどういうことなのか全く理解できない。ほぼ強制的に参加させるのであれば、講演者はリハーサルを何度も行ない、準備を万全にするべきだと考えます。授業も同じだと考えています。FDシステムを整える以前に、教員がやるべきことをきちんとすることが大事です。教育についてのセミナーで準備が全くできていない講演をきくのは皮肉なことです。次年度より自由参加、もしくは廃止すべきだと考えます（鎌田先生の講義はまあよかった。ただし特別すぎるので参考にはならないかと思います）。
- ・スピーカーは割り当てられた時間内で話をまとめるべき。講義でもこれは基本！時間スケジュールの乱れはみっともなく、全体の質感を低下させる。注意されるとよい。

【回数を増やす】

- ・時間が長く、生産性が下がる → 複数回としてはどうか
- ・年に1度ではなく、半期に一度が好ましいと思います。

【その他】

- ・セミナーの目的が最初、はっきりしなかったのが、具体的にした方がいいと思いました。
- ・ダイジェストになってしまうと残らない。
- ・参加対象者を絞るべきでは？ あまり目新しい内容は聞けなかった（先週の共通教育シンポにも参加しています）。
- ・医療職のため、平日長時間は厳しいので、土曜日にしては？
- ・“特定”という職でどのように教育に関わるか？
- ・データがもっとあると面白そうです。
- ・セッション2が唐突な気がしました。
- ・グループ討論（話題1）は、意欲の高い学生に対しての成功例をお話いただき、それなりに役立ったが、必ずしも一般的に成り立つ話ではなく、失敗例の話などがあると良かった。
- ・グループ討論で参加したテーマ以外にも興味があるものがありましたので、各グループ討論をコンパクトにまとめた上で、2、3このテーマに参加できればと思いました。
- ・「5. 困難を抱えた学生に向き合うには」のセッションは全体講義にしてもよいと思う。セッション5の中では1つだけ異質なものだと感じました。
- ・討論のセッションは、もう少し小さい部屋がよかった（テーマ4）
- ・グループ討論の内容を即座にまとめて、報告するのはなかなか難しく、効率が悪い気がします。

(6) セミナーのよかった点

多数をしめたのが、「私の授業」や「グループ討論」などを通じて、授業について参考になる知識や情報、自分の授業を作っていく際の気づきやモチベーションを得たという意見である。内容だけでなく、他分野や同じ職位の教員と交流できたという意見も多かった。(5)では「前半をコンパクトに」という改善点が出されていたが、一方で、京大全体の教育的取組、ICT活用、京大生の実態などが参考になったという声もあり、決してセッション1～3が不要というわけではないことがわかる。

【授業について参考になる知識や情報、気づきを得た】

- ・授業の準備、実施、レポート対応などていねいに対応しなければならないこと。人格のぶつかり合いだという点など、ディスカッションを通して理解すること（気づき）ができました。
- ・他の方の授業での取組を知れた
- ・「私の授業」のようなレクチャーがもう少しあると良いと思う。

- ・特にセッション4、5を中心に有意義な話が聞けて、今後の教育・研究に役立つ考えもいろいろと浮かびましたので、参加してよかったです。過去に「サイエンス・コミュニケーター・プロジェクト」に参加していたので、そのことも思い出しながら受け、よい機会となりました。
- ・今後授業をするうえで、大変参考になりました。
- ・今後の講義に役立てていきたいことを学ぶことができました。学生とのキャッチボールに関するさまざまな工夫を学ぶことができましたが、結局は熱意を伝えることが大事と思いました。
- ・自分の講義を改善していく方向がみえました。
- ・人を引きこむ話のヒントが得られたのではないかと思う。前任地が鳥取大だったが、教員の学生に対する期待や対応が実際の授業の前に聞いたのは良かった。
- ・まだ授業経験がないので、実際の現場を経験された先生方の話はとても説得力がありました。今後自身も携わっていく覚悟ができた…とまではいかなくとも、心構えができたので、たいへん有意義なセミナーでした。
- ・準備する上で参考になる点が多く、ためになりました。講義で使わせていただきたいネタetc、ヒントをもらいました。
- ・ベテランの教員の方々の経験、試行錯誤、スタイルなど聞いて非常に参考になった。
- ・後期からの（京大では初めての）授業準備についてモチベーションが上がりました。

【京大の教育の全体について知ることができた】

- ・京大の中で何か起きているのか、について知る機会はなかなかないので有益でした。
- ・京都大学の教育の方針が分かって良かったと思います。
- ・本学が置かれている状況や目指そうとしていることがある程度分かったこと。
- ・京大での教育の現状や授業運営の興味深い点が聞いた点（講師の先生方、運営に当たられた方々、どうもありがとうございます）
- ・京都大学としての方針、方向性について話を聞くことができたので良かった。
- ・京都大学の教育の理念がよく理解できました。
- ・一般論ではなく、京大個別、固有の問題がわかり、大変有意義であった。顧客ニーズや属性を理解できた。
- ・自分の所属以外に教育の現状を知ることができて良かったです。
- ・学内で教育についていろいろな取組がされているということが判っただけでも意義はあった。
- ・大学としての取組み、方向性が見えた。他学部・学科での教育スタイルが少し見えた。

【教員間で交流し、問題を共有できた】

- ・日頃、顔をあわせる機会のない先生方、特に若い教員の方と知り合う機会が得られた。共通の悩みを抱えていることもわかり、問題のありかが明瞭になった。
- ・他の新任教員がどのような問題意識を持っているのか共有できたのが良かった。
- ・同学年の新任助教と交流することができた。今後情報交換ができるコミュニティを得ることができた。
- ・問題を共有できたこと
- ・熱心に教育に取り組む先生方に会うことができた。
- ・本来交流のない学部の方と交流できる事
- ・他部局の方の教育に対する考え方を知れた。
- ・悩んでいたのが自分だけではなかったことがわかって安心しました。

【グループ討論が参考になった】

- ・グループセッションは自分の疑問点や、今後の指標に対するコメントがあり、参考になった。
- ・楠見先生の話提供は非常に勉強になりました。「批判的思考」が考える力の原点だと感じました。
- ・グループ討論で、まず学生を巻き込むには自分をさらけ出すことが大事と教わった。これは実際にやろうと思うと難しい面もあるが、非常に重要だと感銘を受けた。学生に教えるだけでなく、学生から得るものもあるはずという気持ちを持ち、そのためには体当たり（対話）が重要だと感じた。また学生が正当な評価を求めているということも参考になった。そのための一つの方法としてレポートは有力なツールだと共感した。研究と教育を両立させるためのサポートの充実は大学レベルで議論すべき課題だと思った。
- ・セッション5で興味あるテーマについてディスカッションすることができた → 課題、解決のヒントをた

くさん得ることができた

- ・グループ討論で、実際に授業をされている先生方の話をきけて大変参考になりました。
- ・グループ討論で他の方の意見が聞けた

【教育について考えることができた】

- ・教育についてじっくり考える時間がもてた
- ・改めて教育・院生指導の基本を振り返ることになったこと。
- ・普段、何となく考えているようであり深く考えていなかったトピックについて深く考える機会を得ることができた
- ・教育についてしっかりと考え直す機会だった。
- ・学部、学科を越えて、教育に対して同様の課題を抱えた先生方がいらっしゃることが理解できた上で、改めて教育とはというテーマを正面から考える機会となりました。
- ・教育についてゆっくり考える時間を持つことができた

【教育支援についての情報を得た】

- ・教育についてのリソースが豊富であることを再確認できた
- ・教育支援体制の全体像（の一部）が見えた。
- ・本学が有する教員をサポートするシステムにどのようなものがあるのか知れたこと。
- ・教員が有意義な授業をつくっていくために効果的なツールやシステムが複数あることを知ることができた。
- ・多くのシステムが働いている事がわかった事

【オンライン教育について知った】

- ・online free educationについて、もっとすべての教員で議論していく機会があるといいように思います（もっと世界と京大の現状を知りたいと思いました）。
- ・MOOCのことを知らなかったので、みてみようと思います。

【京大生の実態についてイメージできた】

- ・現在の京大生の実態についてイメージがわいて良かった。
- ・約10年ぶりに京大に戻ってきて京大生の雰囲気や学力が自分の学生の時とかなり変わっていたことから、今後の教育に不安がありましたので、このセミナーでの講義やディスカッションが大変参考になりました。

【いろいろな情報を得ることができ、認識が広がった】

- ・教育について、どういう課題があるか認識でき、大変参考になる意見や考える機会が得られ、大変有意義でした。
- ・今まで知らなかったいろいろな情報を得ることができた。どうもありがとうございました。
- ・様々な観点から情報を得ることができ、大変有意義でした。
- ・ラップアップセッションで他テーマの内容をきくことができ、勉強になった
- ・具体的な問題に対する対応を知れたこと
- ・他分野の状況を聴くことができた。技術的な提案を得られた。
- ・様々な分野の先生方が持つ問題と、それに対する取り組みを具体的に知ることができた。

3. 終わりに

満足度や自由記述をみる限り、〈京都大学らしい教育とはどのような教育か〉を考え、〈そうした教育を行うためにどのような教育サポートがあるのか〉、〈大学・部局や教員はどんな教育課題を抱え、それにどう取り組んでいるか〉を知る、という本セミナーの目的は概ね達成されたといえるだろう。

ただし、参加者の中に1名、非常に手厳しい回答を返してこられた方がおられた。京大のご出身で、京大と同様の研究大学にしばらく在任し、今年度京大に教授として着任された方である。そのような京大の学風をよく知り教育経験も豊富な教員には、本セミナーは得るところが少なかったかもしれない。本セミナーは、参加を義務づけてはいないが、部局によっては義務ととらえてところがあったようで、その参加者も義務といわれて仕方なく参加された、ということであった。セミナー終了後、学務部教務企画課の担当者と対処を議論し、来年度は、参加は義務ではないことを部局への依頼状で徹底することとした。

全体的に多かったのは、具体的な取組や授業について、事例を通して学びたいという意見である。来年度は、セッション1～3のミニ講義をいくつか削り、できれば、複数の授業事例を取り上げられるようにしたい。また、研究と教育の両立という京大の教員が避けては通れない問題についても、ぜひミニ講義かグループ討論で取り上げたいと思う。

本稿であげた課題や改善策をふまえながら、参加者が京都大学の教育について考え、語りあうことのできるよりよい機会としていきたい。



(松下 佳代)

II-5. 第9回工学部教育シンポジウム

京都大学教育研究開発推進センターは、京都大学工学部との学内連携の一環として、平成25年12月6日に開催された「第9回工学部教育シンポジウム」に参加した。当日は、本センターより、「メディアやテクノロジーを利用した大学教育の最新動向」というタイトルで話題提供を行うと共に、ディスカッションに参加した。以下、同シンポジウムのプログラムとセンターによる話題提供の発表スライドを資料として添付することで活動報告に代える。

1. 日時 平成25年12月6日（金）16時30分～
2. 場所 京都大学桂キャンパスBクラスター事務管理棟1階 桂ホール
(遠隔会場：吉田キャンパス工学部3号館北棟1階N1講義室)
3. プログラム

16:30～16:35	開会挨拶	工学部長 北野 正雄
16:35～17:05	話題提供 「メディアやテクノロジーを利用した大学教育の最新動向」	高等教育研究開発推進センター教授 飯吉 透
17:05～17:35	話題提供 「国際高等教育院における教養共通教育の改善に向けた検討状況」	副教育院長（法学研究科教授） 土井 真一
17:35～17:45	休憩	
17:45～18:45	「教育改善に向けて 私の授業－アンケート結果を受けて－」	①建築学科 高田 光雄 ②情報学科 永持 仁 ③工業化学科 中尾 佳亮
18:45～19:15	話題提供 「地球工学科国際コースにおける学部教育の現状と課題」	金 哲佑
19:15～19:30	「委員長総括」	新工学教育プログラム実施専門委員会委員長 西山 峰広
19:30～20:00	ディスカッション	

以下、飯吉講演スライド。

(飯吉 透)

メディアやテクノロジーを利用した大学教育の最新動向

飯吉 透, Ph.D.

京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授

京都大学 工学部第9回教育シンポジウム 2013.12.6

一人の教育者の情熱と狂気

サーカスのように夢中になれる大講義「基礎物理学」

「物理への愛のために」

FOR THE LOVE OF PHYSICS

from the End of the Rainbow to the Edge of Time—A Journey Through the Wonders of Physics

Walter Lewin
with Warren Goldstein

TEAL (Technology Enable Active Learning)

The Gallery of Teaching and Learning - KEEP Case Studies: Transferring Knowledge and Experience

John Belcher教授と仲間たちによる授業改革プロジェクト

複数の学科・学部が協力して教育イノベーションを推進



数学科で開発されたMathletsが、物理学のTEALでも利用されている。

Mathlets Mathlets Snapshot

教育イノベーションは、一日にして成らず！

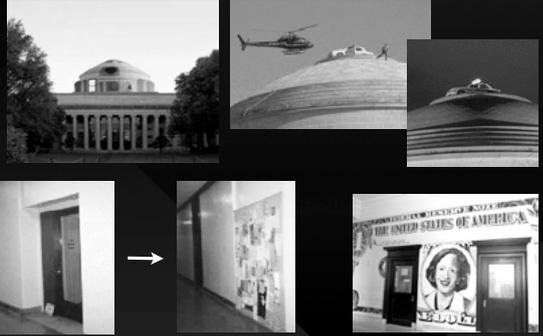


At MIT, Large Lectures Are Going the Way of the Blackboard - NYTimes.com

MITOPENCOURSEWARE

MIT FIRE DEPT.

何故MITは、イノベティブなのか？
創意工夫・奇想天外・エンターテインメントの文化



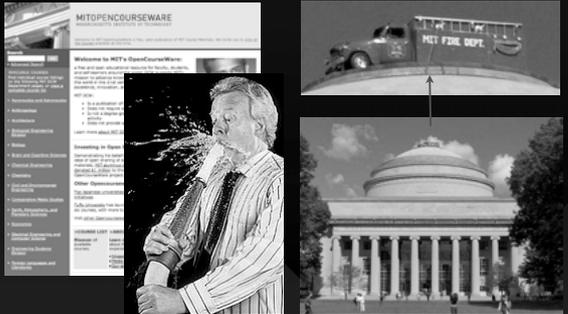
何故MITは、イノベティブなのか？
創意工夫・奇想天外・エンターテインメントの文化



京大もイノベティブ：折田先生像！



MIT's 1st Year Education: Drinking from a firehose?
MITの初年次教育：消火ホースから水を飲む？



Hands-On ENGINEERING class for Freshmen!
 2.00a/16.00a Spring 2009
 Exploring Sea, Space & Earth:
FUNdaMENTALS of Engineering Design

Prereq:
 8.01, 18.01
 Units: 3-3-3
 Earn CI Credit

Can substitute as pre-req for 2.007!

<http://web.mit.edu/2.00a/www>

Introduces core engineering themes, principles, and modes of thinking. Gain experience with fabrication and design for space/earth/ocean exploration-based projects. Learn more about the various engineering disciplines, including aero/astro, mechanical and ocean engineering.

...ENGINEER...DESIGN...
 ...CREATE...
 ...DREAM...PLAY...

Professors Alexandra Techet & Dava Newman

13

Learning Objectives

1. **Engage in Engineering inquiry and discussion and demonstrate curiosity.** Students accept responsibility for their own learning and are independent learners.
2. **Use and calculate** engineering FUNdaMENTALS (i.e., equations of motion, energy, constitutive equations, momentum, energy, free body diagrams, lift, drag, and propulsion) to **evaluate** designs and robotic vehicle performance (homework, reading assessments, laboratory recitations, design reviews).
3. **Approximate/estimate** performance of vehicles, and possess a breadth of **integrated fundamental knowledge** in the sciences and engineering, humanities and arts (e.g. design notebooks, technical reports, web portfolio, laboratory recitations, poster session).
4. **Effectively communicate their design ideas and process** through written report, oral presentation and final poster presentation.
5. **Team design** of robotic exploration vehicle (notebooks, prototypes, drawings (hard copy and electronic), computer models, operational subsystems, operational vehicle, peer instruction).
6. **Contribute** effectively to team design (peer evaluations, self evaluations, TA and instructor evaluation).



14

Exploring Sea, Space AND Earth:
 What do these three things have in common?



Space Shuttle



8th Largest Super-yacht
 Fred Allen's 417' Octopus



Maserati Race Car

15

These?



Sylvia Earle in the Jim Suit

Future Warrior Concept



Shuttle Astronaut

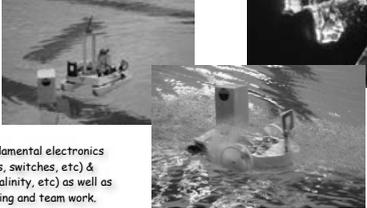
16

2.00A/16.00A The Projects

Remotely Operated Underwater Vehicles (ROVs)
 2006, 2007 & 2009




Land-Sea Rovers
 2008



Projects expose students to fundamental electronics (soldering, circuits, fuses, LEDs, switches, etc) & instrumentation (pressure, temp, salinity, etc) as well as fabrication skills, trouble shooting and team work.

17

21世紀のオープンエデュケーションの可能性を探る

- 「オープンエデュケーションによって、教えと学びをどのように進展させられるか」を、カーネギー財団の出版プロジェクトを通して検証・模索
- 38人のオープンエデュケーションのリーダーと専門家による全24巻を収録
- これらのプロジェクトや機関が体得した知見や将来へのビジョンを網羅: OKI, IMS, CNI, Sakai, Moodle, iCampus, VUE, Mellon Foundation, OCV, Connexions, OLI, MERLOT, OpenLearn, SOFIA, Creative Commons, Hewlett Foundation, CASTL, VKP, ISSOTL, Open University, Carnegie Foundation, LAMS, 他
- 通常のハードカバー版に加えて、Creative Commonsを使用し無料ダウンロード版も提供

<http://mitpress.mit.edu>
 Search: "opening up education"

OPENING UP EDUCATION

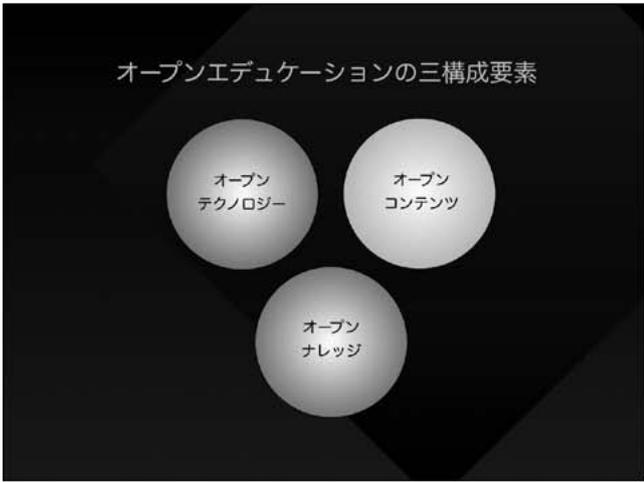
The Collective Advancement of Education through Open Technology, Open Content, and Open Knowledge



Edited by Toru Iiyoshi and M.S. Vijay Kumar

MIT大学出版局より刊行 (2008年)

18



19

拡がり続けるオープンコンテンツの世界 既に何万ものオープンな教材が利用可能

and more...

20

MIT OpenCourseWare: 2000以上の講義教材・ビデオを公開

MIT OPENCOURSEWARE
MASSACHUSETTS INSTITUTE OF TECHNOLOGY

Welcome to MIT's OpenCourseWare!

MIT OCW

Investing in Open Sharing

Other OpenCourseWare Projects

21

OpenCourseWareコンソーシアム

OPEN COURSEWARE CONSORTIUM

USE
SHARE
SUPPORT

OPEN SHARING, GLOBAL BENEFITS

JOIN NOW

世界各国の100以上の大学・機関が参加し、既に数千もの講義教材が公開されている。

22

ウェブ上でオープン化されている講義教材や授業ビデオは、よりよく学び、よく教えるための宝庫!

KYOTO U OPENCOURSEWARE

Welcome to Kyoto-U OCW

Message from President

NEWS

23

24

Open Learning Initiative (Carnegie Mellon University)

より深く、より効率的に、より確実に学ばせる工夫

● AI(人工知能)技術を応用した自学サポートツール(Cognitive Tutor)をコース教材と共に提供

What is the magnitude of the sum?
R = N

What is the direction of the sum?
θ = degrees

(Candace Thille, 2007)

● 自習過程の学習診断結果を教員や学生自身に伝え、理解にくいにくい概念や学習項目を明らかにする。

(Candace Thille, 2007)

大学教育におけるFlipped Classroomも可能
Open Learning Initiative (Carnegie Mellon University)

- 学習科学や認知科学に基づいたコース設計
- 効率的・効果的な学習・教授の追求
- 理解度・学習進度の可視化
- 教授法・学習法・教材の改善のための教員と学生のコミュニケーションを支援

Peer Instruction

基本的な概念や手法に対して学生の注意を集中させながら、講義中の学生同士のインタラクションを通じ深い理解を促す教授・学習方法

学習情報分析を利用しアクティブな協調学習を最適化

Prof. Eric Mazur's Group
@Harvard University

映画 "Minority Report"
教育版？

31

21st century education is about

- creativity
- cultural awareness
- problem solving
- innovation
- civic engagement
- communication
- productivity
- collaboration
- accountability
- exploration
- initiative
- responsibility
- leadership

Today, teachers must be, and learners must be

- innovators
- mentors
- entrepreneurs
- motivators
- illuminators
- catalysts
- teachers
- researchers
- synthesizers
- innovators
- explorers
- ?

32

open study

Tutoring Redefined

Get free help instantly from over 100,000 students just like you.

Get Started

Get live help

Meet students

Become a hero

33

OpenStudy : 世界中の学生が学び合い教え合う

「リアルな繋がり感が、インパじゃないっす！」

「Yahoo!知恵袋とは、全然違う世界です！」

34

manabee

大学入試の勉強法

大学入試の勉強法

大学入試の勉強法

35

Yahoo! 知恵袋

解決済みのQ&A

京大入試試験のカンニングについて

1つめ、
多大な受験者の中から、この悪行者を特定するのはほぼ不可能ですよね…(恐らく、合戦させてしまうのでしょうか？)

2つめ、
あんな長文を短時間で書けるのであれば、写メが昔で取づかれますし…

3つめ、

仙台の予備校生 関与か

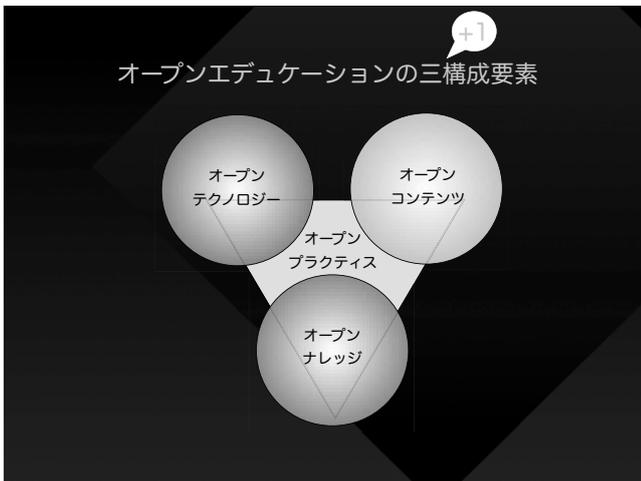
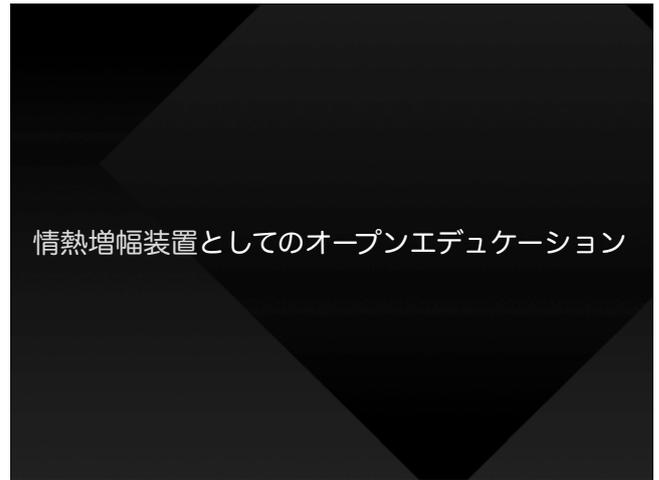
36

「今この教育界の激動の時代に、大学の教育も変革を余儀なくされると思います。その真只中にある中で、私たち学生の身分ではその変革を見ているしかありませんが、ただそれに振り回されるのではなく、主体的に考え、取捨選択することが大切であろうと思います。変革の背景をきちんと理解していると、教育の目指す方向性がよりはっきりと分かり、より効率的に学ぶことができると思います。」（工学部1年 中村拓哉君）

「（オープンエデュケーションを）積極的に利用したいと思った。具体的には、大学の講義の補助教材として使ってみたいと思う。（中略）京大OCWなどを利用して、講義の内容を完全に理解し、その理解をさらに深めたいと思う。」（文学部1年 足利聡太郎君）

「ある事柄について本当に学びたい者同士がオンライン上でコミュニティを作り、議論などを交わしながら積極的に学ぶというのは、これまでは存在しなかった学習形態である。OpenStudyを通じてこのような学習形態を構築すれば、従来の何倍も効率よく、そして楽しく学習できることは間違いないと感じた。また、これは何も学ぶ側に関してのみ言えることではなく、教える側に関しても言えることである。」（経済学部1年 宮垣徹哉君）

をテキストにしたポケゼミを通じ、京大の1年生たちは、何を感じ考えたか？



Flipped Classroom: 自宅で授業・教室で復習

Massive Open Online Course

世界から10万人以上が登録
 学習評価サービスも提供
 コース修了者には認定書を発行

COLLEGE DEGREES School Partner Programs

Stanford to Experiment with Massive Open Online Course

Since the advent of online learning, tech-savvy educators in the realm of higher education have been experimenting with its possibilities. Right now, one of the newer applications of online education has been massive open online courses, or MOOCs. MOOCs allow one or more tertiary and/or education to host a course that can be accessed by an unlimited number of people at any location, provided they have internet access. The MOOC can be a one-day or week-long course, or a full-fledged, semester-long course. MOOCs are "open" in the sense that participants do not have to pay for the course, and are usually only required to register.

Stanford University will be experimenting with a MOOC this fall by allowing open online access to a course titled Introduction to Artificial Intelligence taught by computer science professor Sebastian Thrun and Google research director Peter Norvig, according to the Chronicle of Higher Education. The course on artificial intelligence is already a popular one at Stanford, drawing in about 300 students for the classroom-based course. Thrun is hoping that by bringing the class online, he and Norvig can create the largest course on artificial intelligence ever taught, according to his video announcement.

43

Massive Open Online Course: MITx

MIT launches online learning initiative
 MITx will offer courses online and make online learning tools freely available.

MIT today announced the launch of an online learning initiative internally called "MITx." MITx will offer a portfolio of MIT courses through an online interactive learning platform that will:

- organize and present course material to enable students to learn at their own pace
- feature interactivity, online laboratories and student-to-student communication
- allow for the individual assessment of any student's work and allow students who demonstrate their mastery of subjects to earn a certificate of completion awarded by MITx
- operate on an open-source, scalable software infrastructure in order to make it continuously improving and readily available to other educational institutions.

44

MOOC Wars? Coursera vs. edX

スター教師たちが参戦する
 「教えるバトル・ロワイヤル」

大学(組織) → 教員(個人) というシフト

45

Coursera Courses Institutions About Sign In Sign Up

Search by course name, category, university, or instructor

Sort by Starting soon

Starting soon	Verdict	Categories	Start Date	Duration	Enroll
0	0	0	January 2014	12 weeks long	Enroll
11	39	2	Jan 1st 2014	7 weeks long	Enroll
2	1	0	Jan 13th 2014	10 weeks long	Enroll
0	0	0	Jan 13th 2014	10 weeks long	Enroll
0	0	0	Jan 20th 2014	7 weeks long	Enroll
547	26	51	Jan 20th 2014	12 weeks long	Enroll
20	28	61	Jan 20th 2014	5 weeks long	Enroll
23	0	0	Jan 20th 2014	5 weeks long	Enroll

46

TAKE FREE ONLINE COURSES

from the world's best colleges and universities

all | current | new | past | Engineering | all schools | find

Courses: Showing 1 - 15 of 83

Course ID	Course Title	Instructors	Start Date
CS50c	Introduction to Computer Science	D. Malan, M. Harlow, ...	1 Jan 2014
edXDEMO101	edX Demo	Brown, Donald, Fick, ...	1 Jan 2014
UT.6.01x	Embedded Systems - Shape The World	Johnson, K. Verma, ...	27 Jan 2014
16.110c	Flight Vehicle Aerodynamics	Diela, A. Stanga, ...	27 Jan 2014
Louv1.01x	Paradigms of Computer Programming		

47

8.01x = The Best Remix of 8.01 + 8.01T

edX NOW IT WORKS COURSES SCHOOLS REGISTER NOW Login

COURSE DETAIL

Classical Mechanics

Covers the basics of Newtonian mechanics, fluid mechanics, kinetic gas theory and thermodynamics in addition to exploring other real-world phenomena.

ABOUT THIS COURSE

8.01x is an online version of Classical Mechanics, which is the first of MIT's introductory physics courses. The course covers the basic concepts of Newtonian mechanics, fluid mechanics and kinetic gas theory. A variety of other interesting topics are covered, such as: rotating phenomena, musical instruments and astronomical phenomena such as binary stars, neutron stars, black holes, stellar collapse and supernovae. This will also give a peek into the intriguing world of quantum mechanics.

The course follows the MIT on-campus class as it was given by the renowned Professor Walter Lewin in the fall of 1999. This includes his video lectures, problem solving sessions, and, of course, his famous in-class demonstrations. Professor Lewin, proclaimed "a Hero Star" by The New York Times, has supplemented his lectures by including interactive questions to help students check their understanding during the lecture hours.

Prerequisites: Some mathematical training is needed (high school level Algebra and Trigonometry) and an introduction to Calculus. At MIT, 8.01 Single Variable Calculus is a prerequisite for 8.01 (the two Coursera edX teams in the course).

Register for 8.01x

48



55



56

<ゼミ学生の声>

今では、大学生が大学に行く意味が、もはや「就職のため」になっているのが事実だと思います。やりたい勉強よりも学歴社会が重くのしかかってきます。

僕もやりたい勉強よりも就職(その他学歴的格差)を優先して京大にきました。その意味では、「授業が自分のやりたい勉強を邪魔してる」と感じないとは言いきれません。「じゃあ辞めれば」との意見がありました。もっともだとは思いますが自分に置き換えた時には本当に「辞める」と言えるのでしょうか？

個人的には「いやいや勉強する」のは何も身につかないと思っているので、しぼられた環境で学ぶものはないと思います。

だが好みだけでは選べない現状がある。だから、新たな発見があるかもしれないと納得していくしかない、そういう感じののかなと思いました。(法学部1年 H・Y君)

57

<ゼミ学生の声>

大学の存在意義について考え、問題点を意識したうえでオープンエデュケーションのこれからについて考えるのは大切かもしれませんが、その議論に拘泥してオープンエデュケーションの流れが立ち止まってしまったり、仲たがいが起こったりするのであれば、それはもったいないことだと思います。

今の大学教育中心の世の中で大学教育の本質がハッキリしないならば、それこそオープンエデュケーションによる教育の成果として大学教育の本質が今までよりハッキリ見えてくる可能性も大いにあるからです。

要はオープンエデュケーションがもっとじゃんじゃん広がってしまえ、と思うのです。(教育学部1年 K・Yさん)

58

“If we teach today as we taught yesterday, we rob our children of tomorrow.”

- John Dewey (1916)

59

“If we learn today as we learned yesterday, we rob ourselves of tomorrow.”

60